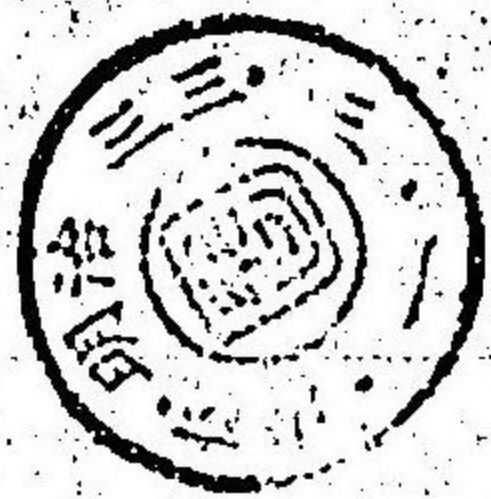


下村三四吉編



西洋歷史

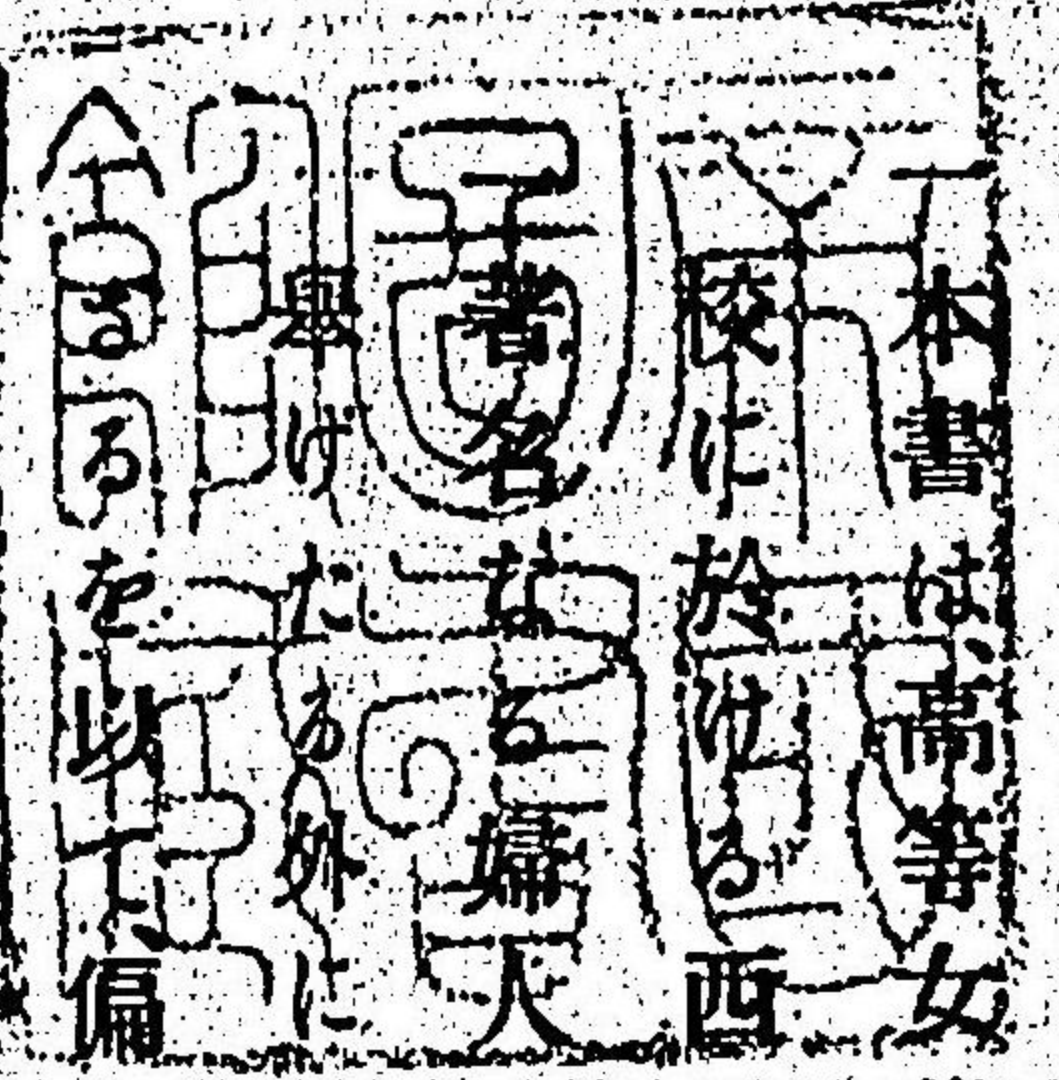


東京

成美堂
目黒書房
合梓

女子西洋歴史教科

例言



本書は高等女學校女子師範學校及び此等と同程度の諸女學校に於ける西洋史の教科用書に充つる目的を以て編纂せり。著者たる婦人の事蹟及び女子に關係深き事柄等は本文中に擧げたる外にも小活字にて註記したれど固より一斑に過ぎざるを以て偏に教師諸氏の補遺を待つものなり。

一西洋史を授くるに常に東洋或は特に本邦との關係に注意すべきは言ふまでもなし。よりにて本書はその概要を本文中に記し更に第三篇近世史以下には各章末に「本邦關係要事年表」

或は『東洋關係要事年表』を附し、以て既に本邦史及び東洋史にて學びたる事實を追憶・連想して、明確に事情の源委を會得せしめんことを期したり。教授の際、適宜取捨して、これを利用せられんことを望む。

一外國の人名・地名の稱呼は、主に英語の發音に依れり。されど、從來慣用せられたるものは、必ずしも拘泥せず。

一人名・地名は、概ね片假名にて記したり。但し、地名中、左に掲げたる洲名并に國名の略字は、便宜上、時にこれを使用せり。

- 歐(エロッパ) 米(アメリカ) 英(イギリス)
- 佛(フランス) 獨(ドイツ) 普(ロシア)
- 澳(オーストリア) 露(ロシア) 蘭(オランダ)
- 葡(ポルトガル) 西(スペイン) 以(イタリア)

土(トルコ)

一本書と相参照すべき沿革地圖は、これを別冊としたり。

明治三十三年一月

編者誌す

女子教科
西洋歴史

目次

總説

一頁

第一篇 上世史

〔壹〕 古代東方諸國の興亡

第一章 「エジプト」 (附 「フニシア」及び「ヘブリュー」)……………三

第二章 「バビロニア」及び「アッシリア」……………

「ペルシア」の一統……………一〇

〔貳〕 「ギリシア」の隆替……………

第一章 「スパルタ」及「アゼンヌ」の興起……………一六

第二章 「ペルシア」戦争……………二二

第三章 「アゼシス」「スバルタ」「セーペス」の
争覇 「ギリシア」文物一斑……………二四

第四章 「マセドニア」の一統 「アレキサン
ダー」大王の東征……………二九

〔参〕「ローマ」の盛衰……………

第一章 「ローマ」の興起……………三三

第二章 諸外國の征服……………三七

第三章 共和政の末路 「シーザー」の
事業……………四二

第四章 帝政の盛衰 「キリスト」教の
弘布……………四六

第二篇 中世史

第五章 北蠻の侵入 「西」ローマ帝國の
滅亡……………五二

第一章 東「ローマ」帝國 「アラビア」人の
勃興……………五七

第二章 「フランク」王國の強大 「シャーレ
マン」大帝の事業……………六二

第三章 「ローマ」法王の專權 十字軍……………六五

第四章 中世歐洲社會の狀態……………七三

第五章 歐洲列國の發達……………七六

第六章 蒙古人及び「トルコ」人の侵入……………七八

第七章 學藝の復興及び海上發見……………九一

第三篇 近世史

第一章 宗教改革……………六

第二章 佛國の内亂 英國の隆盛
「オランダ」共和國の獨立……………一〇五

第三章 三十年戦争……………一三三

第四章 「ルイ」十四世時代の「フランス」……………一七七

第五章 英國の政變……………二三三

第六章 「ロシア」の勃興 「ピーター」大帝
及び「カザリン」二世女帝……………二六六

第七章 「プロシア」の振起 「フレデリック」
大王、「アウストリア」女王、「マリア」
「テレサ」……………三〇〇

第四篇 最近世史

第八章 北米合衆國の獨立……………一三五

第九章 佛國の大革命……………一四〇

第十章 「ナポレオン」の覇業(上)……………一四七

十一章 「ナポレオン」の覇業(下)……………一五一

第一章 神聖同盟 「アメリカ」諸國及び
「ギリシア」の獨立……………一五九

第二章 佛國の政變 「ナポレオン」三世
……………一六三

第三章 「イタリヤ」の一統……………一六九

第四章 普・奧戦争 普・佛戦争
「ドイツ」帝國の一統……………一七一

第五章 北米合衆國南北戦争……………一七六

第六章 露土戦争 三國同盟……………一八〇

第七章 「ヴィクトリア」女皇の英國……………一八六

第八章 最近事件……………一九九

第九章 現代の開明……………二〇二

以上……………

女子教科
西洋歴史

下村三四吉編

總說

西洋史と東洋史
西洋歴史は、東洋歴史と相並びて、各世界歴史の一半をなすものなり。故に、東西兩洋の歴史を明かにして、始めて、世界に於ける諸邦國諸民族の關係變遷を知り、その大勢に通ずることを得べし。

西洋史上の主動者
東洋歴史の大部を占むるものは、黄色人種の盛衰興亡なるが、西洋史上の主動者ともいふべきものは、所謂白色人種なり。白色人種は、亦「カウカサス」人種と稱せられ、

- (一) 「アリア族」
- (二) 「セム族」
- (三) 「ハム族」

アリア種族
 の三大族に別たれたり。「インド」并に「ペルシア」の文化を開きたりし民種は何れも「アリア族」の一派に屬せり。「アリア族」中には更に「ギリシア種」「ラテン種」「ケルト種」及び「スラヴ種」の別ありて、歐洲の諸國民は、概ね此等の諸種族中に包括せらる。その詳細は、以下各篇の本文に記述する所と相對照してこれを知るべし。

第一篇 上世史

〔壹〕 古代東方諸國の興亡

第一章 「エジプト」(附「フェニシア」及び「ヘブリー」)

支那の黄河附近及び「インド」の「インダス」「ガンジス」兩河流域地方に於て、文化の光明最も早く發したりしことは、諸子の熟知する所なり。然るに、この兩古國より一層早く開明に赴き、世界文化の先驅をなしたりし國あり、「エジプト」は即ちこれなり。

○エジプト文化早發の原因
 「エジプト」の文化の早發は、重に「ナイル」河の利に賴れるなり。「ナイル」河は毎歲一定の時期に漲溢して泥土を遺

建國の年代

族制



エジプト人の耕作の圖

し、沿岸の地爲に甚た肥沃となり、人民は種を播くのみにて收穫を得るほどなれば、生活極めて容易く、その繁殖發達上、非常なる便益を享けき。

「エジプト」人は「ハム」族に屬し、その建國の年代は詳かならずといへども、凡そ今より六千年前頃なるべし。世襲の王、全國の政權を握り、僧侶之を輔け、その下に武士及び庶民ありて、族制の嚴なること、「インド」にも劣らざりき。

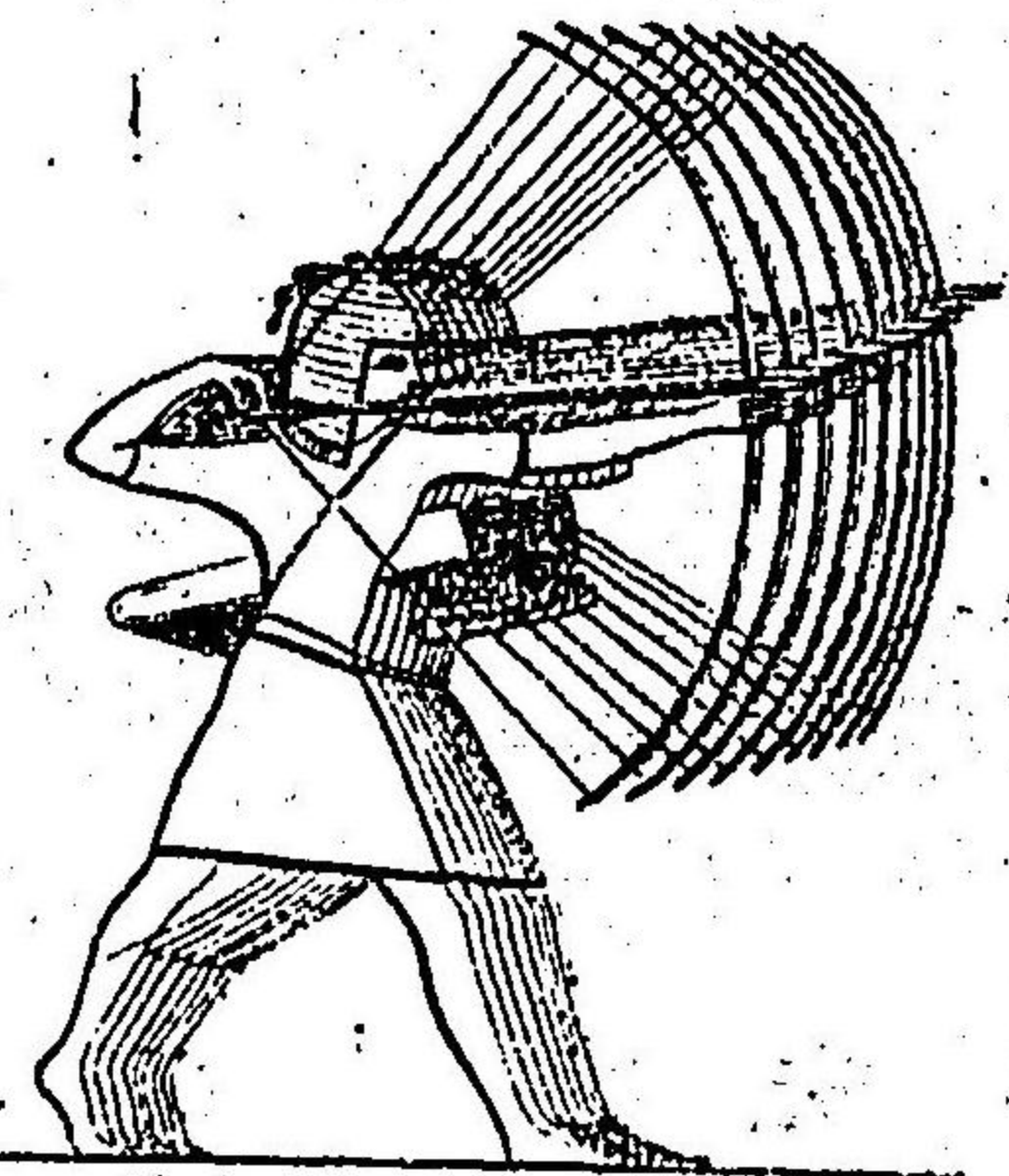
當初の首府は「メンフィス」に在りしが、後境土の南方に廣まるに及びて、これを

沿革の大略

「セーベス」に遷せり。

かく「エジプト」の漸く強盛に赴ける際、「セム」族の遊牧蠻民「シリア」地方より侵入して「エジプト」を滅し、代りて全國を

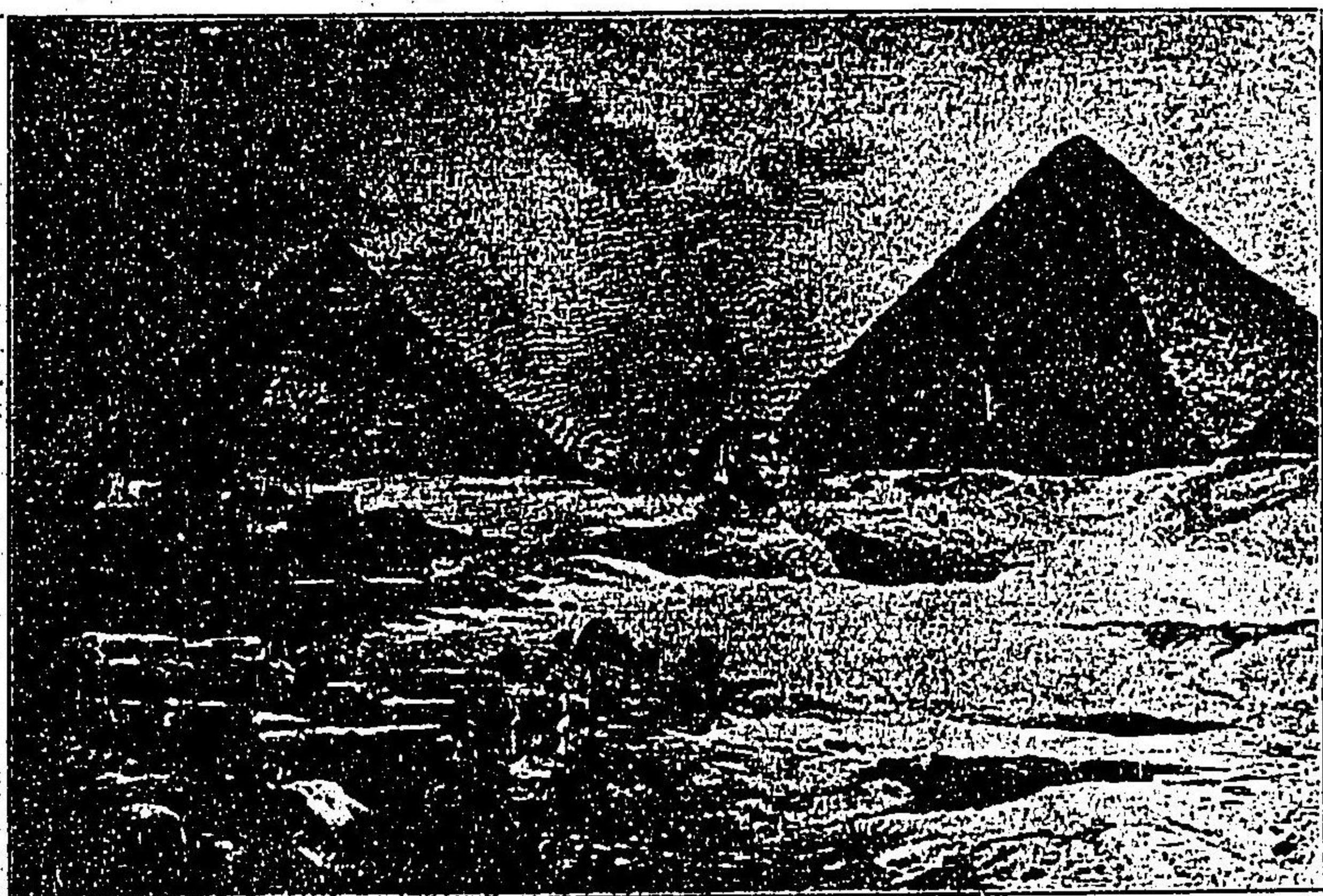
エジプト弓手隊の圖



制すること、殆ど五百年の久しきに亘りぬ。然るに、紀元前一六〇〇年の頃、「エジプト」人奮ひ起り、蠻

族を境外に逐斥して、國勢を回復せり。爾後、「エジプト」の版圖は更に擴張せられ、學問・技術の發達も著しく、こゝに三百年間の全盛時代を開きぬ。

技能



「エジプト」人の特に秀でたるは建築の技術にして、その偉絶なる金字塔の如きは、實に人をし驚歎せしむ。こは國王の墳墓にして、中には二十年間常に十萬の工夫を使役して築造せるものありといふ。その他、神殿、王宮は壯嚴を極め、紀念碑の類も亦宏大を以て著るし。彫刻及

學問及び文字

び繪畫は、一種の進歩をかせりといへども、概ね活動變化の趣に乏し。



象形文字の圖

學問にては、數學・天文學・醫學等頗る發達し、測量の術もまた行はれ、文字は「ヒエログリフ」と稱する象形文字ありき。人の死後その屍體を「みいら」として保存する風習ありて、醫學の發達を助けたり。この風習は、靈魂の不滅を信じたるに起因し、國人一般に宗教の信仰深く、「ラ（太陽）及び「ナイル」の河神等重に拜祀せられき。

宗教
○フェニシ
ア

當時、地中海の東岸に「フェニシア」と稱する小國ありて、早くより「エジプト」と交通を開きけり。國土の位置并に地

航海通商

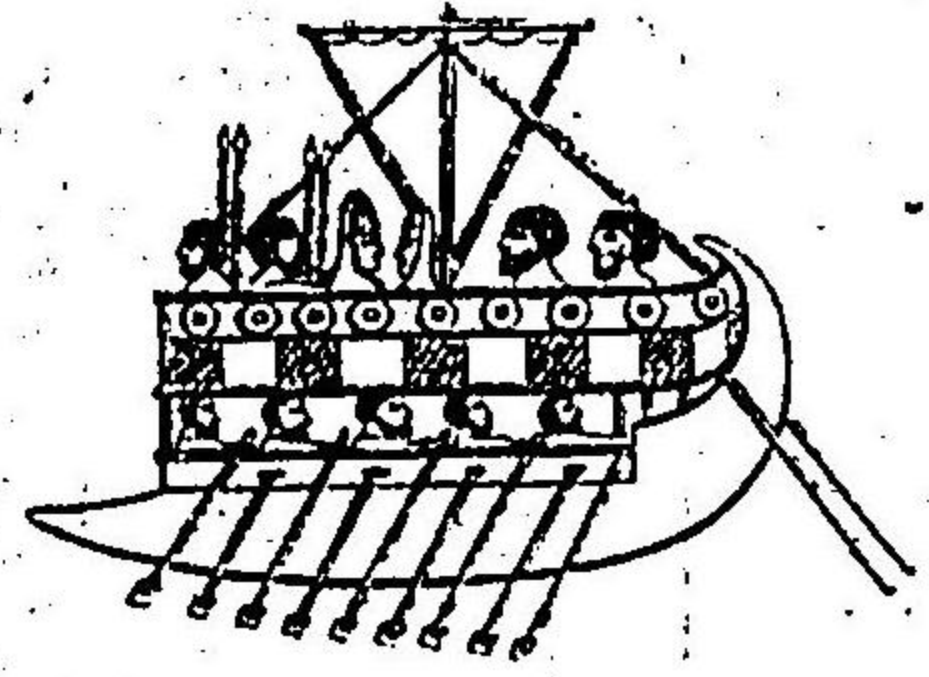
工藝

智識の傳播

音標文字の發明

○ヘブリュー

勢は航海通商に適し、國人は甚だ敏捷なりしかば、西は「パ
ルナツク」海の沿岸地方より東は「インド」に至るまで、廣く
往來して、盛に商業貿易を營み、また地中海岸の各地に殖



船兵のアシニエフ

民せり。諸種の工藝にも長じ、織物染料、
玻璃等の製品は、特に盛名を擅にしき。
この國人が、交通事業によりて智識の傳
播を助けたる大功の外に、その發明に係
かる音標文字が歐洲諸國の文字の基礎
となれることは、世界文明史の上に特筆せらるべし。紀
元前一一〇〇年頃より三四百年間は、この國の最も繁榮
を極めたる時なりき。

「フェニシア」人に次ぎて、「エジプト」と關係多きは「ヘブリュー」

モセス

一神教

祭政一致

ローマ字	ギリシア新字	ギリシア古字	フェニシア字
A	A	Α	𐤀
B	B	Β	𐤁
L	Λ	Λ	𐤂
X	Ξ	Ξ	𐤃

圖革沿字アシニエフ

人にして、「フェニシア」人と同じく「セム」種族に屬せり。
「ヘブリュー」人の本地は、今の「パレスタイン」地方なるが、
後「エジプト」に移り、留まる
こと數百年、その族大に繁
殖せり。「エジプト」王これ
を嫉みて、苦役絶えざりし
かば、紀元前一三〇〇年の頃、モセス族民を率ゐて埃及を
逃れ、その故地に復りき。初めは王を立てず、國人の信奉
せる唯一の天帝を國主とし、高僧神意を承けて政治を行
ひたりしが、紀元前一〇五〇年頃改めて王政となせり。

隆盛

第二代の王、ダヴ。ド。英邁にして能く兵を用ゐ、國境を擴めて、ユーフラテス河に達せしめたり。嗣王、ソ。ロ。モ。シ。賢明にして、内治を勵み、また埃及王と婚を結び、フェニシアの諸市と交通を開き、國富大に増進せりき。然るに、王の歿後、ヘブリーは分れて、イスラエル及びシユデアの二國となり、前者は、アッシリアに滅ぼされ、後者は更に、バビロニアに滅ぼされたり。

衰亡

第二章 「バビロニア及びアッシリア」

「ペルシアの一統

「ナグリリス及びユーフラテス兩大河間ある、メソポタミ

メソポタミ
ア地方の古
國

ア地方は、また氣候温和、地味豊沃にして、世界の文化早發地の一とす。ここに起りたるは、バビロニア及びアッシリアの兩古國なり。

○舊バビロニア

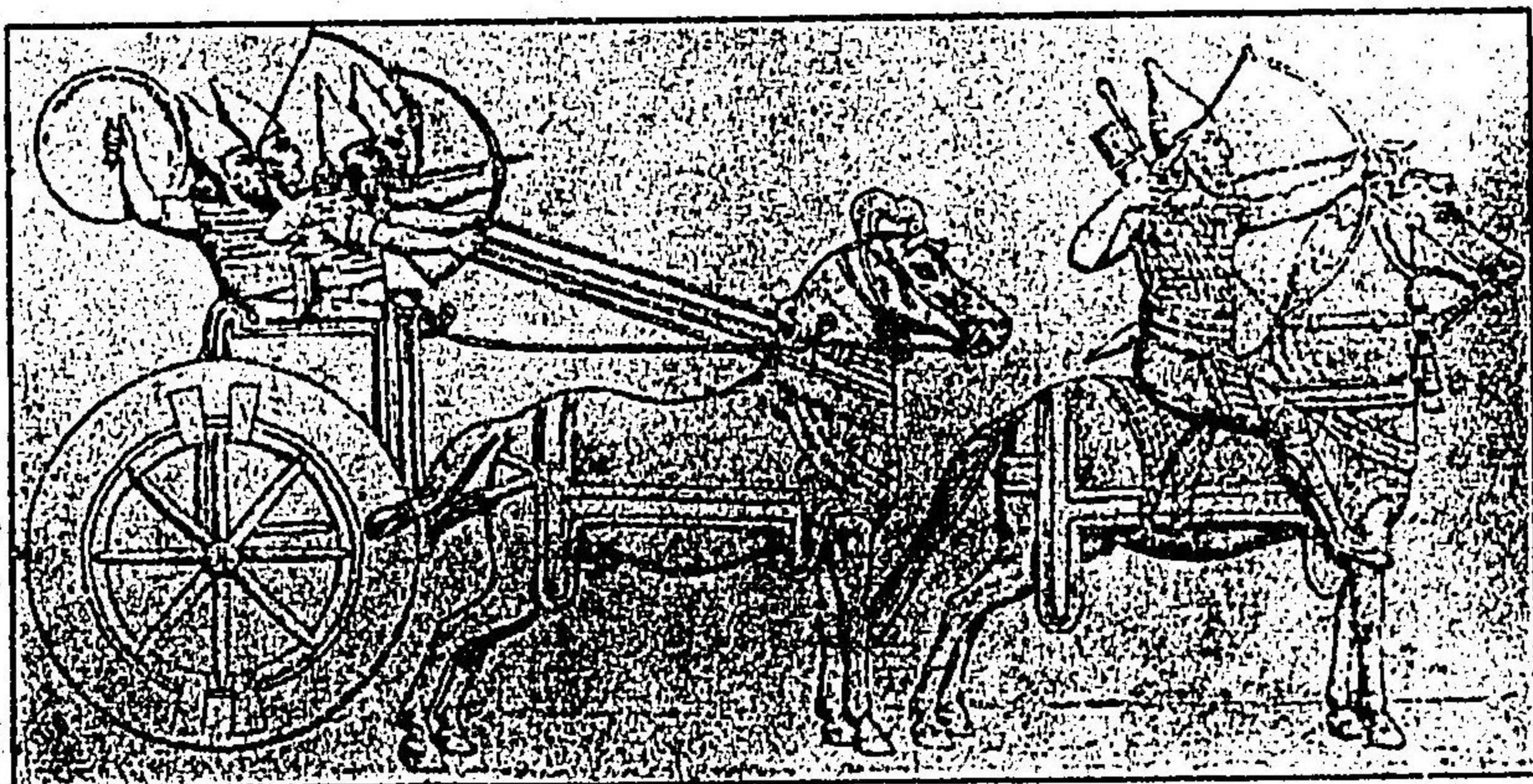
紀元前二三〇〇年の頃、メソポタミアの南部に住せりし「ハム」種族の「ニムロツド」といへるもの、始めて舊バビロニア王國の基を建て、爾後數百年の間に漸く強大に赴き、「バビロン」を以て首都となせり。然るに、「ナグリリス」河の上流なる「セム」種族の「アッシリア」人次第に勢力を得、「ニホヴェ」に都し、數「バビロニア」と戦ひしが、紀元前一二五〇年に及び、遂にこれを征服せり。

○アッシリア

「アッシリア」國は、勢に乗じて、「フェニシア」を従へ、「イスラエル」を滅ぼし、「シユデア」を服し、「エジプト」を略しぬ。かくて、紀

征服事業

統治の不完
全



アッシリアの戦車

元前第七世紀の頃には、その版圖、裏海より「ナイル」河に及べる西南「アジア」一帯の地を包有し、無前の一大王國を成したり。「アッシリア」人は性勇悍にして、戰術に長じ、且つ當時英主相つぎて出でしかば、能く大版圖を拓きたりしが、統治法の宜しきを得ざりし爲め、その結合甚た薄弱なりき。裏海の南部に「メデア」國あり、も「アッシリア」に屬せしが、後獨

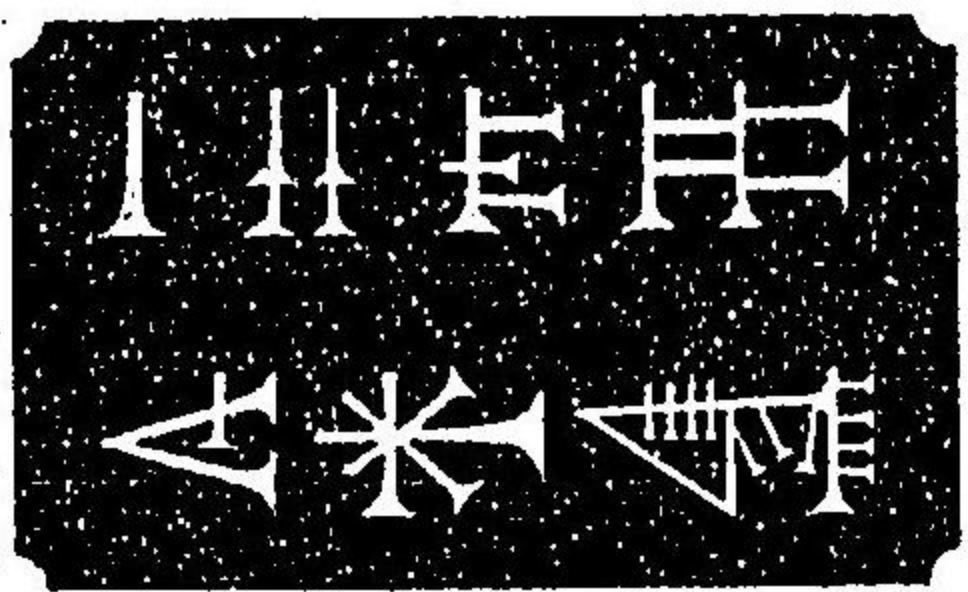
滅亡

○新バビロニア

バビロンの富榮

立して漸く勢を得たり。「メデア」王は、遂に「アッシリア」の國運稍衰へたるに乗じ、「バビロン」の太守「ナボポラッサル」も兵を合せて「アッシリア」を攻め、全くこれを滅ぼせり。實に紀

元前六二五年なりき。



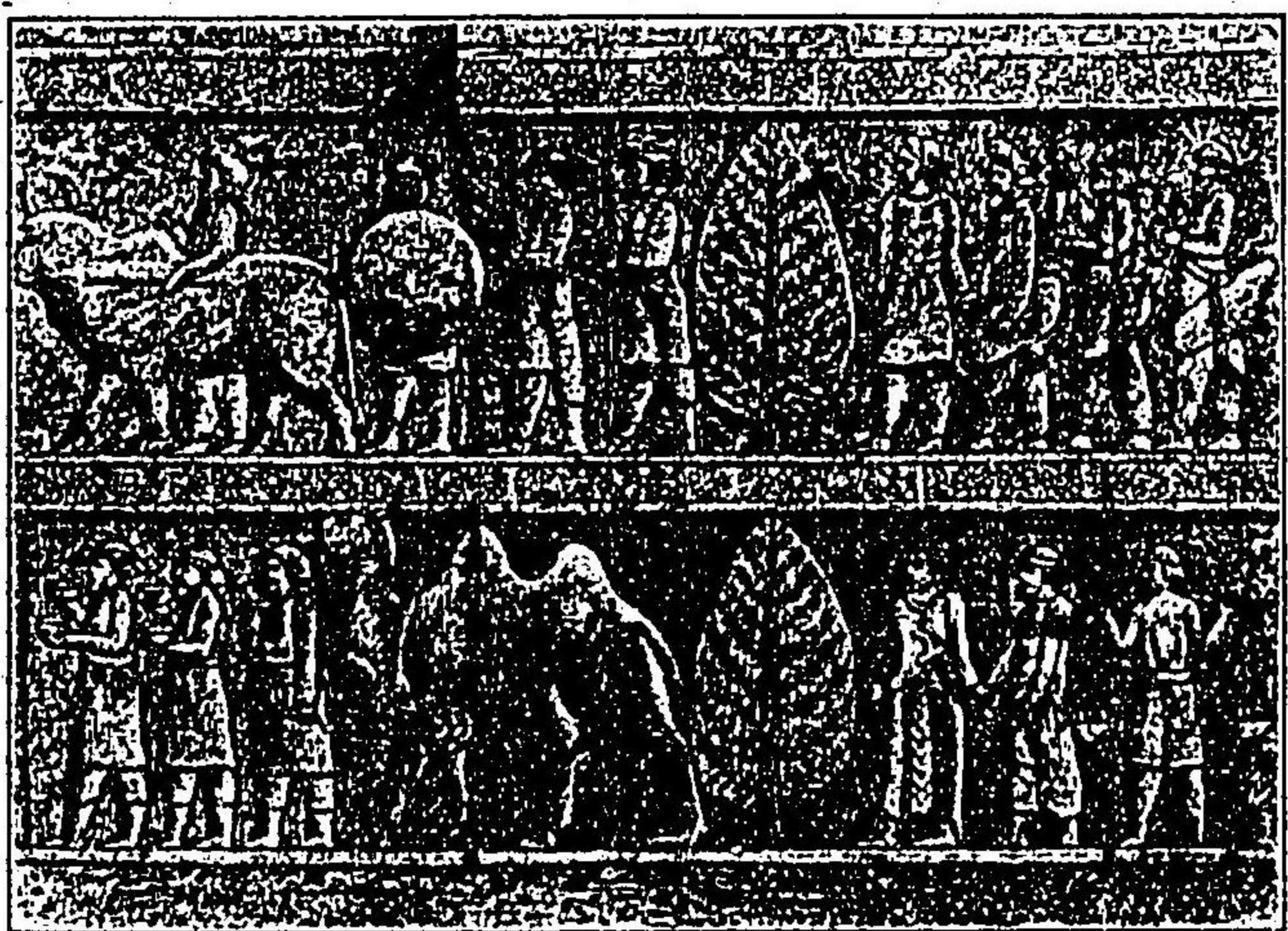
楔形文字の圖

ここに於て「アッシリア」王國の南部には新「バビロニア」王國再建せられ、その第二王「ネブカドネザル」の如きは、「エジプト」を征服し、「シリア」を滅ぼし、武威西亞に震ひぬ。王は

また、その國都「バビロン」を壯麗にし、運河を通じ、通商を盛にし、學藝を獎めしかば、國運甚た隆盛にして、文化の進歩また著しかりき。天文學・宏大なる建築・刺繡・毛氈・及び陶器の製造等は、この國人の所長なりきといふ。

滅亡

○ペルシア



諸國人ペルシアに貢する

「ネブカドネザルの死後、その嗣王庸劣なりしかば、バビロニアは、再興後九十年を出でずして、新興の一國、ペルシアの滅ぼすところはなかり。」

「ペルシア人は、メデア人と同じく、アリア種族にして、その地は、もろメデアの屬領たりき。然るに、ペルシアの知事サイラス、英武にして能く兵を用ゐ、紀元前五五〇年終に、メデアを滅ぼし、小アジアを併せ、次ぎて、バビロニアを

一統事業

版圖の廣大

ダリウスの治績

征服し、シリア及びフェニシアも、またその領有に歸せり。子カンビセス王またエジプトを征してこれを従へき。

ここに於て、ペルシアの版圖は、東は、インダス河邊より、西は地中海に至り、北は裏海及び黒海より、南は、ペルシア灣に達し、古來西方アジアに存在したりし諸國は、皆ここに包括せられ、領土の廣大なること遙に、アッシリアに過ぎたりき。

「ペルシアの第三王、ダリウスは、この大版圖を承けて、これを二十州に分ち、各州に知事、將軍を置き、監察使を設け、交通、軍備、殖産、收税等の事整備せざるはなく、ペルシアの勢威はその隆盛を極めたり。

然るに、これより先、歐洲東南の一半島に、ギリシア人起

りて、漸く勢力を加へ、ここに東西に於ける二強國は、相衝突するに至れり。

〔貳〕「ギリシア」の隆替

第一章 「スバルタ」及び「アゼンス」の興起

ギリシア半島の風土

「ギリシア」の半島は、地中海の東部に位し、内地は山岳連亘せりといへども、沿岸は港灣に富みて、交通早く開け、氣候溫和、風物また秀美にして、自ら文化の發達に適せり。かかる美地に入り來りて、歐洲の文化の先導者となりしは、即ち「ギリシア」人にして、も「アジア」より遷りて、ここに土着するに至れりといふ。「ギリシア」人は四派に分れ

ギリシア人の二大族

しが、南部に住みし「ドリア」及び中部に住みし「アイオニア」の二種族は最も重要なりとす。

「ギリシア」にては、早くより許多の小王國並び立ち、漸次に發達の運に向ひけるが、「スバルタ」「アゼンス」の二都府、先づ頭角を現はしぬ。

○スバルタの興起

尙武教育

「スバルタ」人は、元來勇武の俗ありしが、凡そ紀元前九〇〇年の頃に「リカルガス」出でて「スバルタ」の國法を定め、特に國民の尙武教育を奨励せりき。即ち政府は市民の結婚に干涉し、男兒の強健なるもの七歳に及べば、これを國立の教育所に入れて、武技を練習せしめ、兼ねて質素を旨とし、廉耻を尙び、紀律を守り、艱難に耐へ、國家を重んずるの

スバルタの
婦人



アシリギの兵士

氣風を養成したり。女子の教育に就きても、また此等の諸點に注意し、身體の強壯と婦徳の完美を圖りしかば、その婦人の美談永く傳はりて、人を感奮せしむるもの、少なしとせず。「スバルタ」は、王政にして、元老

院及び民會ありて國家の大事を議せりき。かゝる「スバルタ」は漸く強大となり、紀元前六〇〇年の

○アゼンス
の興起

貴族と平民
との争

頃には悉く南部の諸國を服屬せしめしが、中部の雄邦「アゼンス」これと相對抗しき。



アシリギ少年

「アゼンス」は「アイオニア」人が建てし「アチカ」國の首府なり。初め王政なりしが、後之を廢して在職一年の執政官九人を置けり。然るに、貴族は政治上の全權を握り、平民の不平漸く甚しかりき。紀元前五九四年、執政官「ソロン」新に法制を定め、人民を財産の多寡に従ひて四級に分ち、國家に對する權利義務も亦これに準じて等差を立て、執政官に上るは第一級の人のみなれども、民會には各級の人民出席することを得せしめ、又貸借の法を定めて窮民の救済を計れり。

貴族と平民
との調和

民主政治

スパルタ人
とアゼンヌ
人との特性



女侍び及人婦アシリギ

その後、紀元前五一〇年「クリステネス」出で、更に制度を改革し、「ソロン」の制定せし四階級を廢し、國內を十區に分ち、各區より五十人の代議士を選出して議會を組織せり。これより「アゼンヌ」は民主政治の基礎確立し、人民皆一致して國事に盡力し、勢威頓に

振へり。

そもく「スパルタ」人と「アゼンヌ」人は全くその性質

氣象を異にし、「スパルタ」人が學藝を斥け、通商を賤み、一に勇武・質素を尙びたるに反して、「アゼンヌ」人は學問・技藝を重んじ、交通を盛にし、優美の思想に富み、また尙武の精神を失はざりき。而して、兩者殆ど同時に盛大となりたれば、相衝突せんとするに當りて、東方の大敵「ペルシア」の侵寇ありしかば、互に力を合せて之を禦ぐこととはなれり。

第二章 「ペルシア」戦争

小「アジア」の西岸には「ギリシア」の殖民地多かりしが、「ペルシア」が大一統の業を開くに及びて、悉くその版圖内に入れり。然るに、此等の殖民地は、數獨立を謀りて反亂を

戦争の起因

企て、本國「ギリシア」が兵を出してこれを援けたる事さへありき。これ即ち兩國交戦の原因となれるものなり。

ペルシア再度の敗北

「ペルシア王」ダリウス。紀元前四九二年、海陸の兩軍を發して「ギリシア」を征せしが、本國に達するに及ばずして空しく還りぬ。同四九〇年、王は更に遠征軍を出して「アッナカ」に上陸し、將に「アゼンヌ」に攻め入らんとせり。「アゼンヌ」の將「ミリナデス」これを禦ぎて、大勝を得たり。

ペルシアの再征

「アゼンヌ」にては、「ペルシア」の再舉を慮り、「セミストクレス」の説に従ひて、大に海軍を擴張し、以てこれに備へたり。既にして「ペルシア王」ダリウスは死し、子「ザークセス」父王の遺志をつぎ、紀元前四八〇年親ら水陸の大軍を率ゐて、「ギリシア」に進撃せり。「スパルタ王」レオニダス、手兵三百



スダニオレ

人に將こし、「セルモペレー」の險に據りてこれを扼したりしも、敵兵間道より我が背後に出づるに及び、一軍奮戦して、悉く之に死しき。ここに於て「ペルシ

ギリシア最後の大勝利

ア軍は長驅して「アッナカ」に侵入し、「アゼンヌ」府を焼けり。「アゼンヌ」府民は、悉く船に上りて難を避け、「セミストクレス」は自ら舟師を督して、大に「ペルシア」の海軍を「サラミス」灣に破れり。「ザークセス」王恐れて本國に逃れ歸りぬ。然るに、「ペルシア」の大軍は猶「ギリシア」に留まりしが、翌年「プラテア」に戦ひて之を敗り、同時に「ギリシア」の海軍はまた敵艦を小「アジア」の「ミカレ」岬に追撃して、全勝を收

めたり。

第三章

「アゼンス」「スバルタ」及び「セーベス」の争覇「ギリシア」文物の一斑

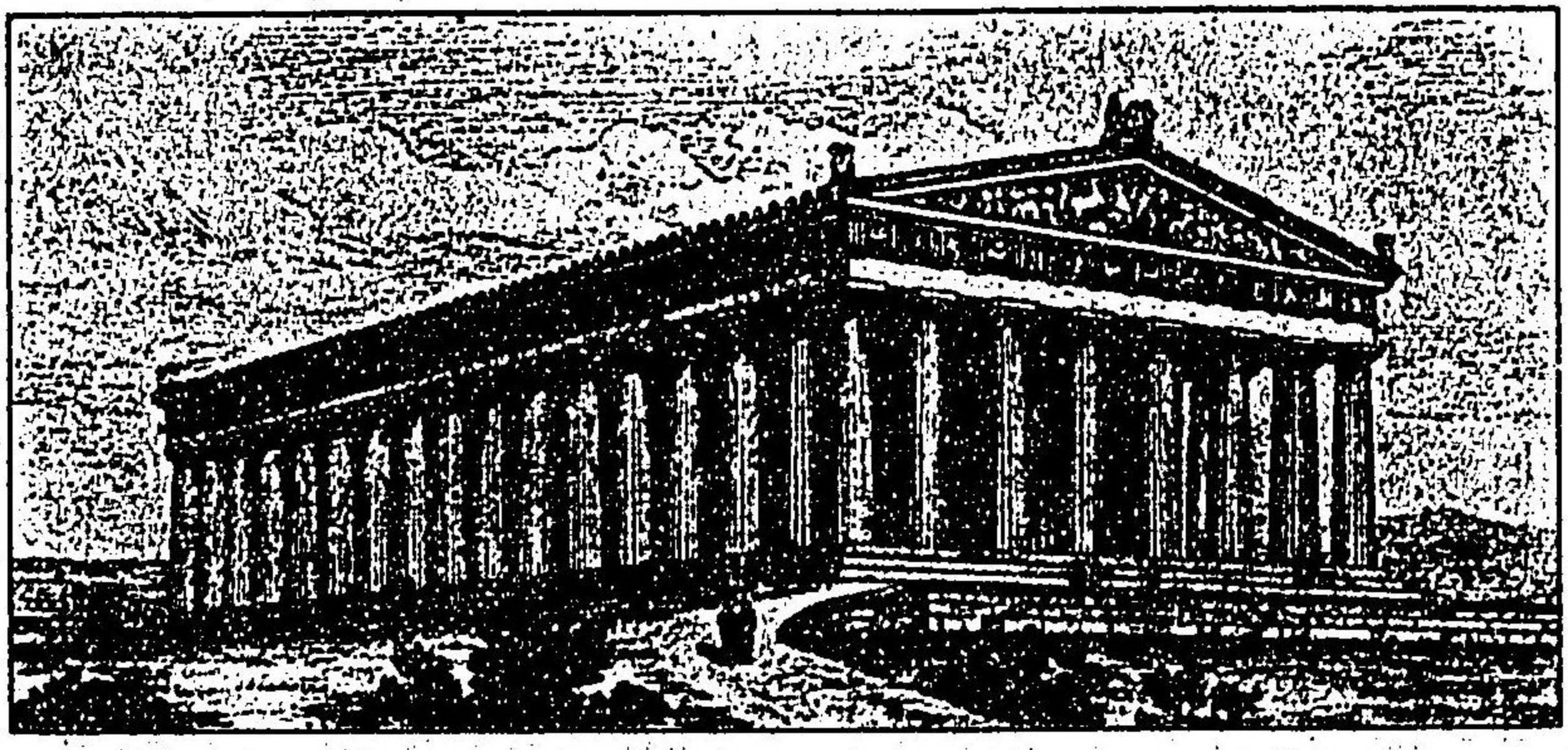
○アゼンスの盛勢

「ペルシア」は大敗後再舉の念を絶ち、「ギリシア」の國威は大に揚りぬ。この大功は、重に「アゼンス」の力なりしを以て、その勢は自ら諸國の上に出で、「エーシアン」海の諸島及び沿海の諸市は同盟を結び、「アゼンス」を推して盟主とあせり。

當時「アゼンス」には、大政治家「ペリクレス」出で、益民主制

ペリクレス時代

○ギリシア文物



アゼンスのパーセノン

の完成と國力の増進を圖り、學藝を奨励すること至れりしかば、「アゼンス」は富盛の極に達し、文學・美術は燦然たる光彩を放てり。これを「ペリクレス」の時代といふ。

歐洲後世の文明は、皆その源を「ギリシア」に發し、而して所謂「ギリシア」文物の精華は「アゼンス」に在り。「アゼンス」の最盛期の建築に係る「パーセノン」神殿は、莊麗比なく、後世建築家の模

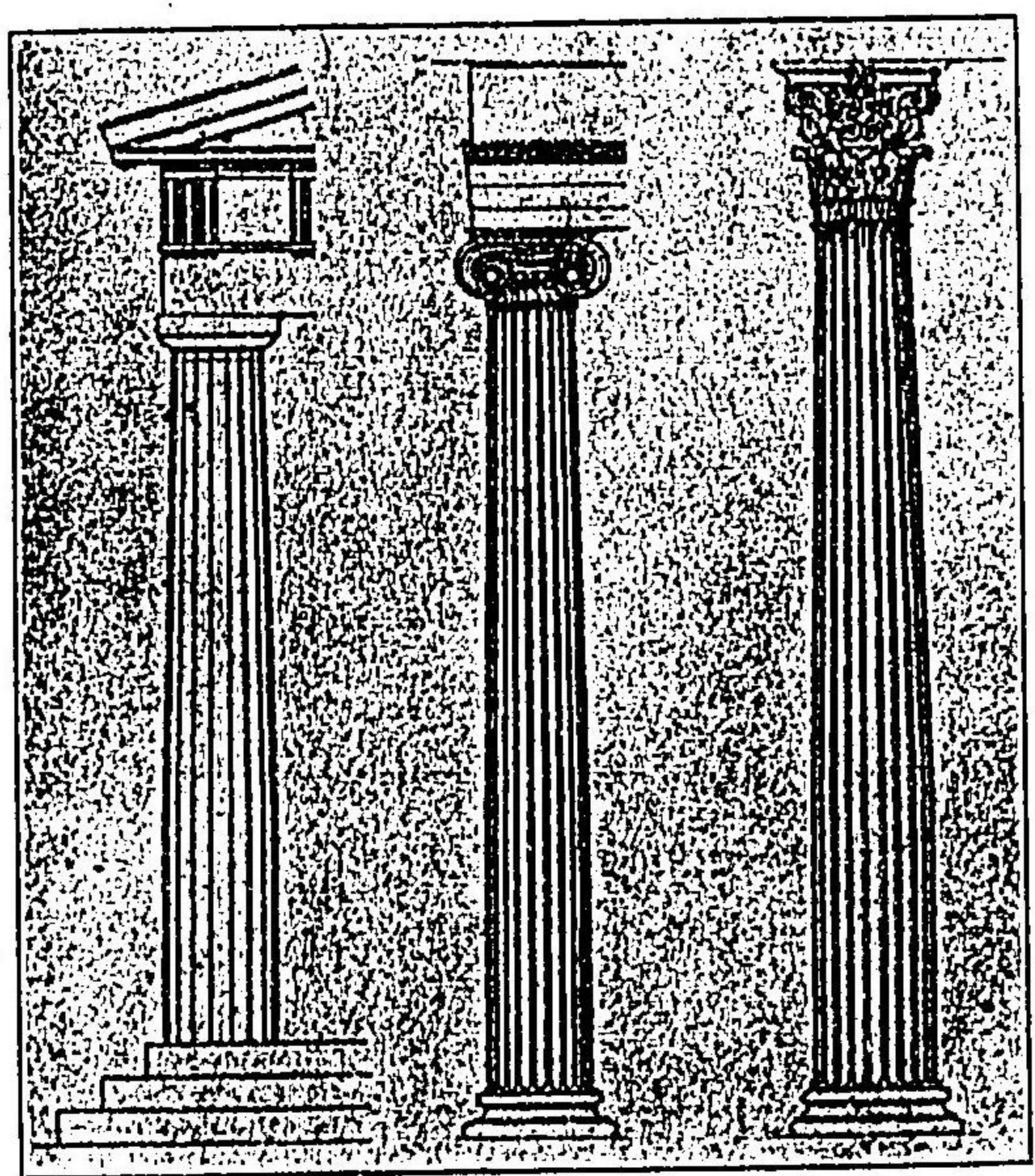
範となり、「フィデアス」の彫刻は高雅にして雄快、永く盛名を擅にせり。文。學。史。學。哲。學。等の大家また輩出して、競争



作のヌアサイフ
像の(神の智)神女ナテア

ソクラテス
研磨甚だ盛なりき。哲學者にて最も有名なるは、大聖ソクラテス(紀元前四六九年生)にして、知徳合一の説を唱へ、支那の孔子と並べ稱せらる。「ソクラテス」の高弟「プラト」及び「プラト」の高弟にして「アレキサンダー」大王の師

アリ
スト
ール



風アリド 風アニコイア 風スニコ

たる「アリストール」は、また共に卓出の哲學家なり。「アリストール」は、精神上の學問の外に、博物學をも研究し、諸種の大著は、學術界に裨益せること

る頗る多しとす。

「ペリクレス」は紀元前四二九年を以て歿しけるが、これより先「スパルタ」以下の諸邦は「アゼンヌ」の隆盛を忌み、同盟の諸市も亦「アゼンヌ」の專横に不平を抱き、「ギリシヤ」大

○アゼンヌ
失勢の原因

○ギリシアの内亂

スバルタの覇

セーベスの覇

亂の緒こゝに發し、所謂「ペロポネサス」戦争は起れり。この戦役は、重に「アゼンヌ」と「スバルタ」の争にして、「ギリシア」の諸國は各、兩邦に分屬し、二十餘年に亘りき。而して「アゼンヌ」府は終に「スバルタ」の陥るゝ所となり、國勢甚しく衰へ、復前日の繁榮を見ること能はざるに至れり。爾後「スバルタ」は「ギリシア」の覇權を握ること三十餘年に及びしが、「セーベス」府に「エパミノンダス」、「ヘロピダス」の二名士出で、「スバルタ」の壓制に反對して諸市の聯合を形成し、紀元前三七一年大に「スバルタ」の軍を破れり。かくて「ギリシア」の覇權は、一時「セーベス」の手に歸したりしが、二名士相つぎて歿したる後は、勢威頓に衰へき。「ペロポネサス」の戦争始まりてより、「ギリシア」は、頗る疲

紛擾の極

弊を極めたるに、今や全國を統制すべき有力者は何れも仆れ、列邦の争証絶えざるに際し、北方の一強敵「マセドニア」は起りぬ。「セマドニア」興起の次第は、章を更めてこれを説かん。

第四章 「マセドニア」の一統 「アレキサン

ダー」大王の東征

「マセドニア」は「ギリシア」の北東なる一小國にして、その位置の僻遠なるが上に、人民は猶半開の状態に在りしかば、「ギリシア」列國の内に加はること能はざりき。然るに「フィリッポ」王に及びて、大に兵力を養ひ、且頻に「ギリシア」の

マセドニア
興起の次第

内事に干渉し、終に紀元前三三八年「アゼンヌ」「セーベス」の
連合軍を破りしより、「ギリシア」の全國は「マセドニア」の勢
威に服従せり。

「フィリッポ」王既に「ギリシア」を平定するに及び、「ギリシア」
の國敵たる「ペルシア」を征伐せんことを企てしが、會弒に
遇ひき(紀元前三三六年)。「フィリッポ」に嗣ぎしは、即ち「アレ
キサンダー」大王なり。



王大—ダンサキレア

「アレキサンダー」の王位に上るや、
直に全「ギリシア」の會議を開きて「ペ
ルシア」征討の大元帥と仰がれ、紀元
前三三四年、三萬餘の精兵を率ゐて、
遠征の途に上れり。先づ小「アジア」

アレキサン
ダー大王

アジア遠征

を席卷して「ペルシア」王の軍を破り、「フニシア」「パレスタ
イン」を略し、轉じて「エジプト」を服して「アレキサンドリア」
府を開き、再び東向して「ペルシア」に攻め入り、「アルベラ」の
一戦に大勝利を得、「ペルシア」の「ダリウス」三世は部下の弒
するところとなれり。ここに於いて「ペルシア」の全土「ア
レキサンダー」の有に歸しぬ。

大王は、更に「インド」に攻め入り、その國王の軍を「ヒダス
ペス」河畔に破り、なほ東略の軍を進めんとししが、士卒遠
征に厭きて行くことを欲せざりしを以て、一たび「バビロ
ン」に還れり。

「アレキサンダー」は、大一統の帝國を建立し、以て東西領
土の風尚・文化を混融せんとの企圖を抱きたり。されば

遠征の結果

大王歿後諸國の状況

親ら「ペルシア」王の女を納れ、將士をして「アジア」の婦人を娶らしめ、又務めて「ギリシア」の言語・宗教・風俗を東方に傳輪せりき。然るに、紀元前三二三年大王病歿し、諸將地を争ひ、大帝國は分裂して「シリア」、「エジプト」及び「マセドニア」の三國こなれり。

「シリア」王國は「アジア」の大半を包有したりしが、東部の諸國獨立を圖るもの生じ、領土漸く縮小せり。「エジプト」は「アレキサンドリア」を首府とし、商業は繁盛を極め、且つ學術の中心となり、圖書館の藏書の豊富なるは、東西その比を見ざるほごなりき。さて、また「マセドニア」は「ギリシア」を併せて一王國を成せり。その間「ギリシア」人は屢獨立を圖りしが、終に他の諸邦國と共に「ローマ」に併吞せら

るるに至れり（ギリシアの滅亡は紀元前一四六年に在り）。「ローマ」の發達は即ち次章に述べんとするところなり。

〔參〕「ローマ」の盛衰

第一章 「ローマ」の興起

「ローマ」は「イタリア」の一小村落より起り、古代東西の諸國を併吞して、大一統の事業を成し、又諸國民の文化を混融して歐洲近世の開明を導けり。されば、その歴史は甚だ偉大にして興味に富めりこす。

「イタリア」半島には、早くより「アリア」派に屬する「イタリア」種族入り來りて、居を占めしが、その中にて重なるは「ラ

○ローマ史の概観

○ローマの起源

テン人にして、即ちローマ府の創建者なり。ラテン人は、凡そ紀元前七五〇年の頃、ナベル河畔の「バラナン」丘上に移りて一市を開き、漸く發達の運に向へり。

「ローマ」の國初は王政なりしが、紀元前五一〇年王政を廢して、共和政となせり。よりて、新に在職一年の執政二人を置いて、貴族より選舉することとし、在來の元老院貴族會及び民會はこれを存置せりき。

當時、名は共和政なれども、その實は、政權は貴族の專有に歸し、且つ平民は土地所有の權なきを以て、貴族の土地を借耕し、兵役も平民のみこれに服し、その不幸言ふべからず。紀元前四九三年に及び、平民等相謀りて「ローマ」府を去り、近傍の聖丘に據りて、新に邑を開かんことをせり。貴

共和政體の創立

貴族と平民との争

族等大に驚き、從來の壓制政治を改革せんことを誓約し、悉く平民の負債を解き、その奴隷となりたるものを放ち、

且つ、護民官二名を平民中より選出するの制を定めたり。護民官は平民を保護監督し、貴族官吏の非法を制するを職とせるものなり。

ここに於て、平民は生活上の困難を減じ、政治上の權利を増したりしが、更に法典の制定を熱望し、



ローマ人の服装

政治上の權利を増したりしが、更に法典の制定を熱望し、

法典の編成

十名の委員を選びて、その事に當らしめぬ。紀元前四五〇年法典成り、これを十二銅標の法典と云ふ。これ實に古代「ローマ」法律の典範となりしものなり。

貴族平民の親和

爾後、貴族・平民の間の争はなほ絶えざりしかど、平民は次第に権利伸張の歩を進め、紀元前三六七年、護民官「リシニアス」が政權の分配、平民の負債償却及び公田の分賦に關する策を建て、遂に法律としてこれを發布するに及び、貴族と平民とは法律上全く差別なきものとなり、多年の紛争始めて靜穩に歸せり。

國力漸く伸ぶ

貴族と平民と内に相争へるに際して、「ローマ」は屢、傍近諸國の侵入を被ふりしが、ここに及びて、國民の一致益固く、東南の強敵「サムナイト」人と戦ふこと凡そ五十年にし

イタリー半島の征服

て、全く之を破り、更に進みて南部「イタリー」の「ギリシア」殖民地の諸都府を降せり。かくて、紀元前二七〇年頃には、北方「エール」の地方を除くの外、殆ど半島の全部を併呑し、武威漸く外に輝かんせり。

第二章 諸外國の征服

ローマとカーセージ

「ローマ」は、既に「イタリー」を一統して内顧の憂なく、國民の元氣甚だ盛なり。當時「アフリカ」の北岸なる「カーセー

兩雄の衝突

ジ」は、地中海に雄視し、「ローマ」の一大強敵たり。「カーセー」は、もと「フェニシア」の殖民地なりしが、通商・貿易の利を專にして漸く富強に赴き、終に本國より獨立し、「アフリカ」の



羅馬人の海戦

北岸を初めとし、地中海の諸島及び「スペイン」の一部をも包有せりき。「ローマ」は、遂に紀元前二六四年を以て「カーセージ」に戦端を開きたり。

「ローマ」と「カーセージ」の戦争を「ピニク」戦争といふ。第一回の戦争中、「ローマ」は屢海戦に敗を取りしが、奮ひて新艦隊を作り、紀元前二四一年最後の

勝利を収め、「シシリ」島を取りて和を結へり。次ぎて「サルデニア」島を割讓せしめ、又勢に乗じて「アルプス」山南の「エーブル」地方を平定し、國力前日に倍しき。

紀元前二一八年第二回の「ピニク」戦争は開かれぬ。「カーセージ」の名將「ハンニバル」は「スペイン」より兵を進め、「アルプス」山の嶮を越えて「イタリア」に攻め入り、連戦「ローマ」人を破り、「ローマ」の危急旦夕に迫れり。然るに、「ローマ」の名將「シピオ」奇計を施し、兵を率ゐて「アフリカ」に航し、「カーセージ」の本國を伐てり。「ハンニバル」は呼び還され、已むを得ずして「イタリア」を去り、「シピオ」は「ザマ」に會戦せしが、大に敗れぬ。「カーセージ」乃ち和を乞ひ、莫大の償金を約し、悉く武器・船艦を致し、又海外の領地を「ローマ」に讓れり。

二回のピニク戦争

ローマの大勝

(紀元前二〇一年) これより地中海の西部復、ローマに抗するものなきに至れり。

東方経路

「ローマ」は「カーセージ」の交戦終るや、直に東方の経路に着手し「マセドニア」を伐ち、又「シリア」を攻めて新版圖を小「アジア」に拓きぬ。既にして「マセドニア」叛亂を企つるに及びて、遂に之を滅ぼし(紀元前一六八年)、また悉く「ギリシア」の諸邦を併せたり(紀元前一四六年)。

カーセージの全滅

この頃「カーセージ」は漸くその國力を恢復せしかば、「ローマ」人大に之を嫉み、「カーセージ」人遇すること残酷を極めぬ。「カーセージ」人憤慨の餘り、反抗の志を決し、第三回の「ピロニク」戦争は始まれり。「ローマ」人乃ち「カーセージ」を攻圍すること四年にして、遂に之を焚滅せり。こ

外國征服事業の成果

れ正に「ギリシア」の滅亡こそその年を同じくす。數百年の間海上に雄視したる大國は、ここに終りを告げ、「アフリカ」北部地方亦「ローマ」の版圖に入れり。

共和政の隆盛

「ローマ」人が外國征服の事業に着手せしより、ここに至るまで凡そ百三十餘年にして、地中海沿岸の諸國悉くその領有に歸し、「ローマ」共和政の隆運は、方に頂點に達しぬ。「ローマ」が四方征服の結果として、屬州の財貨は續々流入し來り、「ローマ」は富榮比なく、文學・美術は「ギリシア」より傳はりて、「ローマ」人の智識も啓發の運に向へり。然るにこれより「ローマ」人質素・廉直・勇健の美風漸く去り、華奢・貪汚・柔弱の惡習從つて起り、道德の廢頹、政治の腐敗は既に衰亂の萌芽を見はせり。(サセ)

極盛の結果
衰亂の兆

第三章 共和政の末路 「シーザー」の業

社会の状況

「ローマ」の隆盛その極に達し、富豪は兼併を恣にし、小民の産を失ふもの日に多きを加へ、貧富の懸隔益甚しくなり行きぬ。ここに於て「ローマ」人民は、富民・貧民の二階級に分れ、富民の驕横と貧民の惨苦とは貴族・平民抗争時代にも過ぎ、共和政の美風は全く地を拂へり。護民官「グラッカス」兄弟奮つて貧民の救済に盡力したりしも、富民黨の忌む所となり、相つぎて歿しき。

貧富両黨の
争抗

既にして、貧民黨の首領「マリウス」は富民黨の首領「スラ」に相争ひ、「ローマ」府民のその難に死するもの甚だ夥しかりき。これより、黨争益烈しく、「ローマ」は無政府の有様となりしかば、人民皆大英傑の起りてこれを匡濟せんこと

を熱望するに至れり。

「スラ」の將「ホムペイ」英略あり、或は地中海の海賊を平げ、或は西部「アジア」の諸國を征服して、大に武功を著せり。然るに、元老院と議の合はざる所ありしかば、轉じて貧民黨に入り、其の首領「シーザー」と相結び、また富豪「クラッパス」を引きて同盟を作り、國事を處決せり。世に之を三頭政治と稱す。

三雄同盟

政權少數者に歸す

三雄同盟の成るや、「シーザー」は「アルプス」山外「ゴール」地方の大守となりて赴任し、前後十年間蠻民の鎮撫に盡力し、「ライン」河を渡りて「ゲルマン」人の侵寇を防ぎ、また「ブリタニア」島に入りて、その大半を征服せり。この際「クラッパス」は東方の征伐中に敗死し、「ホムペイ」獨り「ローマ」に在

シーザーの
全勝

りて威權を振ひしが「シーザー」の威名日に盛んなるを妬み、陰にこれを排斥せんご欲せり。「シーザー」乃ち紀元前四九年兵を率ゐて「ローマ」に入り、「ポムペイ」の「ギリシア」に逃れたるを追ひて、これを破れり。「ポンペイ」は更に「エジプト」に走りしが、土人の殺す所となりき。



像肖の一ザ一シ

「シーザー」は「エジプト」及び東方諸國を平定したる後、紀元前四五年「ローマ」に還り、終身の都督に任ぜられぬ。「シーザー」才略雙びなく、諸種の學術に通曉し、用兵の法に精しく、政治の才に長ぜり。既に「ローマ」の政權

シーザーの
功業

シーザーの
遺害

を握るに及びて、財政を整へ、兵制を革め、實業を盛んにし、文藝を奨励し、曆法を改正する等、美績頗る多かりき。然るに「ブルタス」「カシアス」の徒は「シーザー」の威名獨り盛んなるを妬み、密に黨を結び、遂に紀元前四四年「シーザー」を元老院に刺殺せり。ここに於て「ローマ」はまた紛亂の狀態となれり。

第三雄同
盟

「シーザー」の死後、「アントニー」といふもの、「シーザー」の姪にして養子たる「オクタヴィアス」及び「シーザー」の部將「レピダス」と相結びて第二三頭政治を作り、「ブルタス」等の徒を殺せり。既にして「レピダス」は同盟を去り、「アントニー」は「エジプト」に在りて東方を鎮し、「オクタヴィアス」は「ローマ」に在りて西方を治めしが、「アントニー」が「エジプト」の女王「ク

オクタヴィ
アス政權を
掌握す

レオパトラの容色に迷ひて、その妻「オクタヴィアス」の妹を
離別するに及びて、兩人の争端は開けたり。「オクタヴィア
ス」乃ち兵を率ゐて「アントニー」と「ギリシア」の近海に會戰
して之を破りぬ。「アントニー」は「クレオパトラ」と共に「エ
ジプト」に遁れ還り、相つぎて自殺し、「エジプト」の地は悉く
「ローマ」の屬州となれり（紀元前三一年）。

「オクタヴィアス」の全勝と共に、「ローマ」の政權は全く其の
手に歸し、また共和政の實なきに至れり。

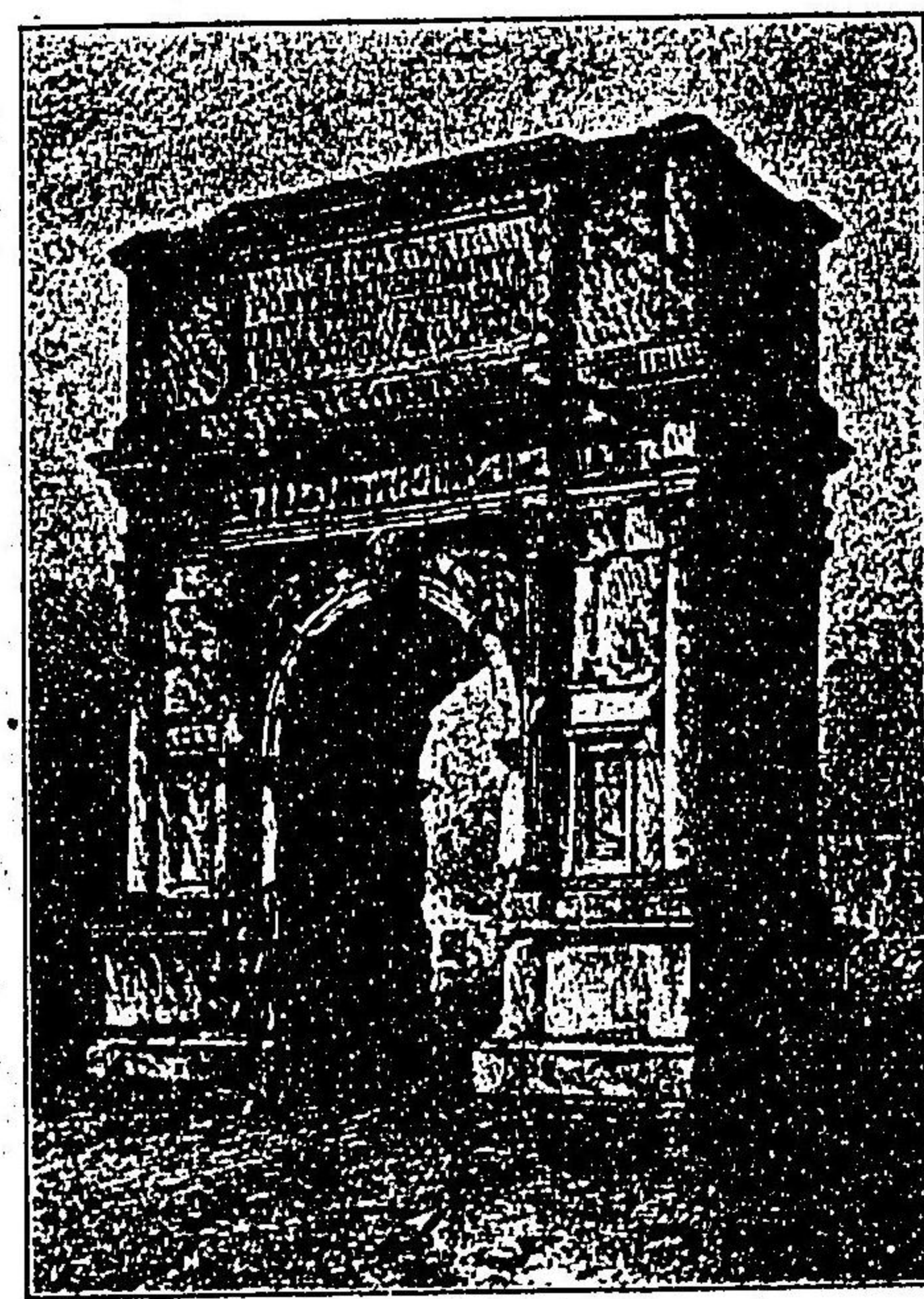
第四章 帝政の盛衰 基督教の弘布

「ローマ」共和政の末に、内訌相つぎ、人心既に兵亂に厭き

帝政

しかば「オクタヴィアス」の政權を握るに及びて、帝政の機運
は漸く熟したり。然れども「オクタヴィアス」は「アウガスタ
ス」（至尊至高の義）の尊號を稱せしのみにて、務めて共和政の形式
を存せりき。

ローマ版圖
の廣大



當時「ローマ」の版圖は、北は「ライン」河、「ダニューブ」河及び黒
海を限り、南は「サ
ハラ」の大漠に接
し、東は「ユーフラ
テス」河邊より、西
は大西洋の濱に
至り、その人口は
總計一億萬以上

に達せり。「アウガスタス」これを統治して、内外の政大に

舉りぬ。その政治の中心となり

しものは、即ち「ローマ」府にして、諸

種の殿堂・競技場・劇場・浴室等の建

築は壯麗比なく、水道・軍路の如き

も、規模宏壯にして、後人の贊嘆已

劇 まざる所なり。

「アウガスタス」帝は、また文藝を

場 奨励すること至れりしかば、「ヴァ

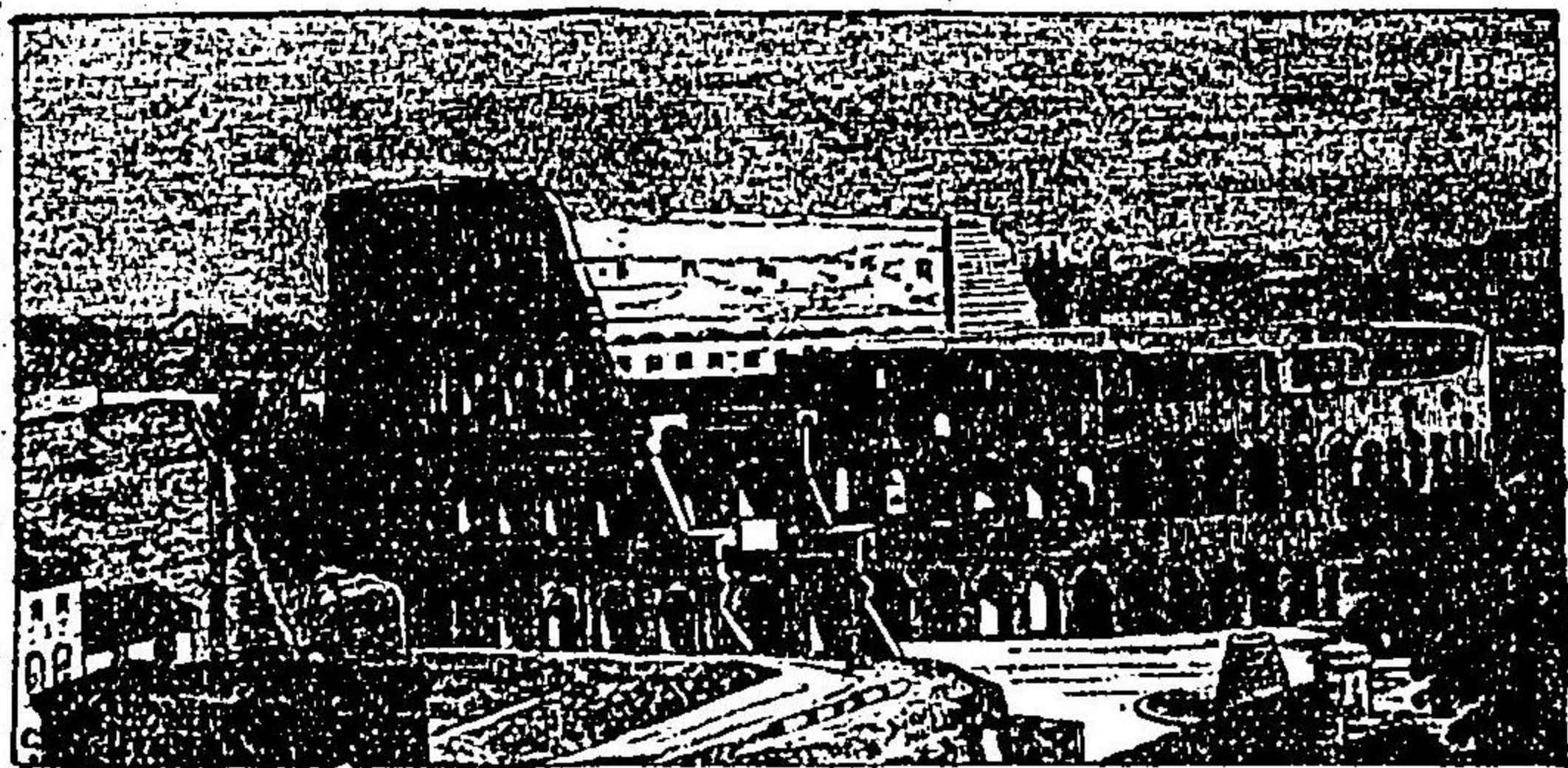
ーシル」、「ホーシース」等有名の詩家多

く世に出でたり。「ローマ」文運の

旺盛なること、實に帝の世を最と

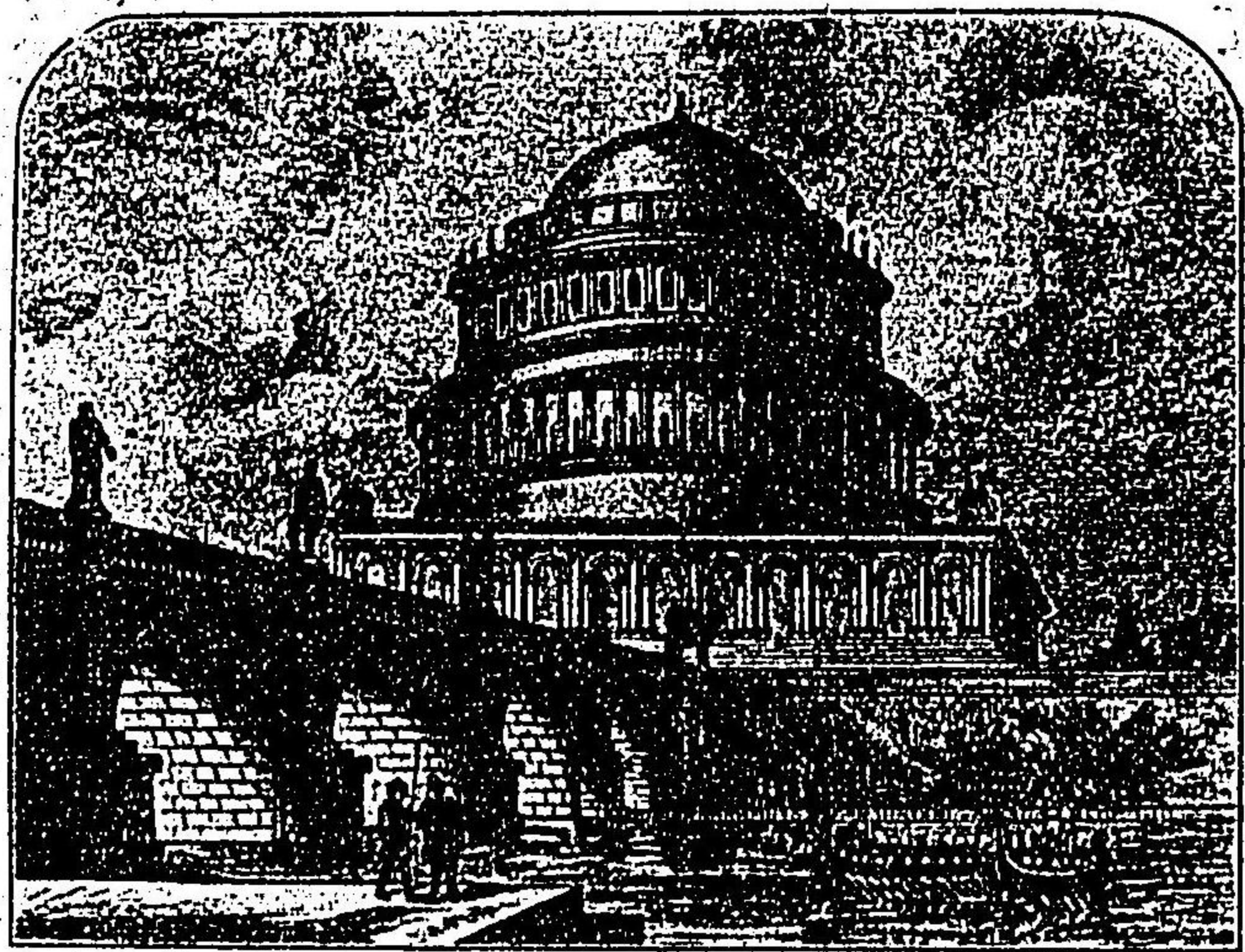
ローマ府の
隆盛

文藝の進歩



キリスト教
祖の誕生

す。耶蘇基督が「シユデア」國に生れたるは、また帝の在位
中記臆すべきの一事實なり。



橋ロゼンア、トンセび及墓墳の王ンアリドへ

「アウガスタス」帝は紀

元一四年を以て歿せり。

爾後多くは、賢君相接ぎ

て出で、「ローマ」の富榮衰

へず。「アントニウス・ア

ウレリウス」帝の治世一

六一年—一八〇年の如

きは、文學・技藝益隆興し、

支那の後漢と相通ぜし

も、またこの時なりとい

衰頹の諸原因

然るに、紀元第三世紀の初頃より「ローマ」は漸く衰運に向かひぬ。歴代の皇帝は庸劣にして、近衛兵及び諸地方の鎮臺兵は驕横を極め、皇帝廢立の權もその手に歸するに至れり。且つ「ローマ」人の美風は漸く廢頹して、諸種の惡弊行はれ、國情頗る亂雜に陥りぬ。而して、北方の蠻人は、更に之に乗じて、屢境上に侵入し來れり。

紀元二八四年「デオクレチアン」帝の位に即くや、「ローマ」の衰勢を回復せんことを欲し、その將「マキシミアン」を選びて同じく帝號を稱せしめ、帝國を東西に分ちて、各その一を治めたり。これが爲め、紀綱一時は張りたりしが、却て内亂の原因とはなりぬ。よりて、三二三年に至り、「コンス

帝國の二分

一統と遷都

○キリスト教の弘布

「コンスタンチン」帝再び全國を一統し、都を「ビザンチウム」に遷せり。これ即ち今の「コンスタンチノープル」なり。

「コンスタンチン」帝は「キリスト」教を以て「ローマ」の國教と定めたり。先に、基督が唯一眞神の教義を唱へて十字架上に磔殺せられしより、その弟子は散じて四方に行き、益、その教を弘布せり。かくて、「キリスト」教の「ローマ」に入るや、府民の歸依するもの少なからざりしが、「ローマ」の諸帝は、國安を妨害するものなりとて、教徒を虐遇し、然るに、教徒等はこれに屈せずして、信仰益固く、また如何にもすること能はず。遂に「コンスタンチン」帝に至りては、これを公許し、また立てゝ國教となせり。これより「キリスト」教は俄にその勢力を増し、社會上政治上大關係を

生ずるに至れり。

第五章 北蠻の侵入 西ローマ帝國の滅亡

帝國全く東西に分る

「コンスタンチン」帝歿して(三三七年)「ローマ」の國勢益振はず。已にして「セオドシアス」帝に及び、三九五年再び帝國を兩分して、その二子を東西に帝となせり。これ「ローマ」帝國最後の分離にして、北方蠻族の侵寇は益迫り、帝國滅亡の期次第に近づきぬ。

○北蠻の侵入

こゝに、歴代「ローマ」に迫害を加へたる北方蠻族の由來に就きて、その概略を述べん。

當時歐洲の中部及び西北部を占領せるものは、所謂「ケ

ケルト人

「ケルト」種の大民族にして、或は「ゲルマン」種ともいふ「ケルト」種及び「スラヴ」種と共に「アリア」派に屬せり。此等の三種族中最も早く歐洲に移住せしものを「ケルト」人とす。「ケルト」人は「ローマ」共和時代の頃既に歐洲の西南部に居住し、夙に「ローマ」の文化に化せられき。然るに「ケルト」人の南侵に遇ひて、歐洲西部の一隅に退蹙し、史上に著るしき關係を及ぼすことなくして止めり(今の「アイルランド」
「ケルト」種に屬す。)

チュートン人とその分派

「ケルト」人が興起したるは、凡そ紀元前一〇〇年頃よりの事あり。「シーザー」が「ゴール」地方鎮撫中、「ライン」河を渡りて征伐したりしは、即ちこの蠻族ありしが、「ローマ」の衰ふるに及び、屢邊境に侵入せり。「ケルト」人の重なる

る分派は「ゴス」「フランク」「ヴァンダル」「アングロ・サクソン」及び「スカンデナヴィア」人等にして、何れも勇悍にして、獨立の氣象に富めりき。

匈奴の西侵



北蠻の居住

「ローマ」に請ひ、「ダニューブ」河の南岸に遷りてその害を避け

紀元第四世紀の初頃より、「トルコ」種族の匈奴人漸く歐洲に移り來りて、黒海の東北地方に占居したりしが、三七五年匈奴は更に西進して、「ゴス」人に迫りき。「ゴス」人乃ち

チユートン
蠻族續々
ローマに入る

たり。これより「チユートン」種の諸蠻族は續々「ローマ」の内
地に侵入し、また禦ぐべからざるに至れり。

既にして匈奴の王「アッナラ」大兵を率ゐて、東「ローマ」帝國
を侵し、轉じて「ゴール」地方に攻め入りしが、西「ローマ」の將
「エーナアス」は西「ゴス」人及び「フランク」人と連合して、これ
を「カダラニア」に破りき(四五一年)。翌年「アッナラ」死し、そ
の領土は全く分裂に歸せり。

西「ローマ」帝國は、匈奴の兵を敗りしこいへども、積衰の
勢は固より回復するに由なく、國內は紛擾を極めたり。
これに乗じて「チユートン」種族の一酋長「オドアサー」「ローマ」
最後の帝を廢して自ら「イタリー」王と稱せり。西「ローマ」帝
國ここに亡ぶ。實に紀元四七六年(我が雄略天皇の世)な

西ローマ帝
國の滅亡

り。上世史はこれを以て終りこす。

第二篇 中世史

中世史とテ
ートン種族

西ローマ帝國の衰亡と共に、ゲートン諸民族は、次第に北方より出でて、南方開富の地に就き、中世史上の主動者となりぬ。ゲートン民族は、進歩の賦性を有し、獨立の氣象甚だ盛んありしを以て、能く舊ローマの文化を消化して、更に近世文明の淵源をなせり。

東ローマ帝國

第一章 東ローマ帝國 「アラビヤ人の勃興
東ローマ帝國は、西帝國の滅亡の前後は、内訌外寇に苦められしが、紀元五二七年、ジヌスチニアン帝位に即くに及

ジラスチニア
アン帝

領土の擴張

ローマ法典
の編成

衰運

アラビア
の勃興

び、これを一振せり。帝は、東の方、ペルシア人の侵入を撃ち退け、アフリカなる「ヴァンダル」王國を滅し、又東、ゴス王國を平げて、「イタリー」を併せ、大に領土を擴めたり。

「ジラスチニア」帝の内政に就きて、更に著しきは、近世歐洲法律の基礎となれる「ローマ法典」の編成、及び美術の獎勵等なり。支那より養蠶法を傳へて、南歐に於ける養蠶の緒を開きしも、また記すべきの一たり。

紀元五六五年「ジラスチニア」帝の歿せしより、東「ローマ」は外患漸く加はり、再び衰運に傾けり。この際、東方なる「アラビア」人の勃興して、四方を攻伐し、一大帝國を建立するに至れり。

「アラビア」人の興起は、主として「モハメッド」の力に依れり。

モハメッド
の回教創始

弘教と兵力

回教徒の東
西征服

「モハメッド」は、五七一年「アラビア」の「メッカ」に生れ、四十歳の頃、「ジデア」教及び「キリスト」教に依りて、所謂回教を創めたり。

回教の起るや、「アラビア」の人心は、一時に之に靡き、「モハメッド」は、「アラビア」の主權者となりぬ。「モハメッド」は、兵力を以てその教を弘めしかば、能くこれが猛勢に當るものなかりき。

「モハメッド」は、六三二年を以て歿せしが、その繼承者（これを「カリフ」と云へり）は、教祖の遺志を奉じ、劔戟を執りて四方の征服に従事せり。即ち、東は「ペルシア」を平げ、「インド」に攻め入り、西は「シリア」、「エジプト」を征し、小「アジア」を服して、遂に東「ローマ」帝國の衰弱に乗じ、首府「コンスタンチノ

西歐のキリスト教徒との戦

版圖の廣大

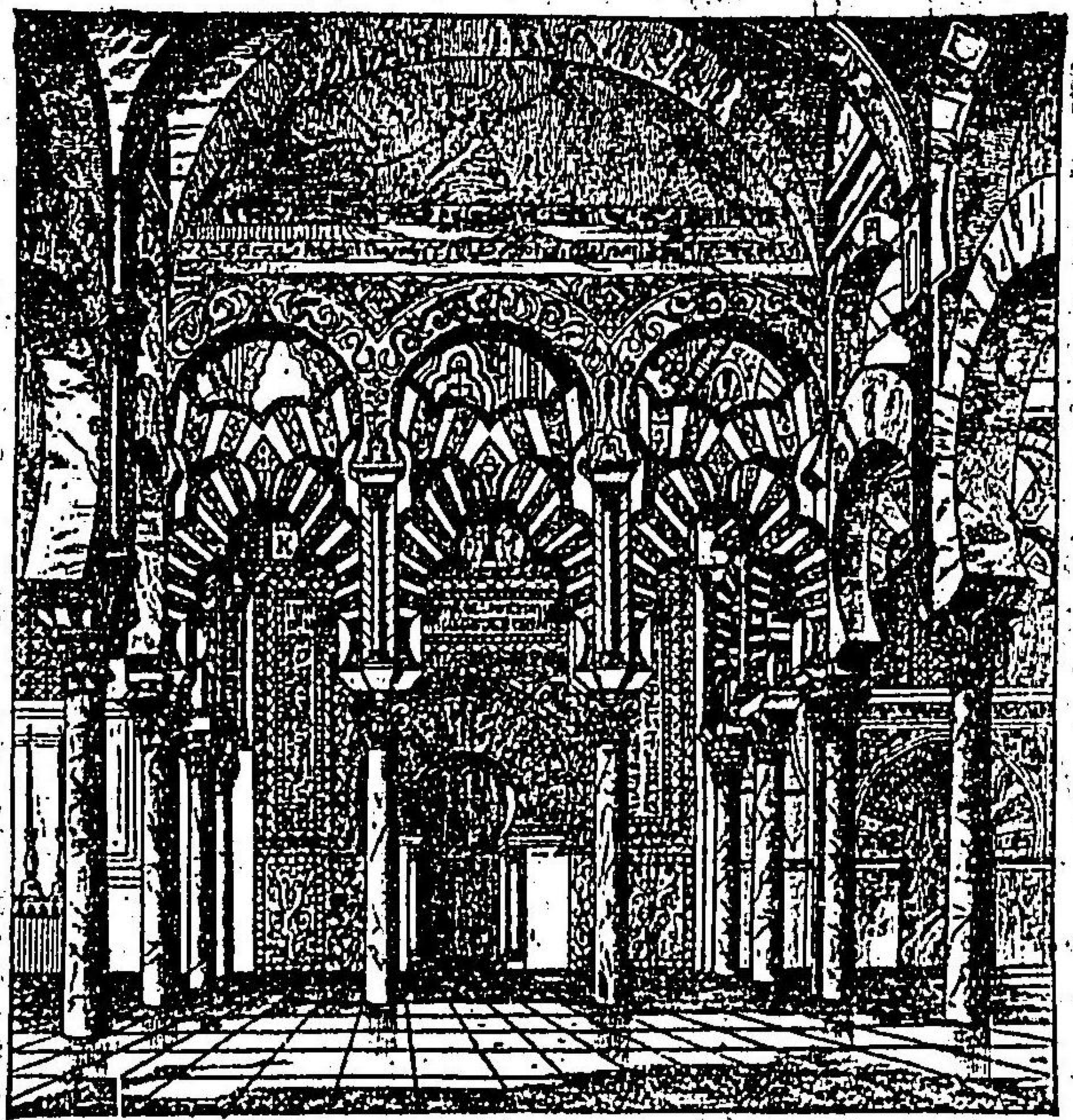
東西分離

「アプル」に迫りぬ。この攻圍は、キリスト教徒の熱心なる防禦の爲めに、その功を遂げざりしが、爾後「アラビア」人は鋒を西方に轉じて、「アフリカ」の北部を平定し、更に進みて「スペイン」の地に入り、「西ゴス」王國を滅せり（七一一年）。

「アラビア」人は、戰勝の威に乗じ、今の「フランス」地方に侵入せしが、「フランク」王國の宮相「チャーレス・マーテル」に破られ（七三二年）、以後、「ピレニース」山以北にはその手を伸ばさざりき。

東カリフ國

は、第八世紀の末頃最も繁榮を極め、「バグダッド」は東西通商の中心となり、農工の發達また著しく、學術技藝の進歩頗る觀るべきものありき。



部内院寺教回のアゾドルコ

東西のカリフ國

のありき。「スペイン」に據れる「西カリフ」國は、東カリフ國と相競ひ、處々に學校・圖書館等を経て、學藝を獎勵し、東

歐洲の文明
上に於ける
感化

洋の文學・哲學・技藝を歐洲に傳へて、一時はその文化の中
心となれり。星學・理學及び醫學等諸科の知識を輸入し
たるも「アラビア」人にして、火藥及び羅針盤の如きも、もこ
「アラビア」人の支那より傳來せるものなりといふ（ガゼット）

第二章 「フランク」王國の強大 「シアーレ

マン」大帝の事業

「アラビア」回教徒の歐洲に侵入せるに當り、これを撃ち
破りて、「キリスト」教國の危難を免れしめたるは、「フランク」
王國の宮相「チャーレス・マーテル」の功あり。「フランク」王國
は、「ローマ」の亡びたる後、「フランク」種族の酋長「クロヴィス」が

フランク王
國の起原

チャーレス

シアーレマ
ン大帝

征服事業

「ゴール」地方を征服して建てしところなるが、その子孫庸
劣にして、實權は宮相の手に歸せり。「チャーレス」大功を建
て、威權更に増し、その子「ピピン」に至り、遂に王を廢して
自立せり。「ピピン」王の子は、即ち有名なる「シアーレマン」大
帝なり。

「シアーレマン」帝七六八年即位、夙に「ローマ」帝國を再興せ



帝大シマレーアシ

んこの大志を抱き、四方の
征伐に従事し、北は「オーデ
ル」河より、南は「チベル」河に
達し、東は「エルベ」河より西は
「エプロ」河に至るまで、その
版圖に歸せり。「ローマ」法

西ローマ皇
帝の稱號

當時の大勢

王レオ三世は、八〇〇年(我が桓武天皇)「シールマン」に金冠
を加へ、西ローマ皇帝と稱せしめたり。ここに於て「ロー
マ」帝國は東西相對せしが、「アラビヤ」帝國も、また東西「カリ
フ」國並立し、兩亞并に歐洲に亘りて、四大國の對峙を見る
に至れり。

大帝の政治

「シールマン」は、首府を「アーヘン」に置きて帝國を統治し、
大に意を國民の改進に用ゐ、農工を保護し、或は學者を聘
し、或は學校を興し、或は圖書館を設けて、學術を獎勵し、治
績頗る觀るべきものありき。「チュートン」民族固有の「ゼル
マン」語が漸く文學上の用語となりて、新文學興起の端緒
を開けるも、この頃に始まれりといふ。

八一四年「シールマン」帝歿し、子「ルイ」嗣ぎしが、「ルイ」の三

大帝歿後の
版圖分裂

子領土を争ひて、騷擾止まず。既にして「ブルダンの和約」
(八四三年)によりて、帝國は遂に三分するに至れり。「フラ
ンス」「ドイツ」及び「イタリア」は、即ちこれなり。

第三章 「ローマ」法王の專權 十字軍

○ローマ法
王

「シールマン」帝がその大版圖を拓けるに當り、「ローマ」法
王これに帝冠を加へたりしことは、前章に述べたり。因
て、こゝに中古史上の大勢を動かしたる「ローマ」法王の權
力伸張の由來を説かん。

「ローマ」帝政の末路に當り、蠻族の侵入頻繁にして、終に
覆亡したりしが、「ローマ」の國教となれる「キリスト」教は、こ

法王の由來

の際却て勢力を加へ、諸蠻族は西「ローマ」の滅亡以前に殆ど全くキリスト教に歸依するに至れり。されば西「ローマ」帝國は滅びたりといへども「ローマ」に於ける「キリスト」教會の大僧正は、社會の尊敬を一身に集めき。且「ローマ」の大僧正には、英傑相つぎて出でしかば、權威愈増し、遂に所謂法王として仰がるゝに至りぬ。

先に「フランク」の「ピピン」が舊王統を廢して自ら代るや、「ローマ」法王これに「フランク」王の稱號を許せしかば「ピピン」は、當時「イタリー」の北部を略有せる「ロンバード」族を征して、その地を法王に獻ぜり。これ實に「ローマ」法王をして政治上にまでその大權を振ふに至らしめたる端緒なり。「シロマン」帝も、また常に法王と相結びてその大業

法王權の伸張

を成しより、法王の權勢は非常に振張せり。

教權と政權との衝突

「ローマ」法王權の増進と共に、その帝王權との衝突を生ずるは自然の事なり。一〇七三年「グレゴリ」七世法王となるや、教權最高論を唱へ、僧侶の王侯に臣服するを禁じ、これを犯すものは破門の罪に處すべしと布告せり。時に「ドイツ」帝「ヘンリ」四世法王の專權を惡み、「グレゴリ」を廢せんごしたりしかば、法王却てこれを破門せり。「ヘンリ」遂に臣下の叛亂に堪へずして、法王の宮殿に至りて哀を請ひ、跣足にて雪中に立つこと三日の後僅に赦免を得たりき。

王中の王

これより、法王の權力は、宗教政治の兩界に擴張し、一時は、諸國の君主皆その命を仰ぎて、法王の臣奴と稱しき。

失勢

然るに、第十三世紀の末頃より、諸國帝王の反抗起り、法王の政治上に於ける権力は漸く挫折するに至れり。

○十字軍
「ローマ」法王の権力隆盛の極に達せるに當りて、所謂十字軍は起りぬ。十字軍は歐洲の社會に至大の影響を與へたるものなり。

これより先、キリスト教の歐洲に弘布するや、その信徒の「ジュルサレム」なる「キリスト」の墳墓に參詣するもの甚だ多く、「アラビヤ」人が「パレスティン」地方を占領するに及びても、巡拜者は常に絶えざりき。然るに、第十一世紀の中頃、「トルコ」人（トルコ人も回教を信せり）が同地を略取せしより、「キリスト」教巡禮者を虐待すること甚しかりしかば、聖地回復の一事は、早くも全歐の人心を動かしぬ。

目的

此時「フランス」の「ピーター」（といへる一僧、自ら「ジュルサレム」に赴きて、その實況を目撃して歸り、「イタリー」「フランス」等を巡遊して、熱心に異教徒征伐の已むべからざる事を説き、法王「ウルバン」二世も亦その事を賛しぬ、會「東」ローマ皇帝「トルコ」人の迫害に苦みて、援を法王に請へり。一〇九五年、法王は遂に大集會を「クレルモン」に開き、聖地回復の舉を勧めしかば、衆皆争ひて遠征軍に加はれり。彼等は皆十字の徽章を着けしより、十字軍の名稱起りき。
翌一〇九六年（我が堀河天皇の世、）「フランス」「イタリー」等の諸侯伯兵を率ゐて出征の途に上り、苦戦の後、「ジュルサレム」を取りて、聖地を回復せり、（一〇九九年）。これを第一十字軍といふ。

第一十字軍

爾後の経過



一諸侯の十字軍出發前

既にして「ジエルサレム」は「トルコ」人に攻められ、危急なりしかば、第二十字軍起り、次ぎて「エジプト」王「サラデン」が「ジエルサレム」を陥るゝに及び、第三十字軍（一一八九年—一一九二年）起り、英・佛・獨三國の君主も親ら出征したりしが、終にその功なく、聖地は再び回教徒の手に歸しぬ。

終局
結果

爾後、一二七〇年（我が龜山天皇の文永七年）に至るまで、十字軍の舉は更に四回ありしが、何れも記するに足らず。遂に一二九一年に及びて「ジエルサレム」は全く「トルコ」人に滅ぼされ、十字軍はこゝに終を告げき。

十字軍は、殆ど二百年間に亘り、これが爲に歐洲諸國が被ふれる損害は實に莫大ありしかど、間接には、歐洲諸國民の同情を深くし、思想を寛大にし、見聞を廣め、通商・交易の進歩を促し、且つ封建諸侯の勢力を減殺するに至らしめたるが如きは、文化の發達上に與へたる利益甚だ多かりき。

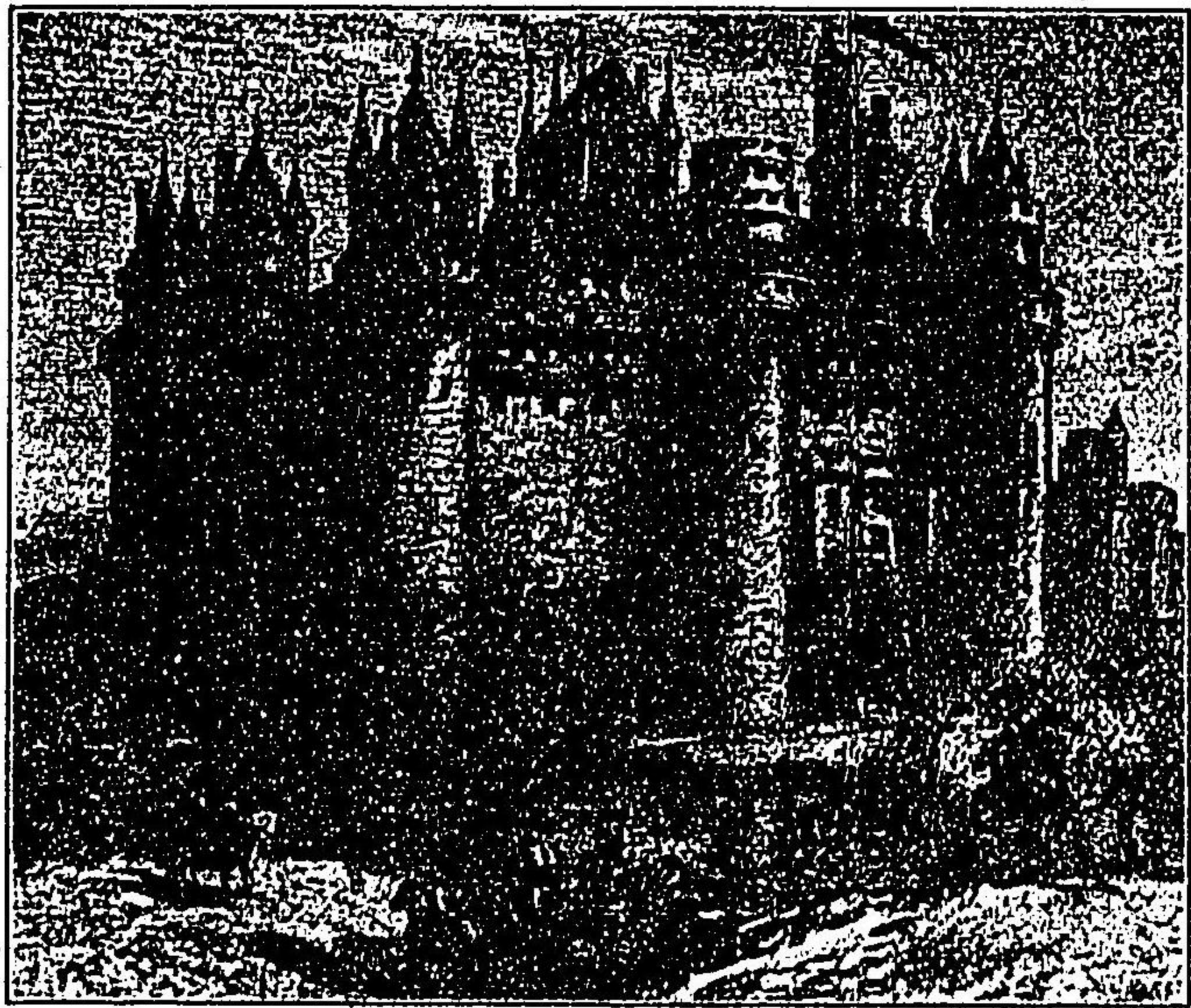
第四章 中世歐洲社會の狀態

○封建制度

十字軍の結果として、歐洲封建諸侯の勢力漸く衰退に傾きたることは、上に言へり。封建制度は、十字軍以前に西部歐洲を通じて盛んに行はれ、中世社會の一特相たり。封建制度は、蓋し、フランク人が「ゴール」地方を、征略したる頃に生まれり。當時、國王は土地の大部分を私有し、その餘を旗下の士に私領として與へたり。私領は世襲産にして、國王といへども、縦にこれを奪ふことを得ざるものなり。その後、國王及び旗下の士は、自己の私領を割き、封土としてこれを臣下に與ふる事起れり。封土を授けたる君長は、その與奪の權を握れる代りには、常に臣下を保護し、封土を受けたる從臣は、その君長に對して、或は戰

組織

普及



中世諸侯の城寨

役に從ひ、或は公事に參與し、或は時に必要の資金を獻納すべき義務を負へり。

「シアーレマン」帝國の分裂後は、この制度一般に行はれ、小諸侯の武力弱きものは、その私領を一旦大諸侯に獻じ、更に封土として、これを受けて、安全を計り、大諸侯もまた表面上國王より封土を得て、これが從臣と

諸侯の生活

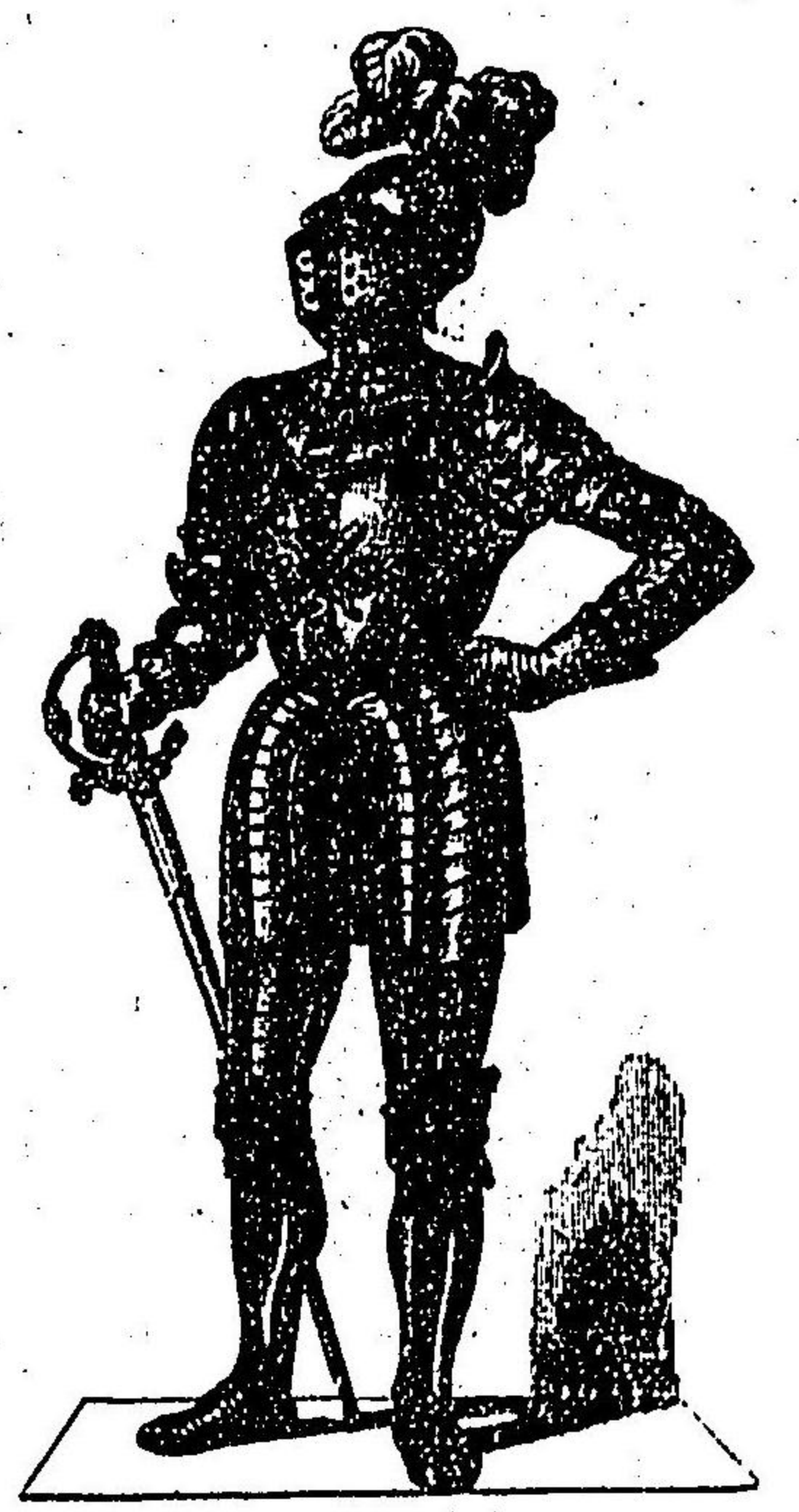
なるに至り、層々聯貫して複雑なる關係を生じたり。
 封建の諸侯は、皆形勝の地に堅固なる城郭を構へ、その
 周圍には、臣下及び農民等住居せり。此等諸侯の割據は、
 人民の自由を害し、交通の不便を致せること、甚しかりき。
 義騎制度の發達は、封建制度と密接の關係を有せり。
 蓋し、封建の世戰亂絶えざりしを以て、義俠の士諸方を遊
 歴して、孤弱婦女等の危害を救護せしに起り、終には一の
 制度となれるなり。

○義騎制度

義騎の養成

王侯の臣屬の子弟の、騎士とならんご欲するものは、七
 歳に至れば、貴婦人に仕へて禮節を習ひ、十四歳に至れば、
 義騎に従ひて武事を修練し、二十一歳に及び、嚴肅なる儀
 式を経て、義騎の爵號を得るなり。

義騎の感化



義騎の圖

義騎は神を
 敬し、婦人を尊
 び、義勇を重ん
 じたるを以て、
 その美風の感
 化少からざり

き。然るに、十字軍以後は、騎士の精神大に壞敗し、却て暴
 横を恣にするに至りぬ。かくて、封建制度の衰微と共に、
 義騎制度も漸く廢滅に歸せり。

この時代に婦人の社會上に於ける位地の高まりたるも、
 義騎制度の發達に基けるなり。諸侯貴族が、その女子を
 教養する方法も従つて生じ、城中に學校様のものを設け、
 教師を聘して、讀書習字・家政・裁縫・音樂・唱歌等を授けしめ

○封建制度
衰頹の諸因

たりといふ。

十字軍の役に諸侯或は戦没し、或は軍資の爲にその領土を失ひたるもの多く、且火器の發明は武器戦法の變化となりて、自ら封建制度の衰頹を促し、が、市府の發達もまたこれに與りて力ありき。

歐洲が「ネーデルラント」蠻族の蹂躪を被ふるや、古來の諸都府は、不幸なる情況に陥りしが、八九世紀の頃より、舊府・新市次第に商業の要地に起りぬ。而して市府は漸く富盛に赴くに從ひ、その領主なる諸侯より特權を受け、殊に十字軍以後は、市府の勢力頓に増加して、獨立自治の小社會を成すに至り、「イタリー」及び「ドイツ」の諸市の如きは同盟を結びて、封建君主の壓制を防ぎ、商路を四方に開きて盛に

市府の發達
と文化進歩

通商を營みき。かくて、商工業の繁盛は、市府の實力を養ひ、獨立の精神を盛にし、交通の發達は、割據を破り、舊習を脱せしめ、新智識開發の一原因となれり。

當時諸市府は、文明の中心となりしを以て、女子を教育する學校の設立をも見るに至りぬ。但し、その數は甚だ少なかりき。その他は、都鄙の僧庵・尼院にて、まま子女に讀書習字を教ふることありしのみ。

キリスト教
の勢力

さてまた、中古歐洲社會の人心を支配したりしものは、實に「キリスト教」なり。その勢力の偉大なりしことは、前章に述べたる所を以ても知るべく、文學・美術等に至るまで、これが影響を被ふらざるはなかりき。所謂僧庵制の行はれたりしも、即ちこの際にして、都市・村落到る處に僧庵の設立を見、幾多の僧侶はここに集まりて、靜に心を養

僧侶と文學

ひ、人民を教化せり。社會混亂して學問甚しく衰退せる時に當り、能く文學を保存して、これを後世に傳へたるは僧侶の功多しといふ。

第五章 歐洲列國の發達

諸國の統一の大勢

封建制度の衰頽に傾くと同時に、諸國君主の權勢は漸く加はり、統一的事業は次第に行はれ、紛亂せる社會は整治の緒に就かんこせり。

○フランス
由來

「フ・ラ・ン・ス」は八四三年「ヴェルダン」條約に由れる「フランク」王國の分裂より創まれり。九八七年に至りて「シーレマン」帝の血統絶へ、「フランシヤ」侯「ヒューグ・カペー」自ら王と稱

英國との百年戦争

し「フランス」の國名これより起る「カペー」王朝を開けり。その初、強大なる諸侯國中に割據して、王命に服せざりしが、「ルイ九世」一二二六年—一二七〇年）に及びては、王權大に振張せり。一三二八年「カペー」家の血統絶え、「ヴァロア」家王位を繼承しけるが、「イギリス」王「エドワード三世」は「カペー」家の姻戚として、王位相繼の權ありと稱へ、大軍を率ゐて「フランス」に侵入し、一三三八年（茲に所謂百年戦争の端を開きぬ。

一少女ジョアン・ダーク佛國を救ふ

これより、兩國數戰ひ數和せしが、佛國は多くは敗れを取り、一四二二年には、佛王「チャールズ七世」僅に「オルレアン」の一城を保つに過ぎざりき。然るに、「シリアン・ダーク」稱する一少女、民間に起り、上帝の命を受けて佛國を救ふこ

唱へ、自ら武装して先陣に立ち、軍氣を鼓舞して、遂に「オル
レンアン」城の圍を解けり。「ジョアン・ダーク」は、後不幸にして



ク・ダ・ン・ア・ヨ・ジ

英軍の擒こなり、焚刑に處
せられき。然れども、忠勇
ある「オルレンアン」の少女が
名は、永く史上に輝くべし。
佛人は、これより、却て攻撃
の位地に立ち、一四五三年
に及びては、全く英兵を國
外に逐ひ、百年戦争の局を結びぬ。而して、佛人の國民的
思想は、これが爲に大に發揚し、國威漸く張れり。

○イギリス

國家の統合
漸く堅し

「イギリス」は、もこ「ブリタニア」と稱し、「ローマ」の盛時には

由來

異種族の混
争混乱

「シイザリ」これを討ち、「ケルト」種族の「ブリトン」人を従へた
りき。數百年の後、「ローマ」の勢衰ふるに及び、「ドイツ」北部
地方に住せる「アングロ・サクソン」人侵入して、この地を七
王國を立て、互に相争ひしが、八二七年「エグベルト」王これ
を一統せり。この頃、北方の一蠻族「スカンデナヴィア」人「チェ
ートン」種族獨・英・佛諸國の沿岸に侵寇して、劫掠を恣にし、
英國にては「エグベルト」王の孫「アルフレッド」王勇武にして、
一旦全くこれを撃ち退けたりしも、凡そ百年を経て、北蠻
の一派「デーン」人再び侵入し、その將「カニート」終に英王の
位に即けり（一〇一七年）。然るに、一〇六六年に至りては、
「フランス」の北部なる「ノルマンディー」の「ウィリアム」侯大軍を
率ゐて入寇し、全國を征服せり。これより、征服者と被征

服者との間に不和絶えざりしが、十三世紀頃に至りて、漸く相一致するの傾を生じたりき。

大憲章の制定

十三世紀の初、英國にては「ジョン」王位に在りしが、内外の政治、甚だ宜しきを得ざりしかば、一二一五年、貴族等王に迫りて憲法を制定批准せしめたり。これ所謂大憲章にして、英國の立憲制度の端を開けるものなり。その後「ジョン」王の子「ヘンリー」三世勅令を發し、議會には貴族及び僧侶の外に、更に各市撰出の議員をも加へて、同じく議事に參與せしめ、英國下院の始、人民の參政權を擴張せり。一三三八年より英國は佛國と爭端を開き、所謂百年戰爭ありて、終に英國の敗北に終りしといへども、却て國民の統一を促し、國勢の強固を致せり。

佛國との百年戰爭
その結果

○ドイツ

由來

轉じて「ドイツ」國の狀況を略説せん。「ドイツ」は「フランス」と同じく、八四三年「フランク」王國の分裂より創まれり。「シアーレマン」帝の系統の繼續せしこと、凡そ八十年なりしが、國中大諸侯の權力甚だ強かりき。帝の系統絶ゆるに及び、「ドイツ」は遂に選舉王國となり、九一九年「サキソニー」侯「ヘンリー」選ばれて王位に即きぬ。「ヘンリー」の子「オットー」は「シアーレマン」帝の偉業を追慕し、先づ「イタリア」を征して「イタリア」王の位に上り、又法王の加冠によりて「ローマ」帝となれり(九六二年)。然るに、その結果は、却て國內の分裂を來し、「イタリア」に連りたる領土は、漸く縮小せられにき。

オットー帝の業

一〇二四年「フランコニア」王朝は始まれり。その「ヘン

リ。三世は、諸侯を服し、ローマ法王を制し、ドイツの國勢一時は甚だ振ひき。ローマ法王と相争ひ、終にその門に至りて赦免を乞ひし。ヘンリー四世は、即ちヘンリー三世の子なり。

一統完からず

アウストリア家の帝位

○イタリア

由來

一一三八年王統また變更せり。この後も、ドイツ帝とローマ法王及びイタリア諸市府との争絶えず、國內は諸侯割據して、王權空名に歸し、社會の紛亂最も甚しかりき。一四三八年、アウストリア侯アルベルト王位に推戴せられ、是より三百餘年間、ドイツの王位は、アウストリア家の世襲となれり。

「イタリア」の分立は、「ドイツ」并に「フランス」と時を同じくす。後に「ドイツ」の「オットー」帝に征服せられて、その版圖内

諸市府の隆盛

國家の統一を得ず

○スペイン

に入りしが、「イタリア」の諸市府は獨立を得んと欲し、常に法王と相結びて、「ドイツ」帝に抗せりき。十二世紀の末頃に及び、「イタリア」北部の諸市は自治を許され、特に「ヴェニス」、「ジェノア」、「ピサ」及び「フロレンス」の諸府は東方貿易の全權を握りて富盛を極め、「フロレンス」の如きは、更に文學・美術の中心となり、文藝復興の氣運を開けり。然るに、諸市府は、互に相争ひて疲弊を招き、且蒙古、トルコ等の諸族「アジア」より興起し來るに及びて、東方の貿易閉塞せられ、その勢遂に振はず。かくて、「イタリア」は、中世の終りに至りても、未だ國民の統一を見ず、「フランス」、「スペイン」、「アウストリア」諸國王がその功名を争ふの地とはなれり。

次ぎに言ふべきは、「スペイン」國の成立あり。第八世紀

由來

の初「スペイン」の地は「アラビヤ」人に征服せられしが、その
 建立に係る「西カリフ」國の勢力漸く衰ふるに及び、「キリス
 ト」教の諸小王國相踵ぎて起れり。一四六九年「アラゴン」
 王「フエルヂナンド」は「カスナル」女王「イサベラ」に婚して、兩國
 相合併し、「スペイン」王國の基礎成りぬ。次ぎて「ナヴァール」
 王國を併せ、一四九一年には、回教徒最後の領地なる「グラ
 ナダ」を陥れしかば、「ポルトガル」を除くの外、半島の地は、全
 く「スペイン」王國の一統に歸したり。而して「グラナダ」陥
 落の同年、「イサベラ」后は、「コロンブス」を助けて新大陸發見
 の航路に上らしめ、「スペイン」の勢力これより大に振興せ
 り。

○ポルトガ
ル

新大陸發見
の率先

一統

「ポルトガル」は、もこ「カスナル」の屬領なりしが、一一三九

年獨立の一王國となり、中世の終には、航海通商の事業盛
 大を極め、「スペイン」にその富盛を競ふに至れり。事は、共
 に後章に説くべし。(サセウ)

第六章 蒙古人及び「トルコ」人の侵入

中世の下半、歐洲「ナイトン」種族の諸王國漸く發達の運
 に向へるに當りて、黄色人種が歐洲人をして震恐せしめ
 たるもの、前後二あり。蒙古人并に「トルコ」人の侵入即ち
 これなり。

第十一世紀の中頃、「トルコ」人「バレスタイン」地方を略取
 して、「キリスト」教徒を虐待せしより、十字軍の起れること

黄色人種
の
歐洲侵入

○トルコ人

は、前に述べたり。當時、トルコ人は中央「アジア」の地に一大王國を興し、次第に「アラビヤ」人の領土を併呑し、その勢一時は甚だ盛んなりしが、國內に争訌起り、遂に力を失ひたりき。

○蒙古人

この際、慄悍ある蒙古種族、外蒙古の地に起り、その雄主成吉思汗（汗位よ即く大一二〇六年）「アジア」の西南部にも横行して、始めて歐洲侵略の端を開き、窩濶台（即ち太宗）に及びては、征歐の大軍を發して（一三二三年）「ロシア」を焚掠し、「ハンガリー」「ポーランド」地方に侵入し、遂に欽察國を建てたり。「ロシア」の諸侯は、實に欽察國汗に貢賦を納れて臣と稱し、以て第十五世紀の末に及びき。

一三六八年元朝の滅亡せしより、蒙古諸汗國も漸く勢

蒙古人の歐洲に建てたる國

○オットマン・トルコ人

を失ふに至りしが、これより先、第十三世紀の末、「オットマン・トルコ」人、小「アジア」の地に勃興し、次第に小「アジア」を併呑し、更に歐洲に進みて、東「ローマ」帝國に迫り、「アドリアノーブル」を取りて首府とせり。

バジャゼット

「トルコ」王「バジャゼット」益、歐洲を蠶食し、一三九六年、「ニコポリス」の役には、獨佛兩國の連合軍を破り、勢に乗じて「コンスタンチノーブル」を圍み、將にこれを陥れんとせり、然るに、彼の成吉思汗の後裔にして、察合台國より起り、亞歐の諸國を蹂躪したる帖木兒は、東「ローマ」帝の乞に應じ、大舉して「トルコ」の本國を攻めしかば、「バジャゼット」は軍を還して、これと「アンゴラ」に戦ひ（一四〇〇年）大敗して敵の虜となりき。（帖木兒は、一四〇五年病死し、その征服せる廣大の版

折トルコの挫

チムール汗

トルコの勢
力回復
東ローマ帝
國の滅亡

勢
トルコの盛

圖は全く瓦解に歸せり。
かくて、歐洲は一時「トルコ」の患を免れしも、「トルコ」人は漸く勢力を回復し、歐洲に侵入すること止まず。一四五三年、遂に「コンスタンチノープル」を陥れ、「東ローマ帝國」を滅ぼし、首府を茲に奠めたり。ここに於て、「トルコ」は歐亞の兩大陸に跨れる大帝國となり、十六世紀の初頃には、その版圖、東は「ナグリヌ」に至り、西は「ハンガリー」を略して、「ダニューブ」河を境とし、南は「エジプト」を包有したりしが、爾後次第に衰運に傾けり。

第七章 學藝の復興及び海上發見

暗世

中世の初、「ローマ」舊時の文明は、その光を没し、征服者たる蠻人は、未だ蒙昧の域を脱せず、且宗教の人心を束縛すること甚しかりしかば、學藝は頗る廢頽し、所謂「暗世」を現しぬ。かくの如きもの數百年にして、復興の氣運は徐々として發せり。

興
○學藝の復

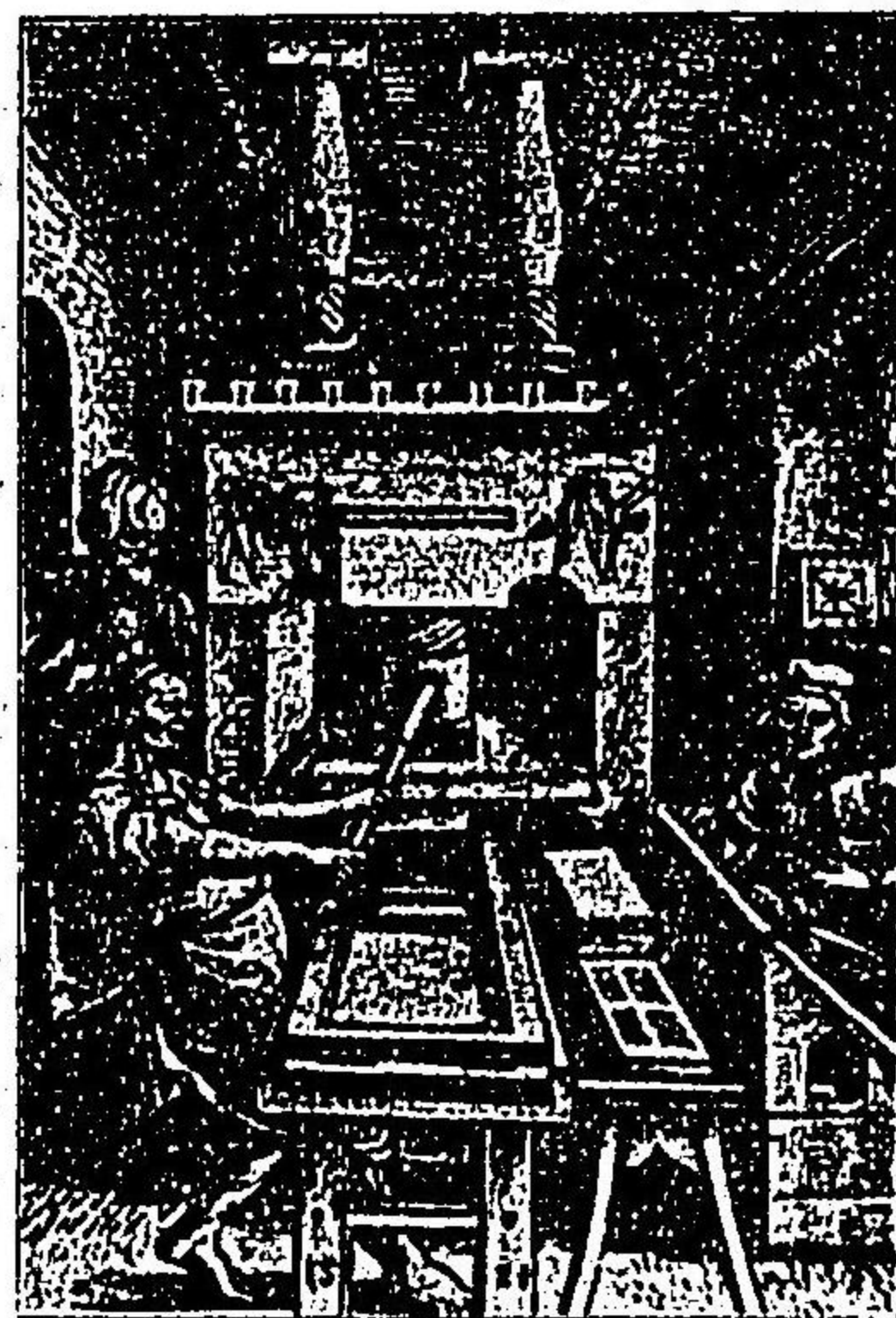
第八世紀の末、「シアーレマン」帝大に學問を獎勵して、先づ文運復興の端緒を開き、僧庵の僧侶は自ら文學を研修せしのみならず、學校を設けて、幼童を教育し、又「アラビヤ」の回教徒は諸科の新智識を歐洲に輸入して、文化の開發を促せり。之に加ふるに、十字軍の結果は、封建制度の衰頽を導き、交通を盛にし、産業を興し、知見を廣めしめしかば、

人智漸進の
諸動因

歐洲の人心は著しく活潑となり、種々の勢力となりて顯るに至れり。

古文學復興

かく人智漸く啓發し來れるに際し、イタリーにては、第十四世紀の初より「ギリシア」「ローマ」古文學の講究及び古書の探求盛んに行はれ、第十五世紀より第十六世紀に亘りて、古學の復興は、全歐洲の大勢となれり。



活版印刷術の始

美術も亦文學と相伴ひて復興し、遂に古代の風を融和して、一新式を成すに至りぬ。「ミケル・アンジェロ」并に「ラファエル」は當時の美術家中尤も卓出せるもの

智識普及の大發明出づ
—活版印刷術

なり。

學藝の復興と共に、智識普及の一大發明出でき。即ち一四四〇年頃「メイソンの人」「ジョン・グーテンベルグ」が活版印刷術を創始したる事これなり。弊布より紙を製出するの法は、これに先だちて發明せられたりしかば、兩者相待ちて、文明進歩の上に致せる功は實に偉大なりき。文化進歩の氣運益盛んなる上に、新航路及び新大陸の發見ありて、世界の範圍は頓に擴張せられたり。左にその次第を述べん。

○海上發見

歐人探檢心の勃興

第十三世紀の末「イタリー」人「マルコ・ポーロ」が元朝に仕へ、歸國の後その見聞記を公にして「アジア」諸國の狀況を紹介したるより、歐洲人の探檢心は大にこれが爲めに鼓舞

ヘンリー王子の航海奨励

インド航路の発見

せられしが、東方に於ける新航路発見の先導者は、實に「ポルトガル人なりき。」

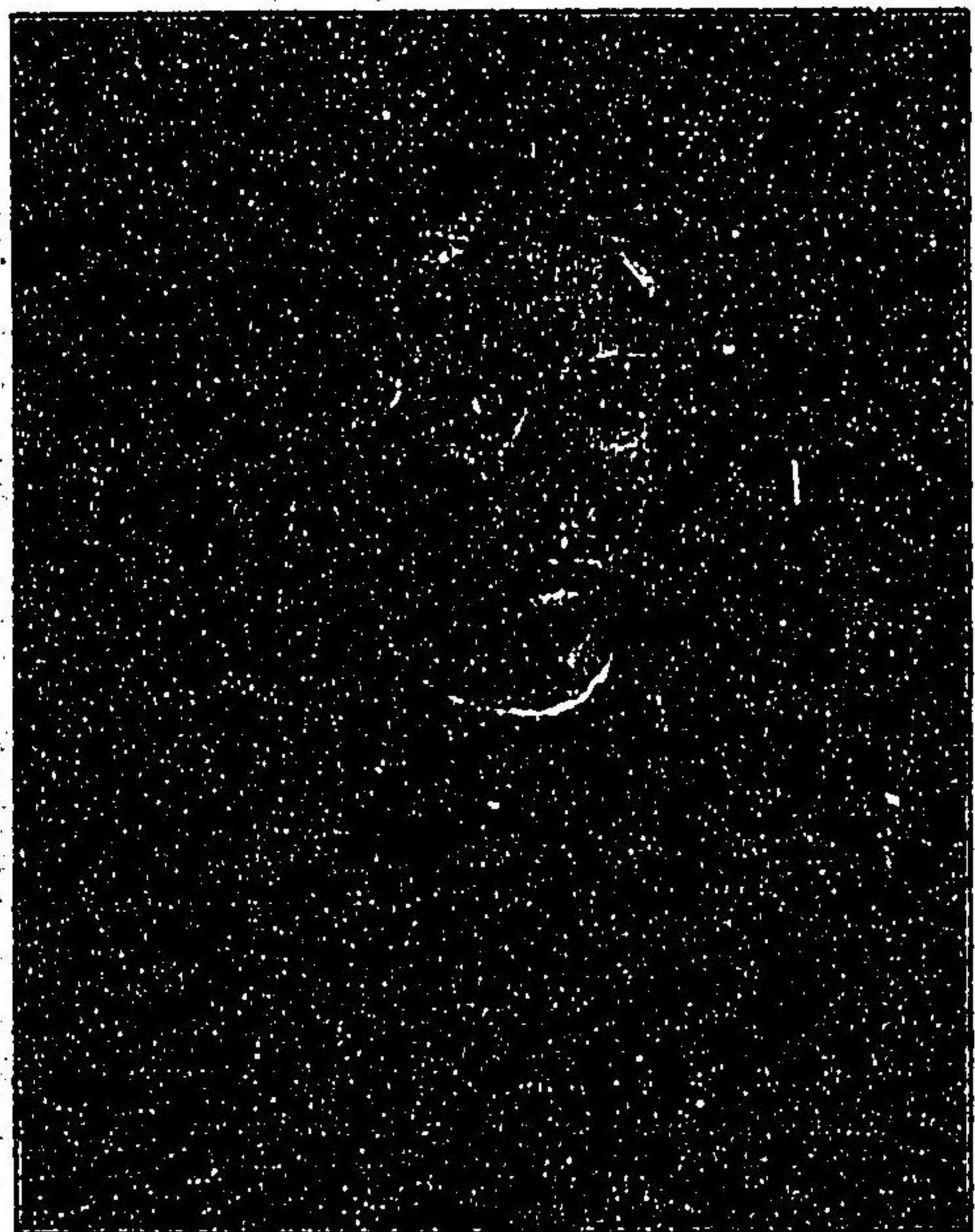
「ポルトガルの王子ヘンリー」最も航海の事に熱心にして、天文の観測磁針の利用等に就きて研究をつとめ、一四一五年（我が後小松天皇）よりは、毎年船を出して「アフリカの西岸を探検せしめき。」ヘンリー「歿し、一四八一年「ジョン二世」ポルトガルの王位に登るに及びて、益探検の歩を進めしかば、一四八六年「バートロミウ・ディアズ」は「アフリカの南端たる喜望岬に達し、次ぎて、一四九八年「ヴァスコ・ダ・ガマ」始めて喜望岬を遶りて、インドの「カリカット」に到着せり。

これより「ポルトガル人」は、數船を「インド」に出し、一五一〇年（我が後柏原天皇）以來「ゴア」を以て東洋に於ける根據地と

ポルトガルの東洋貿易

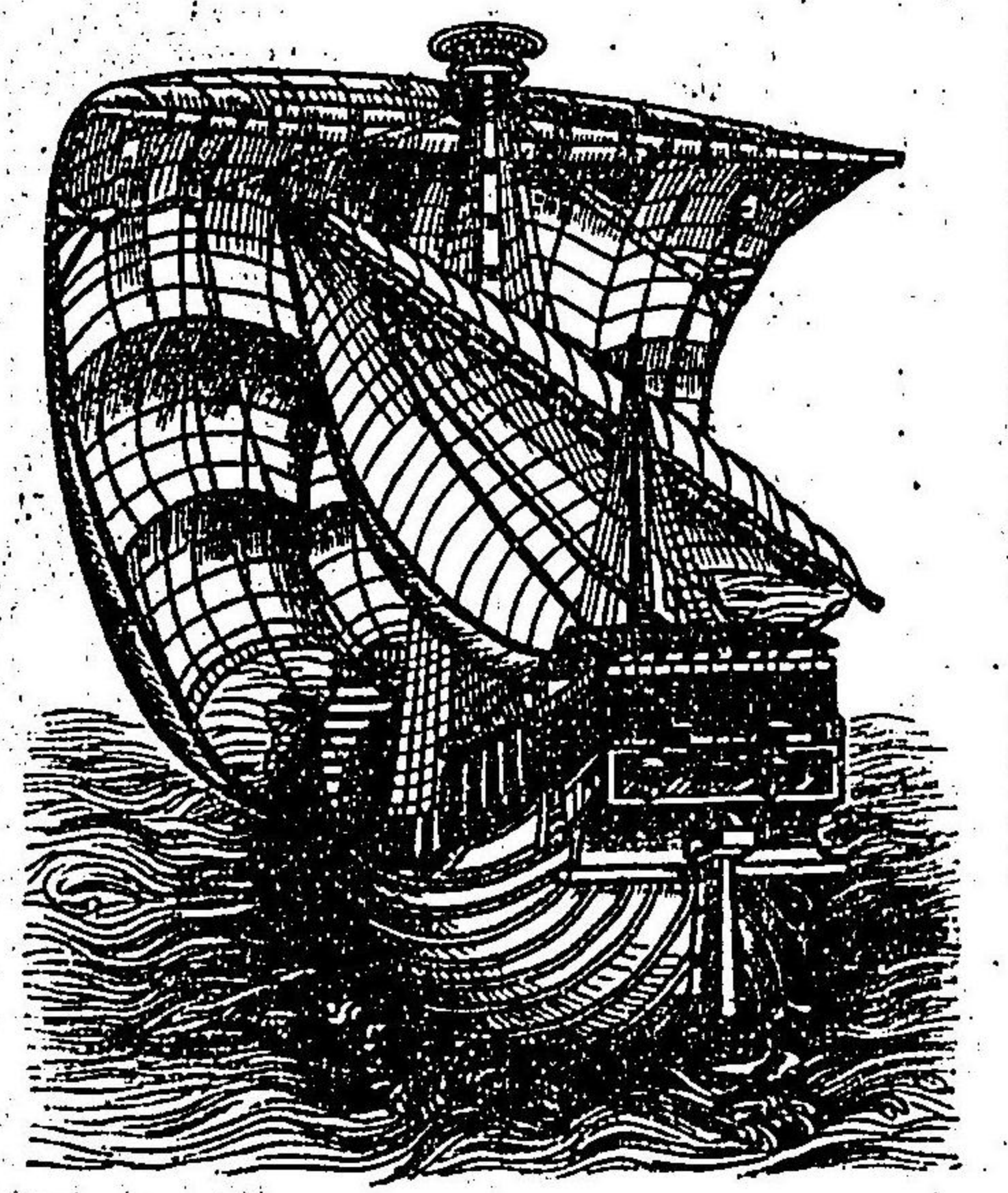
コロンブスと西航路

イサベラ后の新大陸発見補助



定め、進んで日本支那とも通じ、盛んに殖民貿易の業を営み、一時は東洋の商業權を專握したり

ト「フ・コロンブス」は西方の航路によりて「インド」に至るべき事を唱へ、葡王及び英王に説きしかば、容れられず。然るに「スペイン」の王后「イサベラ」これを賛助し、自己の裝飾品等を賣りて、航海の資に供し、船三艘を「コロンブス」に



船船の紀世五十

與へたり。一四九二年「コロンブス」「バロス」港を發し西航するこゝ八十餘日の後「西」「イ」「ンド」の一島「サン・サル」「ヴ」「ドル」に達し「アメリ」「カ」大陸發見の端緒を

開きぬ。

アメリカ大陸發見
スペインの盛大
世界一周

これより「ス」「ペ」「イン」は數船を西方の新世界に派し、一五二一年には「メ」「キ」「シ」「コ」を征服し、一五三四年には「ペル」を攻略し、頓に盛大なる殖民國となれり。而して、一五一九年「ポルトガル」人「マゼラン」は「スペイン」王の命を奉じて地

發明發見の歐洲及ぼせる影響

球周航を企て、一五二一年に至りて、その船隊中の一隻は恙なく「ス」「ペ」「イン」に歸れり。右に同時に「ポルトガル」は「ブラジル」を占領し、「イギリス」及び「フランス」は「北アメリカ」の海岸を探検發見せり。此等海上の諸發見は、歐洲の政治・經濟に大影響を及ぼし、人心を醒覺せしこと著るしく、社會の形勢爲めに一變せり。

第三篇 近世史

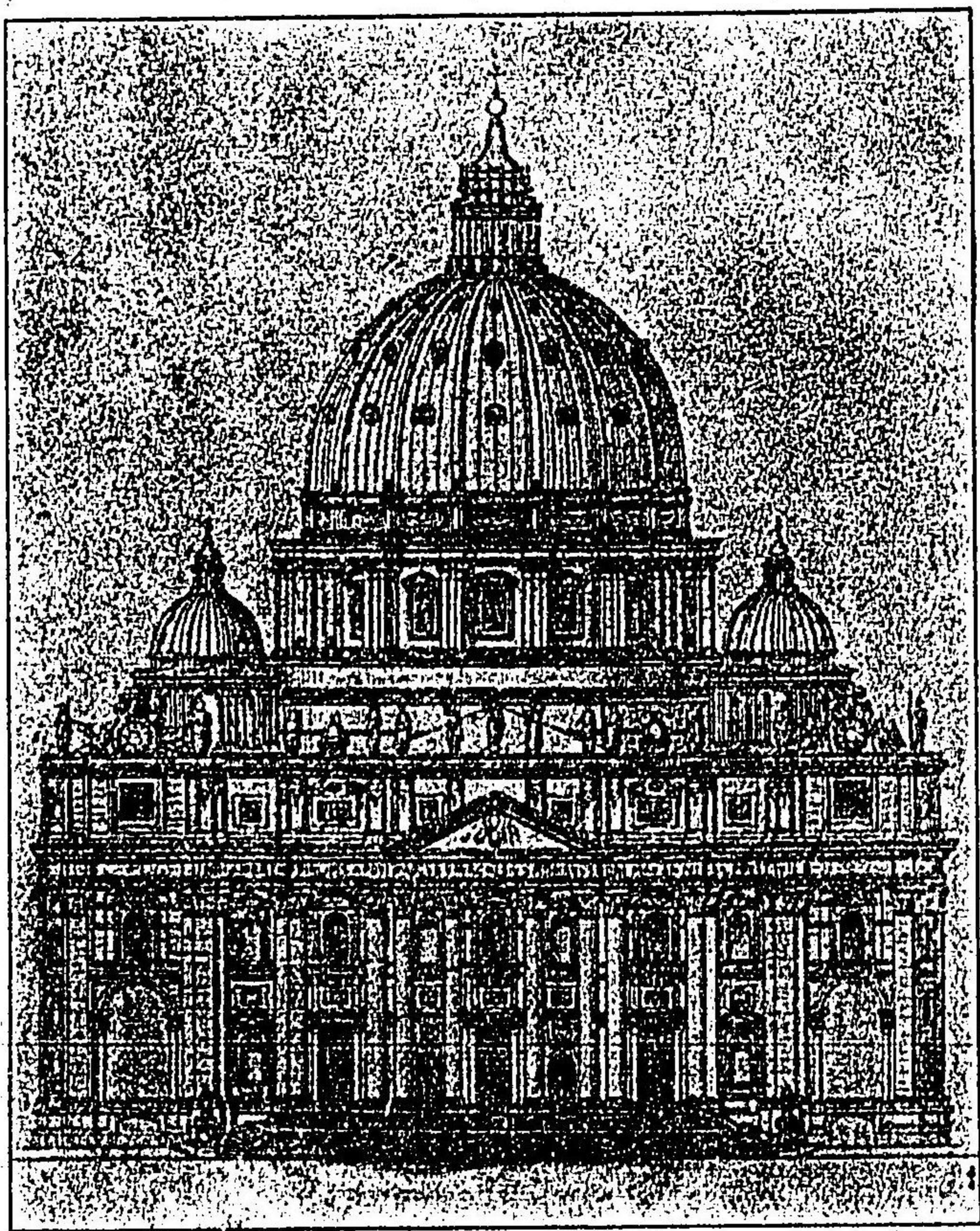
第一章 宗教改革

ローマ教會の弊害
宗教改革の氣運

中世の間、ローマ法王が無上の權力を有するや、之を濫用して社會人心を拘束し、僧侶の非行また甚しかりき。されば、既に第十三世紀以後、ローマ教會に反抗して、その改革を唱ふるものありしかど、却て法王に制壓せられて、目的を達すること能はざりき。

學問の復興・新世界の發見は人心を啓發して迷信を去り、ローマ法王に對する尊敬の念一般に薄らぎたるに、ローマ教會の弊習は依然たりしかば、宗教改革の希望は、漸

く全歐を動せり。



院寺一ターピ・トンセ

紀元一五一三年、ノオ十世法王となるや、セント・ピータ

ルuterの
宗教改革唱
道

「寺修築の費用を得ん爲に、盛んに贖罪券を販賣せしめたり。ドイツの「オーガスタン派」の一僧「マルチン・ルーテル」これを憤慨し、大にその非理を鳴らし、九十五條の告文



ルテール・ンテルマ

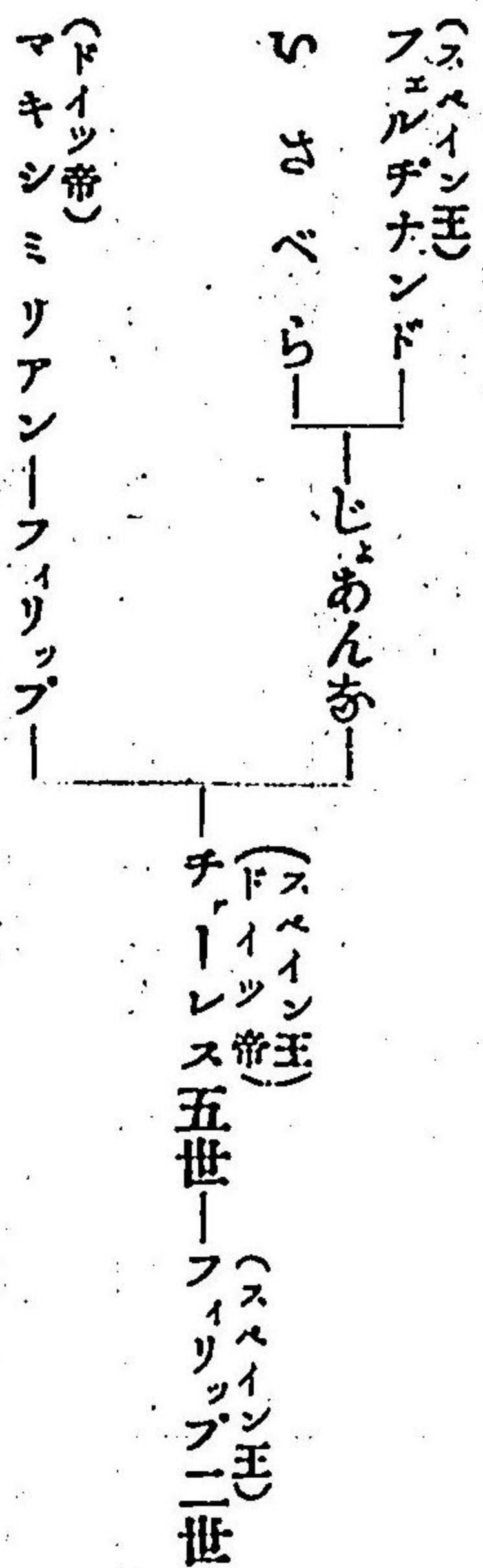
を「ウイテンベルグ」の寺門に掲示せり。實に一五一七年なりき。

ここに於て「ルuter」の告文は忽ち歐洲諸國に傳播し、法王非難の聲益盛なり。法王由て「ルuter」にその説を改めんことを勧めしも、「ルuter」固く執りて聽かず、その令狀を焚棄せり。而して「ルuter」の説を贊助

法王改革説
の鎮壓を圖
る

するもの相つぎて起り、法王が「ルuter」に對する破門の處罰も全く効力なきに至りぬ。

法王は、更に當時新立の「ドイツ」帝「查理五世」に援助を求めたり。「查理五世」は、父母兩家の版圖、即ち「ドイツ」、「アウストリア」、「スペイン」、「米國の新領地」、「ネザラント」、「ナポリ」を併有し、領域の廣大、實力の強盛なること、當時歐洲の首位に在りき。



「查理五世」乃ち法王の請に應じ、一五二一年國會を「ウテ

ウッルムズ
會議

ムズに開き、ルーテルを召して、その説を棄てしめんごせしに、ルーテルは斷然としてこれを斥け、自説の正しきことを痛論せり。これより宗教改革の聲は益、勢力を加へ、サキソニー侯を始め、他の諸侯も新教に改宗するもの漸く多かりき。

新教の傳播

一五二九年、チャーレスは再び國會を、スパイエル府に開き、新教の蔓延を禁じたりしが、ルーテルの説を奉じたる「ドイツ國內の諸侯及び諸市は、その非を鳴らして、これに抗辯せり。新教徒を稱して「プロテスタント」の（抗論者）といふは、即ちこれによる。爾後、新教は北歐の諸國に傳播して、勢力を占むるに至れり。

宗教改革の影響は、教育上にも及び、人民一般の教育を行ふ學校の起

ドイツに於ける新教信仰の公許

動
舊教徒の反

れるも、この頃よりのことあり。ルーテルは、最も熱心に普通教育のために盡力したる人にして、女子教育の學校をも建設せんことを當路者に勸告し、ルーテルの事業を助けたる「ブーゲンハーゲン」も、女學校設立の緊要あることを世人に訴へたりき。これより、女子教育は漸次に隆興の氣運に向へり。

かくて、一五五五年（我が後奈良天皇）に及び、チャーレス五世は「プログスブルグ」の宗教會議に於て、新教徒の信仰の自由を許せり。しかも、南歐の諸國には、舊教依然としてその勢力を維持したりき。この頃、スペイン人「イグナシアス・ロヨラ」といふもの、ゼスイット教會を組織し、新教を壓して「ローマ」法王の威權を振興せんことに盡力せり。該教會の宣教師は、遠く東洋諸邦にまで布教をつとめ、我が戰國時代に入り來りたる所謂「切支丹宗」また「天主教」ともいふ

は、皆この一派なりき。
かゝる有様なりしかば、新舊兩教の争は常に絶えず、而して政治上の争又これに合し、種々の困難なる事情を生じたり。

本邦關係要事年表

(第二章末年表參看)

- 一五一四^年…葡人始めて支那に来る。
- 一五四〇…「ゼスイ」教會の設立。
- 一五四二…葡人始めて日本に来る。翌年鳥銃を傳ふ。
- 一五四八…葡人天主教を我が國に傳ふ。
- 一五六八…織田信長葡人を召し、南蠻寺を建つ。
- 一五八二…九州の諸侯、大村有馬等使を、ローマに遣はす。
- 一五八五…豊臣秀吉天主教を禁す。
- 一六一二…徳川二代將軍天主教を嚴禁す。

○フランスに於ける新教徒の遺害

- 一六一三…伊達政宗使を、ローマ法王に遣はす。
- 一六三七…嶋原の亂あり。亂後我が國の天主教徒全く滅絶せらる。

第二章 佛國の内亂 英國の隆盛

「オランダ」共和國の獨立

宗教改革の事、フランスに傳はるや、佛王はこれを壓服するの政策を執れり。由りて、新教を奉ぜる諸侯は同盟してこれに當りぬ。然るに「チャーレンス」九世の時に及び、攝政母后「カザリン」新教徒を誅滅せんことを圖り、一五七二年八月兩教徒の王妹の婚儀に參列するため「パリ」に來集せるに乘じ、一夜新教徒二千餘人を捕へてこれを殺せ

り。「セント・パウル」の虐殺と云ふは、即ちこれなり。次ぎて、地方にても、その害に遭ふもの三萬餘人に及びべきいふ。

ナントの勅令

是より國內は益亂れ、寧日ごてはなかりしが、賢明なる「ヘンリー」四世位に即き、一五九八年「ナント」の勅令を發して、新教徒に許すに信仰の自由を以てせり。ここに於て多年の國亂始めて定まりき。而して、名相「サリー」王を輔けて内治を整理し、實業を振興し、「フランス」富強の基をなせり。

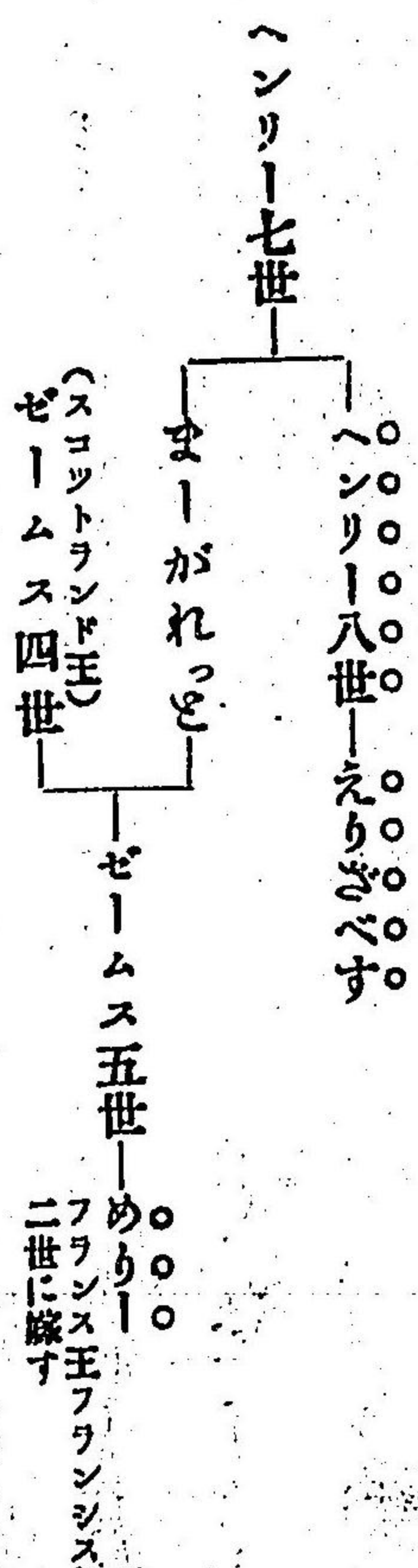
○イギリスに於ける宗教關係の争

「ルーテル」が宗教改革を唱へし頃、「イギリス」にては「ヘンリー」八世位に在りて、舊教の保護に盡力し、「ローマ」法王より護教者の稱號を得たり。然るに、皇后「カザリン」を離婚

するここに關して法王と争を生じ、遂に自ら英國教會の首長となり、「ローマ」教會より獨立せり。但し、その教法に至りては、未だ革新する所なかりき。

エリザベス女王新教を國教とす
エリザベスとメリー

「ヘンリー」八世歿し、十一年を経て皇女「エリザベス」二十歳にして王位に即きぬ（一五五八年）。「エリザベス」は、新教を以て國教とし、これを奉ぜざるものを嚴刑に處したり。この時に當り、「スコットランド」女王「メリー」佛國より歸りて舊教を奉じ、且内行修まらずして人望を失ひ、英國に



投せしが「エリザベス」はこれを幽閉せりき。英國內の舊教徒「メリー」の即位を望み「スペイン」の兵を借りて事を舉



エリザベス及びメリー

げんごししが、謀泄れ「エリザベス」は遂に「メリー」を死刑に處せり（一五八七年）。これより先、一五五六年、「ドイツ」帝「チャールズ」五世の位を去るや、弟「フェルナンド」は「ドイツ」の帝位を承け、子「フィリップ」二世は「スペイン」の王位を嗣ぎしが、「フィリップ」二世は歐洲舊教徒の主盟を以て自ら任じ、英王「エリザベス」が新教を

イギリスと
スペインと
の争抗

スペインの
大敗及び爾
後の失勢

英國の隆盛

獎勵するを快しこせず。加之「スペイン」の領地たる「ネザランド」現今の「オランダ」及び「ベルジウム」地方國人が「フィリップ」王の宗教上の壓制に抵抗して叛旗を擧ぐるや、「エリザベス」これを援けたるを以て、「フィリップ」王は、「メリー」遭害の翌年、大艦隊を編制しこれを必勝艦隊といへり英國に來襲せり。英艦隊へ撃つて、大に之を破りぬ。ここに於て、「スペイン」の海上權は全く衰頽に傾けり。これに反して、爾後英國は、兵備の整頓、航海殖民の擴張、商工業の振起、最も著しく、國運隆盛を極めき。文學も亦大に發達し、「シェクスピア」の雄名は永く史上に輝けり。實に「エリザベス」の治世四十五年間に、英國は歐洲中第一流の位地を占むるに至れり。

○オランダ
興起の次第

スペインに
對する獨立
軍

オランダ共
和國の成立

英國の海上權増進するに當りて、オランダ國も亦殖民。通商の事業甚だ盛なりき。これより先、ネザラント人が「スペイン王」フィリップ二世の壓制に反對して獨立軍を起し、ここは前に一言せり。一五六八年「オレンジ公」ウリアム義兵を「ドイツ」に起して、「ネザラント」に入り、その人民を勵まし、「スペイン」の大軍に抗し、屢敗れて益撓まず。已にして、「ネザラント」の十七州中、北方の七州は永久聯合を組織して、「オランダ」共和國の基礎をなし、南方の諸州は遂に「スペイン」に屈從せり、南方の諸州は現時の「ベルジウム」國となれり。「ウリアム」は後暗殺せられしが、その子「モーリス」義烈父に劣らず、抗戰愈はげしく、英王「イザベラ」また常に援助を與へたり。「フィリップ」王これを鎮定するこ

海上權の發
達



ムアリイウ公ジンレオ

勉にして忍耐力に富み、戦亂中も商業を怠らずして富力を増進し、その船舶は廣く世界の各所に往來し、「スペイン」「ポルトガル」の舊業地を収めて掌握に歸せしめ、「オランダ」の都府は、一時世界商工業の中心となりき。英國征伐に

この難きを悟り、一六〇九年に及び、十年間の休戦を約して、その獨立を默認せり。軍起りてより、ここに至るまで、實に三十七年なり。「オランダ」人は、勤

大敗を取りたる「スペイン」は「オランダ」隆盛のために、國力益衰微し、また前日の面目なきに至れり。實に歐洲の形勢一變の時期なりと云ふべし。

東洋關係要事年表

(第一章末年表參看)

- 一五六三^年……葡人支那の「マカオ」を占領す。
- 一五六五……「スペイン」人「フィリピン」群嶋を占領す。
- 一五七九……英人始めて「インド」に航す。
- 一五八〇……「スペイン」人通商の公許を明廷に求む。
- 一五九二……「スペイン」の使日本に來り、貿易を請ふ。
- 一五九三……蘭人始めて「インド」に航す。
- 一六〇〇……英國東印度會社を創設す。蘭船我が堺浦に來りて、通商を請ふ。
- 一六〇二……蘭國東印度會社を創設す。

戦争の起因
—新舊兩教
の争

- 一六〇八……蘭人我が平戸に來りて通商を請ひ、許さる。
- 一六一三……英人平戸に來りて通商す。
- 一六一九……蘭人「ジャワ」島に據り、「バタヴィア」府を建つ。
- 一六二四……蘭人臺灣を占領す。
- 一六三九……日本鎖國。蘭人のみ特に通商を許さる。
- 一六五三……蘭人通商の公許を清廷に求む。

第三章 三十年戦争

一五五五年「アugsブルグ」の和議によりて、「ドイツ」に於ける新舊兩教の紛争は暫く止みたりしが、「ルドルフ二世」(一五六七年)に及び、また新教徒を酷遇せしかば、國內の新教徒相同盟してこれに抗しぬ。已にして、一六一九年「フェ

デンマーク
王の干渉

ル。ヂ。ナ。ン。ド。二。世。の「ドイツ」帝となるや、亦新教徒の征服を
圖り、國內大に亂れぬ。「デンマーク」王「クリスチアーン」四世、
英・蘭二國の後援を得、兵を率ゐて「ドイツ」に入り、新教軍の
魁首となれり。然るに、「ドイツ」の雄將「ローレンスタイン」
は、大に「デンマーク」の軍を破り、「クリスチアーン」は引き還り
き。

スエデン王
の干渉

これに次ぎて、北方の獅子と稱せられし「スウェーデン」王「ガス
タヴス・アドルフ」が「ドイツ」の新教徒を保護せんとして、英・佛
兩國に結び、一六三〇年「ドイツ」に赴き、連に帝軍を敗れり。
一六三二年「ルツェン」の戦に、「ガスタヴス」は陣歿したりしが
その宰相奮つて戦争を持続しき。この間に、「ローレンス
タイン」は、謀反の嫌疑によりて、皇帝の刺客に暗殺せられ

フランスの
干渉

政治上の争
主とある



スアフルドア・スアヅタスガ

たり。

この時に當り、佛
國にては「ルイ十三
世の宰相「リセリ」
「ドイツ」を弱めて自
國の勢力を強大に
せんとして、先には軍
資を送りて「スウェー

を助け、後遂に直接に戦争に關係するに至りぬ。これよ
り、宗教上の紛亂は一變して、「ドイツ」「フランス」兩國の争抗
となり、戦争數年に亘れり。

「ドイツ」軍は、數敗れて和を請ひ、一六四八年（我が慶安元

ウエストファ
リアの條約

亂平定) 遂に「ウエストファリア」の條約成り、三十年戦争全く局
を結べり。この條約によりて、舊教新教は共に同一の權
利を得るに至り、列邦の疆域も亦定められ、スウヰツル及
び「オランダ」兩國の獨立は承認せられ、「フランス」「スウェーデン」は、
各々の領地を加へたり。

ドイツの衰
弊

三十年戦争の爲に至大の損害を被ふりしは、「ドイツ」な
り。諸侯は勢を加へて、帝國の統一全く破れ、都鄙衰頽し
て實業振はず、學藝は退歩し、教育の道殆ど絶え、慘狀實に
甚しかりき。

宗教上紛争
の段落

「ウエストファリア」の條約後、宗教上の紛争はここに一段落
をなし、政治革命時代は漸く起りぬ。

第四章 「ルイ十四世時代の「フランス」

ルイ十四世
の即位

佛國は先に「リセリ」の政略によりて、「スウェーデン」を助けて
三十年戦争に関かり、遂には直接に「ドイツ」と相抗戦する
に至れること、前章に説きたるが如し。この戦争の終局
に先だちて、佛王「ルイ十三世」及び「リセリ」共に歿し、「ルイ十
四世」五歳にして位を継げり(一六四三年)。

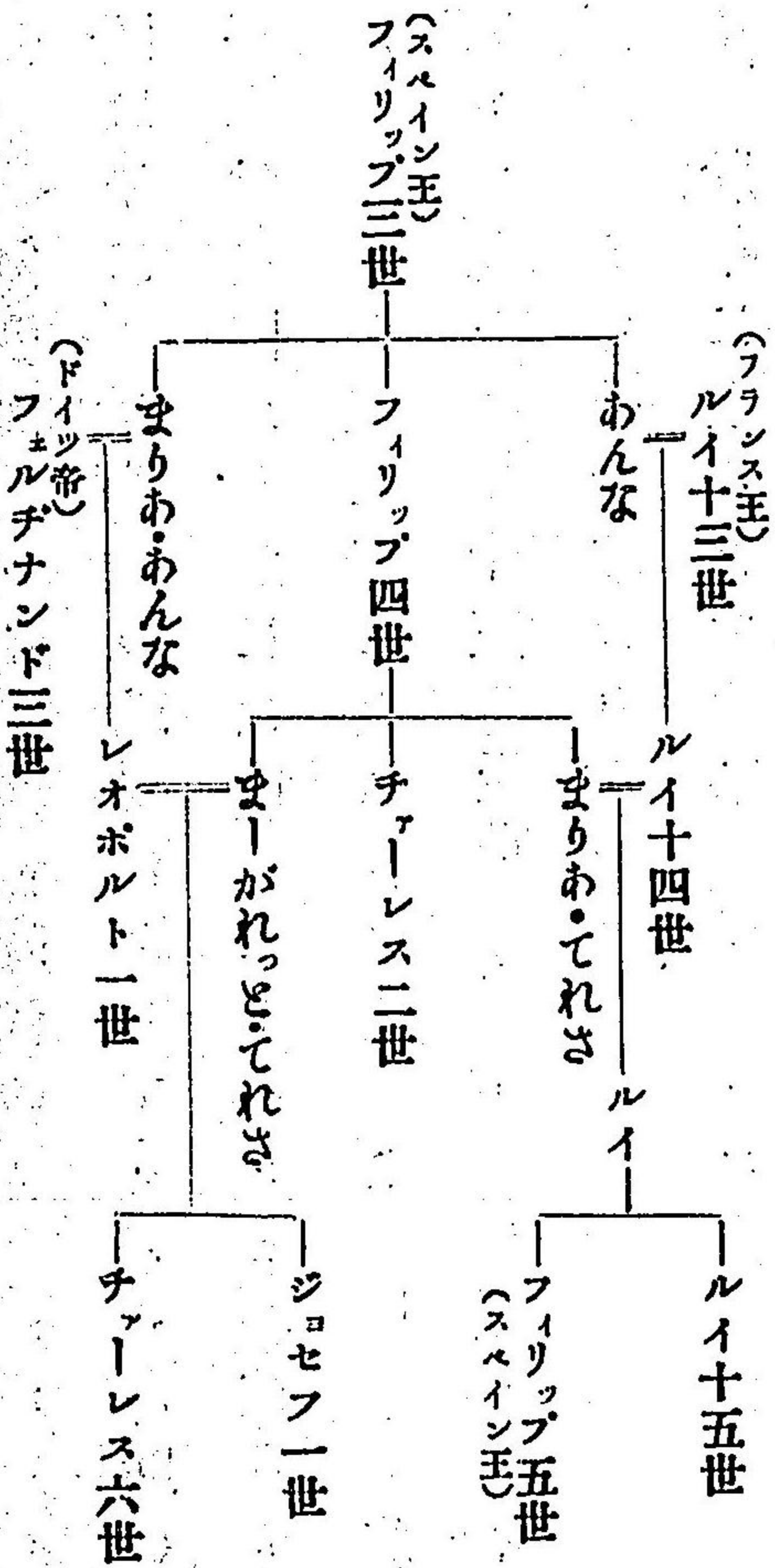
ルイ十四世
の國力振張
策

「ルイ」の壯年に至るまでは、宰相「マザラン」力を盡して之
を輔佐し、佛國の勢威漸く加はりぬ。「ルイ」既に政を親ら
するに及び、専制を以て佛國を統治し、一意に國威を張り
雄名を揚げんことを務めたり。されば、一六六五年には
「スペイン」領たる「ベルジウム」を侵し、つぎて、「オランダ」が「イ
ギリス」「スウェーデン」と相結びて之を妨げたるを怒りて、兵を「オ

列國との戦争

ランダに出し、スペイン、ドイツ及びイギリスの連合援軍と諸處に相戦ひき。而して、オランダ戦争の終るや（七八年）若干の領地を加へたり。

既にして、有名なるスペイン王位繼承戦争起れり。一七〇〇年、スペイン王「カールス二世」歿して子なかりしか



スペイン王位繼承戦役

ば、ルイ十四世は、孫「フリップ」をして「スペイン」の王位を繼がしめんと欲し、「ドイツ」帝「レオポルト」は、第二子「カールス」を立てんことを望めり。「イギリス」「オランダ」及び「プロシア」の諸國は、「ドイツ」に同盟して佛軍と戦ひき。然るに「レオ



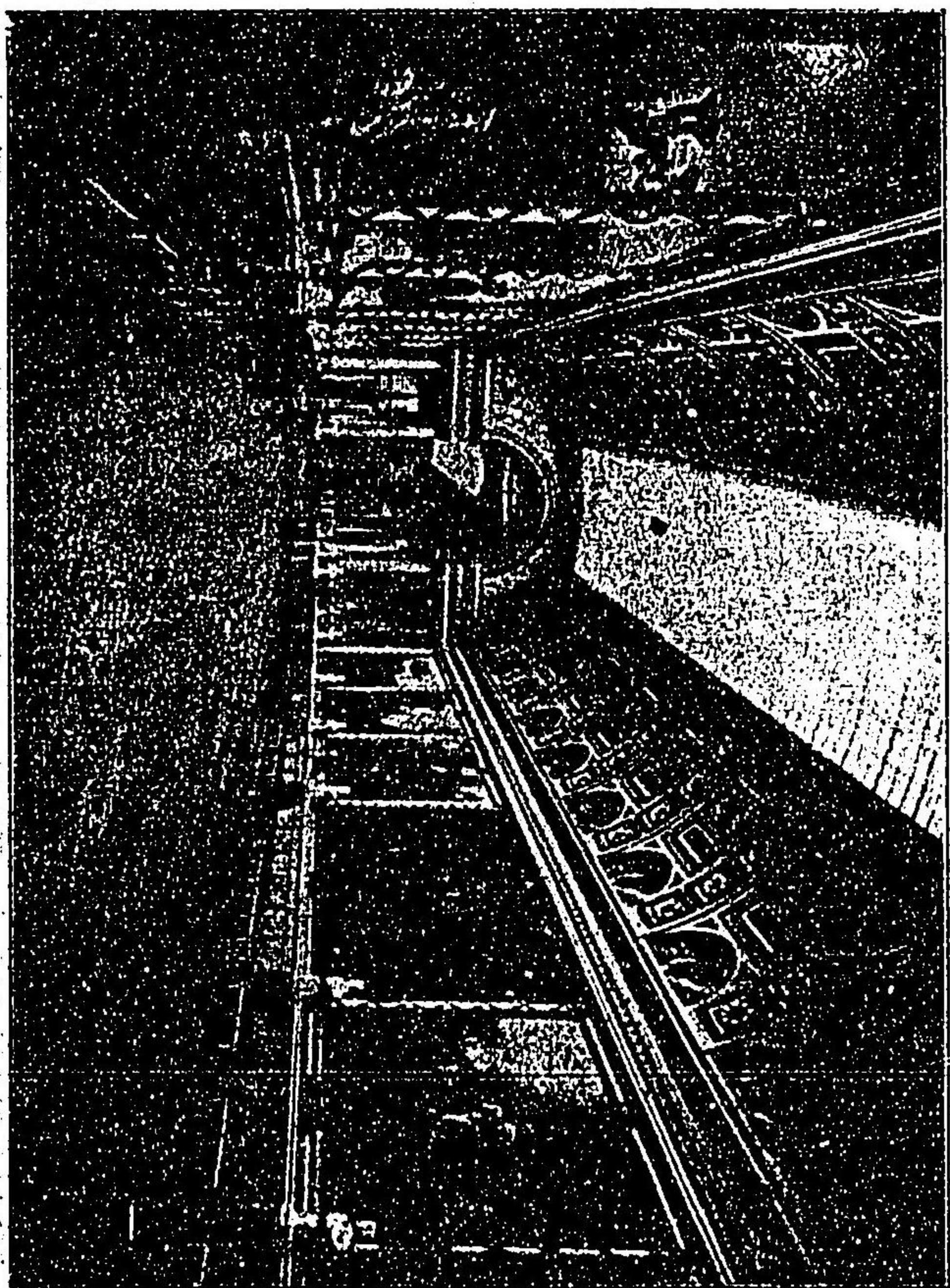
ルイ十四世

ポルト・「ジョセフ」二帝相つぎて歿し、「カールス」六世「ドイツ」の帝位に上るに及びて、形勢

戦争の結局

一變じ、一七一三年「ウトレヒト」の條約にて、佛西二國の合同せられざることを約して、「フリップ」の「スペイン」王位に即

くを承認し、十三年の争亂始めて収まれり。但しこれが爲に、佛國は北米に於ける領地を英國に讓るに至りぬ。



(國の發見時王ヘンリキエム)

また英國が地中海の關門たる「ジブラルタル」を「スペイン」より得たるも、即ちこの時なり。

フランスの
隆盛驕奢

一七一五年、ルイ十四世病を以て歿しぬ。王はその治世間、外國の侵略をつごめ、歐洲列國を敵として戦ひ、成功全くは意の如くあらざりしかど、佛國は實に歐洲中の最強國として隆盛を極めき。内に在りては、製造・貿易及び文學・美術盛んに獎勵せられ、宮殿の壯麗・風俗の華奢、目を驚かすばかりなりき。ここに於て、佛國は世界流行の中心と稱せられ、佛語が一般交際社會の用語となりたるもこの時に生まれり。然れども、驕奢の結果は諸種の弊害を生じて、國勢衰弱の原因となり、遂に大革命の動亂を引き起すに至れり。

衰亂の兆

第五章 英國の政變

英蘇兩國の合同

一六〇三年英國「エリザベス」女王の歿するや「スコットランド」王「ゼームス」一世入りて英王の位に上り「スチュアート」王朝始まる。ここに於て兩國の合同始めて成り「大ブリテン」王國の號起れり。

壓制政治

當時人民の自由を重んずるの氣風漸く盛んなりしに關せず「ゼームス」一世は常に國王神權説を固執して壓制を施しき。その子「チャールズ」に及びて、非法更に甚しく、數國會を解散し、擅に租税を課し、立憲政治を一變して專制獨裁政治とあすに至れり。既にして「スコットランド」人が王の壓制に抗して反旗を擧ぐるや、王は軍資を得んが爲に、一六四〇年國會を招集せり。然るに、國會は王命を奉

内乱起る

クロンウェル

國王の處刑

共和政の設立

ぜざりしかば、王は兵を従へて議院に臨み、以てこれを壓服せんとしたり。これより國中は王黨と國會黨との二つに分れ、干戈を以て相争ふこと六年の久しきに及び。王黨に屬したるは、貴族、僧侶及び地方の紳士等にして、農商等の平民は國會黨に與したり。國會黨の首領「オリヴァー・クロンウェル」能く兵を用ゐ、王黨全く敗らる。「チャールズ」王は「スコットランド」に奔りしが、遂に「スコットランド」人の爲に國會黨に送致せられ、幽囚の身となりぬ。「クロンウェル」乃ち高等法院を開きて國王の罪を斷せしめ、虐主國敵としてこれを死刑に處せり（一六四九年）。かくて國會派が「チャールズ」王を弑するや、王政を廢して、共和政を興し、「クロンウェル」その實權を握れり。「クロン

エルの施政は峻嚴專制を極めたりしと雖も、内治外交の振興せること、エリザベスの治世にも劣らざりき。



ルエウシロク・アヅリオ

「クロンエル」歿し、その子「リチャード・クロンウェル」父の職を継ぎしが、優柔にして統御の力なく、幾ばくもあくして任を

王政復古

辞し、國內再び乱れぬ。人民己に共和政に厭き、「チャールズ」の子の逃れて佛國に在りしものを迎へて位に即かしめ、王政復古せり（一六六〇年）。之を「チャールズ」二世となす。

憲法政治の發達

王政復古と共に、「クロンウェル」時代過嚴の反動として、奢侈遊惰の風習行はれ、道德大に廢頹せり。「チャールズ」二世に繼ぎて、弟「ジェームズ」二世位に上るに及び、專制の事多く、又舊教を以て國教となさんとし、全く民望を失へり。一六八八年人民「ジェームズ」の女嬪「オレンジ」侯「ウィリアム」三世を「オランダ」より迎へて王位に即かしめ、「ジェームズ」は逃れて佛國に入れり。國會は乃ち所謂權利狀を發布して、英國人民固有の權利を確定せしかば、英國の憲法政治是より大に發揚せり。

第六章 「ロシア」の勃興 「ピーター」大帝及び

「カザリン」二世女帝

欽察汗下の
ロシア

獨立

シベリア侵
略

「ロシア」は「スラヴ」種族の建てたる所なり。十三世紀の中頃、蒙古人の侵掠を被ふり、爾後二百餘年間、欽察國の治下に苦められしが、十五世紀の末に及び、「イヴァン」三世、始めて欽察汗の壓制を脱し、「ロシア」帝國の基を立てき。「イヴァン」四世（一五八四年）に及び、四近を征服して、大に「ロシア」の版圖を廣め、又「シベリア」侵略の端緒を開けり。これより凡そ百年を経て、有名なる「ピーター」大帝は出てたり。

「ピーター」大帝の即位は、一六八二年（我が徳川五代將二年）に在り。當時「ロシア」はその版圖海に瀕せずして、國運

ピーター大
帝の國政改
革

の發達甚た遅々たりしかば、「ピーター」は先づ「アゾフ」海を「トルコ」より略取して、黒海の出口を得たり（一六六九年）。つぎ「ピーター」は、國政を二三の貴族に托し、「オランダ」「イギリス」に赴きて造船術を學び、他の諸國をも巡察し、學者、將校、技工等を聘して國に歸り、制度、風俗に大改良を施し、全く社會を一新せり。



ピーター大帝

「は更に「バルチック」海に港灣を得んことを望み、「デンマー

版圖擴張

ク及び「ポーランド」と聯合して「スエデン」を攻めたり（一七〇〇年）「スエデン」王「チャールズ」十二世雄武にして能く兵を用ゐ、魯軍數敗を取りしが最後の勝利は「ピーター」に歸し、遂に「バルチック」海の東岸を得、首府を舊都「モスカウ」より新創の「セント・ピーターズブルグ」府に遷せり。國勢振興の基礎これより益、強固となりき。

「ピーター」の後、歴史上の一大女帝「カザリン」二世（一七六二年即位）に至り、「ロシア」の國威は更に振興せり。「トルコ」と戦ひて黒海なる「クリミア」を略し、又「プロシア」の「フレデリック」大王及「アストリア」の女王「マリア・テレサ」と通謀して、「ポーランド」の割取を企て、その地を分奪するこゝ三回に及び、一七九六年に至りて、全くこれを滅ぼしき。ここに於て「ロ

カザリン二世女帝の雄圖

シア」の版圖は大に西方に擴まりぬ。「カザリン」又内治の整備、國民の開進を務めしかば、「ロシア」は實に歐洲の「一雄邦」なれり。

東洋關係要事年表

（第四編第六章末年表參照）

- 一六一八年……露人シベリア侵略の歩を進めて、エニセイ河岸に達し、築を築く。
- 一六三二……露人「カムチャツカ」を探検す。
- 一六四三……露人漸く滿州に侵入す。
- 一六五六……露人「チルチンスク」市城を創む。爾後清露の衝突漸く起る。
- 一六八九……露清間に「チルチンスク」條約締結せらる。

第七章 「プロシア」の振起 「フレデリック」大王

「プロシア」の勃興と殆ど時を同じくして「プロシア」も亦歐

○プロシア
王國の由來

「プロシア」の勃興と殆ど時を同じくして「プロシア」も亦歐洲強國の列に上りぬ。「プロシア」はもと「ポーランド」の一侯國たりしが十七世紀の初「ドイツ」の一侯國「ブランデンブルク」を合併して「ポーランド」を離れ「ドイツ」の侯國となれり。一七〇一年「フレデリック」一世始めて「プロシア」の王位に即き、都を「ベルリン」に定めたり。

國力養成

「フレデリック」の子「フレデリック・ウイリアム」嗣ぎ、節儉を尙ひ、精銳の兵士を訓練し、以て國威を張らんことを務めたり。己にして、その子「フレデリック」二世即ち「フレデリック」大王（一七四〇—一七八六）に及びて、遂に父王の志を成しぬ。

フレデリック大王

○アウストリア女王マリア・テレサ

アウストリア王位繼承
戦乱

「フレデリック」大王即位の年「ドイツ」帝「チャールズ」六世崩じ、嗣子なかりしを以て、その遺意によりて「チャールズ」の長女「マリア・テレサ」二十四歳にして「アウストリア」の王位に上り、「ハンガリー」「ボヘミア」をも領有せり。然るに「バヴァリア」侯



王大クツリデレフ

「チャールズ」アルベルト及び「スペイン」王「フィリッパ」五世等は、各、國の王位を望み、騷亂起りしより「フレデリック」は機に乗じ、直に兵を出だして、境領「シレシア」を占領しぬ。つぎて、佛國は「バヴァリア」を連合して、境國に侵入せしかば「マリア・テレサ」は「ハンガリー」に赴きて、その人民を

奮起せしめ、以てこれに當れり。

然るに「バヴァリア」侯「チャールズ」は遂に推選せられて「ドイツ」皇帝となり、「チャールズ」七世と稱しぬ。よりて、英國は、奥國女王を助けて佛軍と戦ひ、これを破りき。これより先、女王は英國の勸告に従ひて、普王に「シレシヤ」を割讓して、これと和せしに、ここに至りて、普王は奥軍の盛勢を恐れ、再び佛國及び「チャールズ」七世と相結びて、奥領に侵入せり。己にして、一七四五年「チャールズ」七世死し、「マリア・テレサ」の夫「フランシス」一世新に選ばれて、帝位に上るや、「ドレスデン」の條約成りて、争亂収まりしが、普王の「シレシヤ」領有は、これによりて確定せられき。この戰亂を奥國繼承戰役といふ。

フレデリックの奥領シレシヤ領有

マリア、テレサのフレデリックに對する復讐戰爭—七年

フレデリックの勝利

「マリア・テレサ」は、温雅にして婦人の美德を備へしが、その氣象は甚だ剛毅にして、丈夫にも譲らず。「シレシヤ」割讓後、これが回復の念止み難く、先づ經費を節約して、財政を整理し、益、精銳なる陸軍を養成して、機を待ちぬ。遂に「フランス」「ロシア」「ポランド」「サキソニー」及び「スウェーデン」の諸國と同盟を結びて、「プロシヤ」討滅の策を畫し、所謂七年戰爭（一七五六年）の亂となれり。この間、「フレデリック」王は、ただ英國の援助あるのみにて、四面に敵を受け、困厄實に甚しかりしが、能く不撓の精神を以て、これに當りき。然るに、一七六二年「ロシア」の女帝「エリザベス」死し、その姪「ピター」三世「カザリン」二世は即ちこの皇后なり、位に上り、「プロシヤ」と和せしより、形勢全く一變し、翌年「フヘルツス

プロシアの
國力増進

プロシヤの條約によりて、この大戦争の局は結ばれぬ。ここに於て「シレシヤ」は全く「プロシヤ」に歸し、「プロシヤ」は歐洲五大強國の一に數へらるるに至りぬ。「フレデリック」王は、また力を民治に盡し、施設する所少なからず。これより「プロシヤ」の國力は益増進し、「アストリア」と相並びて、「ドイツ」の覇權を争ふに至れり。

マリア・テ
レサの治績

「マリア・テレサ」も亦七年戦争の後、専ら心を内政に用ゐ、殖産を奨励して府庫を充實し、軍備を整頓して精練を極め、當時これに匹敵すべきは「プロシヤ」の軍勢のみなり。まこといふ。されば「フレデリック」王も、これを嘆賞して「實に才能ある婦人は、豪傑にもをさく劣らぬものなりけり」といひしこそ。墺國の普通教育法の制定せられんは、即ち



墺國女王マリア・テ
レサ

歐洲諸國の
アメリカに
於ける領地

またこの治世なりき。

一七八〇年「マリア・テレサ」六十四歳にして歿し、子「ジョゼフ二世」は、これより先、獨帝に選ばれ、遂に奧王の位をも継げり。女子は十人ありしが、「マリア・アントニア・ホット」は、佛國「ルイ十六世」の皇后として、最も著はれたり。

第八章 北米合衆國の獨立

十五世紀の末「スペイン」が始めて「アメリカ」大陸を發見せし以來、歐洲諸國は競うて略地・殖民をつこめき。即ち「スペイン」は「中央アメリカ」、「メキシコ」、「ペルー」、「ナリ」その他「南アメリカ」の諸州を占領し、「フランス」は「カナダ」に於ける

北米に於ける英佛兩國の競争

英國の勝利

英國殖民地の富榮

廣大なる領地を得、ポルトガルはブラジルを取れり。

十七世紀の初に至り、英人はヴァージニアに根據を定め、今日の合衆國の東部地方に殖民地を建て、専ら拓殖の業に従事し、次第に繁榮を増せり。然るに、英國の殖民地は佛國の殖民地と相接し、その境界明かならざるより、紛争常に止まず、且當時、東インドに於ける英佛兩國の競争甚しく、遂に相戦ふに至りしかば、アメリカにても兩國の戦争は開かれぬ。一七五九年に及び、英將「ウォルフ」、「カナダ」の堅城「クベック」を拔きて、佛人の勢力を打破し、これより「カナダ」は長く英領に歸せり。

この時に當り、英國の「アメリカ」に於ける殖民地は十三州にして、その人口は殆ど二百萬に上れり。英國にては、

英國殖民地に課税す

北米殖民の反抗



ジョージ・ワシントン

多年佛國との戦争等にて、財政の困難甚しかりしかば、遂に印紙條例を發布して、米國殖民に課税するに至りぬ。然るに、殖民等は、その不當なることを唱へ、力を極めてこれに反対せしため、この條例は幾もなくして廢止せられたり。

英國政府は、その後、猶茶織布紙等に課税し、強ひて之を實施せんとししかば、米國民大に怒り、一七七五年兵を舉げて英國に反

獨立軍

抗し「ジョージ・ワシントン」を總督とす。翌年各州の代議士「フィラデルフィア」に會し、有名なる獨立の檄文を發して、「アメリカ合衆國」の獨立を告白せり。

英國兵を出して、これを鎮壓せんことをつごめし、雖



(首授社の軍立獨國米)

トツエアフラの國佛

も「ワシントン」能く寡を以て衆に當り、忍耐して屈せず。「フランス」及び「スペイン」も亦援助を與へ、殖民地人民苦戦する。ここ七年に及

北米合衆國の成立

憲法制定

合衆國の隆盛

びぬ。英國は、遂に殖民地十三州の獨立を承認し、所謂北米合衆國起れり。實に一七八二年（我が光格天皇）なり。ここに於て、北米合衆國は新に憲法を議定し、合衆共和政の制を立て、大統領一人を置き、その任期を四年とせり。最初の大統領は即ち「ワシントン」にして、一七八九年任に就けり、即ち佛國革命の初年なり。

「ワシントン」既に大統領となり、財政を整理し、民力の休養と國運の發達とを務めたり。これより合衆共和政の基礎漸く強固となり、繁榮の進歩殊に著しかりき。

「ワシントン」の母は名を「マーリー」といふ。六子ありしが、「ジョージ・ワシントン」は即ちその長子あり。マーリー篤厚にして、智慮深く、子女を教養するに、寛嚴宜しきに適ひ、各々の天才を發揚せしめんことを務

めたり。されば、ワシントンは十歳にして父を喪ひしかど、母の薫陶能く至れりしを以て、遂に世界史上の偉人とあることを得たりき。一七九九年、ワシントンの死後、間もなくしてこの賢母もまた歿しき。年八十七。

「アメリカ合衆國の獨立は、實に近世史上の一大事にし、て、その餘勢は歐洲を動かさしき。佛國大革命の如きも、これが影響を被ふれりといふ。

第九章 佛國の大革命

「ルイ十四世の時代に、佛國は隆盛の極に達せしが、衰亂の兆も既にその間に見れたることは、前に述べたり。さ

革命の諸動
因

れば、ルイ十五世（年即位一七一五）は、死に臨みて、朕が後には洪水あらん、この言を遺しき。當時、佛國に於ては、貴族・僧侶は專横を極め、租税を納めずして、不當の特權を有し、平民は重税を課せられて飢寒に泣けり。財政の困難はこの頃、に及びて益甚しく、行政は全く亂れたり。加之、ルソー、ヴォルテール等の學者は、自由・平等の說を唱へて、社會の革新を促し、北米合衆國の獨立は大に佛國の人心を動かさぬ。かくて、ルイ十六世の即位に及び、遂に一大破裂は生じたり。

「ルイ十六世は、ルイ十五世の孫にして、一七七四年位を繼げり。一七八九年、財政整理の事を謀らんとために、貴族・僧侶・平民の三部より成れる議會を召集せしが、平民と貴

革命の發端

族僧侶との間に紛議起り、平民は別に國民議會を組織して國政を議せんこせり。時に王の處置當を誤りしかば、「パリ」府の暴民等蜂起し、「バスナール」の牢獄を壞ちて、これを焼けり。これ實に大革命の發端なりき。

立憲王政の制定

騷擾は忽ち全國に波及し、亂民は諸地方に起りて、貴族の第宅を焼き、「ヴェルサイユ」の王宮も亦「パリ」亂民の襲ふ所となれり。この際、國民會は貴族及び僧侶の特權を全廢し、國制を改めて立憲王政となし、國王に迫りて新憲法を裁可せしめたり。

過激黨の盛勢

已にして、新憲法によりて、新に立法議會なるものを開設し、以て國政を議せり。この議會は、自ら三派に分れしが、過激共和黨最も勢力を占め、「ロベスピール」「ダントン」「マ

共和政體の設立

ラー等その首領たりき。時に普澳兩國の軍佛國王家の難を救はんこて、佛國に迫りしかば、「パリ」亂民は王宮を襲ひ、王は遁れて議會に走り、却て王權を停止せられ、幽囚の身となれり。

ルイ十六世の處刑

已にして、立法議會解散して、國民集會之に代るに及び、過激黨の勢力益すさまじく、遂に王政を廢して共和政體を立て、又國王ルイ十六世を糾問して、死罪を宣告し、之を斷頭機下に弑せり。實に一七九三年（我が光格天皇）一月なりき。

第一回列國連合

「ルイ十六世弑害の一事は、歐洲諸國の君主を驚かしめ、英國は首唱となりて、歐洲列國の大連合を作り、兵を出して佛國の四境に迫らんこせり。然るに、國內にては、過激

過激黨の暴
横

恐怖時代

黨國民集會の全權を握り、その意に満たざるものは悉く殺戮の禍にあへり。たまく、一少烈女「マラー」を佛國の危急を救はんことを欲し、暴虐の首魁たる「マラー」を



—デルコ・ドツローアシ

に至れり。その他虐殺せらるるもの算なく、國內の慘狀は目も當てられぬほどなりき。所謂恐怖の世は、即ちこ

刺殺せしが「ダント
ン」「ロベスピール」の
徒は益々狂暴を恣に
し、遂に前王后「マリ
ー・アントアネット」
を獄中より出して、
之を死刑に處する

の時のことなり。

佛國革命史上の花と稱せらるる「マラー」夫人の處刑せられしもの時あり。夫人は名を「マラー・ジャン」といひ、一七五四年に生れたり。幼より讀書を好み、「ルソー」等の著書によりて、自由共和の主義に動かされ不幸ある國民を救はんとの念常に燃ゆるが如くありき。二十五歳にして、後日革命史上に有名ある「ローラン」に嫁しぬ。一七八九年革命の端發するや、「ローラン」夫妻は種々の手段によりて革命の思想を弘布せんことを務め、遂に温和ある共和主義を執れる「デロンド」黨の首領に推さるるに至りぬ。この間、夫人は其の熱誠と才氣とを以て、「デロンド」黨の精神とありて、これを統督鼓舞せり。已にして革命の潮勢は愈々急にして殆ど止まる所を知らず、夫人も他の「デロンド」黨員と共に、幽囚の身となり、遂に一八九三年十一月斷頭機下に命を終りぬ。真正の大人は私情を去つて、身は人類同胞に屬するを忘れず、以て報酬を千歳の後に待つ。善を滅ばし義人の血を飲む此の不幸の土をば喜んで去らん。余は此の民の自由をこれ切に祈ると

新憲法の制定

革命の一段落

は、夫人が死刑の宣告を受けしときの言なりといふ。然るに、幾ばくならずして、人民の狂夢もさめて、反動漸く生じ、「ロベスピール」の徒亦断頭臺上に殺され、恐怖時代は、ここに終れり。ここに於て、國民集會は新憲法を定め、立法部を元老院及び五百人議會の二部に分ち、統督五人を置きて行政を掌らしめたり。「フランス」革命ここに至りて一段落をなせり（一七九五年）。

先に、歐洲諸國の連合軍佛國に迫るに當りて、佛國は能く之を禦ぎて勝を得たりしが、後年の大帝王たる、當時の「一少士官」ナポレオン・ボナパルト（一七六八年「シカ嶋」に生る）の出づるに及びて、佛國は却て攻勢を取り、武威を輝せり。事は次章に述べべし。

第十章 「ナポレオン」の覇業(上)

ナポレオン
初度の武功
エジプト征
服

歐洲列國の連合軍は、佛國に對してその志を得ざりしが、英・澳の兩國は猶戰爭をつづけたり。よりて、佛國は先づ「アストリア」を征服せんを欲し、一軍を「ナポレオン」に委して「イタリア」に攻め入らしめぬ。「ナポレオン」が勇名を揚げたるは、この「イタリア」戰爭にして、大勝を得、將に「奥都」「ウイナ」に迫らんとせり。「奥國」乃ち和を請ひ、「上イタリア」及び「ベルギー」諸州領を佛國に讓與せり（一七九七年）。

「ナポレオン」は一旦「パリ」に凱旋したる後、直にまた兵を率ゐて「エジプト」に赴き、次第にこれを征服して、英國に

英佛のエジ
プトに於け
る海戦

第二回列國
連合

ナポレオン
の政權掌握

「インド」この連絡を絶たんとせり。然るに、佛國艦隊が「ナイル」河口に於て英國海軍提督「ホルソン」の爲に殲滅せらるゝに及び、「ナポレオン」は却て歐洲この通路を失へり。
「ホルソン」の勝報歐洲に傳はると共に、英、奧、露、葡等の諸國相連合して佛國を攻め、形勢甚だ危急なり。「ナポレオン」乃ち急に國に還り（一九七九）兵力を以て統督政廳を仆し、議會を解散し、新に憲法を定め、執政官三人を置き、自ら第一執政に任じたりしかば、行政の大權すべてその手に歸しぬ。

時に、英、奧の二國はなほ新政府を承認せざりしかば、「ナポレオン」は直に兵を發して、「ドイツ」に向はしめ、又自ら別軍を率ゐて、「イタリー」に攻め入り、奧兵を逐斥せり、奧帝

列國佛國と
和す

ナポレオン
の政績

ナポレオン
皇帝とある

「フランシス」二世已むを得ずして和を請ひ、「ライン」河左岸の「ドイツ」領を悉く佛國に譲り（二一八〇）翌年英佛兩國間の和議も亦成り、一時全歐洲の平和を見るに至れり。

ここに於いて、「ナポレオン」は大に力を内政に用ゐ、交通を便にし、教育を盛んにし、實業を奨励する等、専ら國利の増進をはかり、また所謂「ナポレオン」法典を編成し、大陸諸國の法律の模範となれり。（度量衡に「メートル」法を用ゐるも、この時よりのことなり。）

人民その功を推して終身執政官となし、つぎて皇帝の位を捧ぐるに至れり。「ナポレオン」乃ち「ローマ」法王を招きて即位式を行ひ、「ナポレオン」一世と稱せり。實に一八〇四年にして、佛國の共和政は一轉して帝政となりぬ。翌年「ナポレオン」は更に「イタリー」の王位をも兼ねたり。



ナポレオン一世



ナポレオンの署名

第十一章 「ナポレオンの覇業(下)」

第三回列國
連合

佛國帝政の興るや、英國主唱となり、第三回の列國同盟を結びて、佛國に抗せり。「ナポレオン」即位の翌年、先づ英露・墮及び「ス・デン」の連合を破らんを欲し、「アッステルリツ」の大戦に於て、墮露の大軍を破れり。これがため、墮國の「イタリ」に於ける領地は更に削られ、「ドイツ」の十六州は「ライン」同盟を組織して、「ナポレオン」をその盟主と仰ぎ、「フランス」二世は「ドイツ」帝位を退きて専ら「アストリア」帝と號したり。然るに、この際、佛西連合の海軍は「トラフルガ」に於て英將「ネルソン」に破られ、佛帝は復英國と海上に争抗すること能はざるに至れり。

一八〇六年「ナポレオン」は「プロシア」に侵入し、普露の

英佛の海戦
— 英の勝利

ナポレオン
の連捷

連合軍を破り、普國領地の半を割かしめたり。「ナポレオン」乃ちその西部に「ウエストフリア」王國を興し、弟「ジェローム」を封じて、「ライン」同盟に加はらしめ、又その東北の地に「ワルソ」公國を立て、これを「サキソニー」に加へたり。

普王「フレデリック・ウイリアム三世」の皇后「ルイザ」賢明にして、義勇の氣象に富めり。先に、奥露の同盟軍が「アウステルリッツ」に於て「ナポレオン」のために大敗を取りしとき、皇后は猶幼き二子を諭して曰く、「汝等今より佛國に復讐すべきことを忘るるなかれ」と、(この第二子は、即ち後年佛國を破り、「ドイツ」帝國を復興せる名君「ウイリアム一世」あり)已にして「ナポレオン」の「プロシア」に侵入してこれを蹂躪するや、普王は「ナポレオン」と「シャルシット」に相會して、平和の條約を結ぶこととなりぬ。當時、皇后は夫王の招に應じて同處に赴き、普國人民のため、良人のために力を盡して論辯する所ありしも、「ナポレオン」は終にこれを聽かず、普國に尤も不利益ある條約は調印せられぬ。しかも「ナポ

ナポレオン
と皇后
ジョセフィン



ジョセフィン

レオンは、後りの謀臣に語りて深く皇后の人物を稱賛せりといふ。皇后は一八一〇年心臓の病にかかり、三十五歳にして歿りぬ。國民皆言ひき、皇后は國家に殉じたまへり。

已にして「ナポレオン」は又「スペイン」王に迫りて、その地を「フランス」に併せ、弟「ジョセフ」を封ぜり(一八〇〇)。然るに、西

國民新王に對して亂を作し、奥國復これに乗じて佛國に敵せしかば、「ナポレオン」は直にこれを破り、地を得て和を講じ、遂に皇后「ジョセフィン」を離別し、奥帝の女

「マリ・ア・ルイゼ」を娶り、佛・奥兩國の連合を成せり。「ジョセフ

ンは智慮深く、貞淑の徳勝れ、ナポレオンはその内助を得たること少からざりきといふ。(ナポレオンが嘗て「ジ・セフィ」に寄せし書中に「予が戦勝を得たるは、これ卿が人心に於て勝利を得たるに因る」といへり)。間もなくして「ナポレオン」は「オランダ」を併せて帝領に屬せしめたり。

この時に當りて「フランス」帝國の版圖は「デンマーク」より「南部」イタリーに跨り、「プロシヤ」の境より「スペイン」に至り、「ナポレオン」の勢威は全盛を極め、その一族并に諸將の各地の王公たるもの二十餘人に及び、西歐の覇權は實にその手に歸せりき。

これより先「ナポレオン」は商業上より英國を苦むるの策を執り、大陸制度なるものを定め、大陸列國の英國と交

ナポレオンの全盛

大陸制度

ナポレオン
征露軍の大
敗

通することを禁止せり。然るに露國獨りその命を奉ぜざりしかば、一八一二年「ナポレオン」五十萬の大軍を率ゐて、之を征せり。露人「モスカウ」の舊都を燒きて退き、佛軍は非常なる艱苦にあひ、死する者三十餘萬、「ナポレオン」も僅に身を以て「パリ」に歸れり(一八一二年十二月)。

「ナポレオン」の大敗するや、歐洲列國群起して佛國に敵し、「ナポレオン」は再び兵を擧げて「ドイツ」に進發せりといへども、英、露、普、奥の連合軍「ライプツォ」に戦ひて敗北せり。つぎて、列國の兵「パリ」に攻め入り、「ナポレオン」に迫りて帝位を退かしめ、「エルバ」島に流し、「ルイ」十六世の弟「ルイ」十八世を立て、佛王とあせり(一八一四年)。

王政復古

ナポレオンの廢徙

列國連合軍の侵入

ナポレオンの歸國

ウオートルの戦
ナポレオン再度の流竄
列國ウインナ會議の決定要項

に佛國に還りぬ。舊臣・殘卒これを歡迎し、ルイ十八世は他邦に遁れ、ナポレオン再び皇帝の位に登れり。時に列國の君主は「ウインナ」に會議を開きたりしが、この報を得て大に驚き、更に連合軍を起して佛國を攻めんごせり。「ナポレオン」之に先んじ、兵を率ゐて「ベルジウム」に入り、遂に「ウオートル」の大戦となりしが、英將「エルリントン」能く戦ひ、佛軍大敗せり（年一八一五年六月）。同盟列國乃ちルイ十八世を位に復し、「ナポレオン」を「セント・ヘレナ」の孤島に流せり。「ナポレオン」同島に在ること六年にして歿す、年五十二。

「ナポレオン」の敗後、列國は再び「ウインナ」に會議を開き、國境を議定せり。即ち佛國は侵略地を返し、墺普の兩國はその舊地を復し、「スエデン」は「ノルウェー」を併せ、「オランダ」に

「ベルジウム」を併せて一王國とし、「ライオン」聯邦は「ドイツ」聯邦となり、「イタリ」の諸小國並に「スペイン」はこれを舊君主に返せり。ここに於て、歐洲は少時の靜穩を得たり。

第四篇 最近世史

第一章 神聖同盟 「アメリカ諸國及び

「ギリシア」の獨立

○神聖同盟
の性質
メツテルニッ
ヒの政策

一八一五年「ウィнна」の會議の後露帝は普王及び奧帝と共に神聖同盟を結び「キリスト」教的の正義・仁愛によりて世界の平和を維持せんことを約し英國以外の諸國はこれに加盟したり。然るにこの同盟を左右せる奧國の宰相「メツテルニッヒ」はこれを以て自由主義の政治運動を抑止するの利器となし諸國の政治に干渉せりき。
これより先「ナポレオン」が「スペイン」の王位をその弟「

○アメリカ
諸國の獨立

セフ」に與ふるや「南・北・ア・メ・リ・カ」に於ける「ス・ペ・イ・ン」の殖民地は之を承認せず殆ど獨立の状態となりしが「ウィнна」會議の後「フェルディナンド」七世の「スペイン」王となるに及び殖民地はその自治を奪はれんことを恐れ本國に向つて叛旗を擧げたり。即ち一八一七年以後「ヴェネズエラ」「ニール」ラ「ナダ」「ラプラタ」「チリ」「ペルー」「メキシコ」等の諸國相つぎて獨立し「スペイン」の領する所は「キューバ」并に「ポルトリコ」のみとなりき。「ポルトガル」領たる「ブラジル」が獨立せるも亦この頃なり。神聖同盟は此等の獨立運動にも干渉せんごしたりしが英國及び北米合衆國が之を妨げしため、その志を得ざりき。
「アメリカ」諸國の狀勢かくの如きに當り歐洲大陸にて

○ギリシアの獨立軍

歐洲諸國人の獨立軍援助

獨立軍の挫折

英露佛三國の干渉

は、ギリシア人も亦トルコの壓制を脱せんとして獨立軍を起せり(一八二一年)。神聖同盟の諸君主はこれを以て不正なる叛亂ありと見たれども、歐洲列國の人民はギリシア同盟義團を設けて援助を與へ、獨立軍の勢日に振ひぬ。然るに、一八二五年に及び、エジプト大守の子イブラヒムは、トルコ帝の命を奉じ、部下の兵を率ゐてギリシアに攻め入り、大に獨立軍を破り、頗る殘虐を極めたり。ことに於て、英國はギリシアの獨立を助けんと欲し、露佛兩國に説きて、その同意を得、相結びてトルコに迫り、ギリシアの自治分離を勸告せしむ。トルコ帝固く執りて聽かず。よりて同盟三國は聯合艦隊をギリシアに送り、ナヴリノに於て、全くエジプトトルコの聯合艦隊を破れり。

三國連合軍
軍とトルコ軍との海戦
露國のトルコに對する開戦
英露將に戦はんとす
和約
ギリシアの獨立確定

既に於て、英國は露國南侵の野心を察し、好をトルコに通せしが、一八二八年、露國はトルコに向つて戦を開き、直に進みて首府に迫りぬ。英國は急に艦隊をマルモラ海に遣はし、英露兩國の戦を見るに至らんとせしが、翌年、アドリアンポリスの和議成れり。これによりて、ギリシアは獨立して立憲王國となり、露國は「ボスフラス」^{ボスフォラス}と「ダーダネルス」^{ダーダネルス}二海峡の通行權及び「モラヴィア」^{モラヴィア}と「ラキア」^{ラキア}の保護權を得たり。神聖同盟全くこゝに破れ、露國は大に勢力を加へ、トルコは衰頹愈甚しくありぬ。

第二章 佛國の政變 「ナポレオン」三世

七月革命

佛王「ルイ」十八世王位に復せし後九年にして歿し、王弟「チャールズ」十世一八二四年に即位せり。「チャールズ」は恣に憲法を變更し、言論出版の自由を妨ぐる等、壓制甚だしかりしかば、一八三〇七月「パリ」に亂民起りて政府を覆し、「オルレアン」公「ルイ・フィリップ」を迎へて王位に即かしめたり。これを七月革命といふ。

七月革命の影響

七月革命の報傳はるや、諸國の人心大に動搖したりしが、「ネザール」ランド王國に於て、「ベルジウム」が「オランダ」政府の壓制に對して叛旗を擧げ、遂に獨立の一王國となりたるも、即ちこの際なりき。

「ルイ・フィリップ」の位に上るや、善政を行はんことを約せし

共和政治の建設
二月革命

ルイ・ナポレオン大統領とある

ナポレオン三世皇帝

にかゝはらず、却て人民の自由を束縛するこゝ革命前に異ならざるに至りぬ。こゝに於て、一八四八年二月「パリ」の府民復暴動を起し、王を英國に逐ひ、假政府を立てて、共和政治の建設を宣言せり。これを二月革命といふ。

既にして、議會は新憲法を制定し、「ナポレオン」一世の甥

「ルイ・ナポレオン」國民の公選によりて大統領となれり。

「ルイ・ナポレオン」は、陰に叔父の偉業を慕ひて、これに倣はんを欲し、つとめて人望を收めたり。然るに、國會はその野心を察し、これに反對せしかば、一八五一年「ナポレオン」

は國會を解散し、大統領の任期を十年と定めたり。翌年

に及び、「ナポレオン」遂に國民大多數の投票によりて、皇帝の位に上り（即ち「ナポレオン」三世）佛國の共和政は一變し

露國のトル
コ侵略

佛英の連合

クリミア戦
争

て、帝政（我が嘉永五年）となれり。この時に當りて、露國は「トルコ」の衰弊に乗じ、英國と共に之を分割せんことを謀りしに、英國はこれを拒みき。



ナポレオン三世

「セバストポールの堅寨を攻め、苦戦すること一年にして、これを陥れたり。露國乃ち和を請ひ、黒海を公開して、諸

然るに、露軍は「トルコ」に侵入し、大に「トルコ」の艦隊を破れり。よりて、佛國は英國と共に「トルコ」に同盟して、聯合軍を送りぬ。一八五四年聯合軍は「クリミア」に上陸し、

國民の貿易に便にし、及び黒海に軍艦を浮べざることを約せり（一八五六年）。

「クリミア戦争と共に、フロレンス・ナイチンゲール女史の名は永く記憶せらるべし。女史は一八二一年に生れ、父なるウィリアム・ナイチンゲールは英國の大地主あり。女史幼より慈仁の心甚だ深く、貧民の慰問、病者の看護等を以て樂みとなしき。よりて、看護學の必要を感じ、獨佛等の諸國を歴遊して、看護法を研究し、又親しく實地の練習にも従事し、十年の後本國に歸りて、看護法の改良に着手せり（一八五一年）。間もなくして、クリミア戦争起りしが、當時野戰衛生隊の準備甚だ不完全にして、英佛の兵士は、負傷戦死の上に、飢餓疾病に斃るもの算なく、慘狀言語に絶えたりき。女史はこれを聞き、自ら戰地に於ける病院整理、衛生監督の任に當らんことを陸軍大臣に請ひて、允可を得、四十餘名の貴婦人より成れる看護隊を率ゐて出發しぬ。到着後、女史は直に病院の看護法を革めて、部下を督勵し、一萬に近き患者を収容して、これが看護に懇切周到を極めしかば、患者は女史を慕

争 埃國との戦

ふこと慈母の如く、これを尊ぶこと神の如くなりきといふ。戦地に在ること殆ど二年にして歸國し、非常なる歡迎を受けしが、直に閑地に退きぬ。爾後女史は數看護衛生に關する書を著はして、この道の指導をあし、亦赤十字社の設立にも力を致せること少あからざりき。女史が博愛の至情と堅實なる忍耐力とは、實に良き勇ましき婦人の貴き模範なりけり。

つぎて、一八五九年には、埃國ミサルヂニア國との間に戦争起りしが、(次章を見るべし)ナポレオンは「サルヂニア」を助けて、大に埃軍を破り、威勢殆ど列國を壓するに至りぬ。

然るに、この時に當り、「プロシヤ」の國勢日に強盛に赴きければ、「ナポレオン」はこれを猜み、陰に機に至るを待てり。たまく、「スペイン」の王位が普王「ウリアム」一世の遠親た

争 普國との戦

ナポレオン三世の降服

佛國の請和

る「レオポルド」に與へられんごするや、「ナポレオン」は、これを以て國力の平均を破るものごし、一八七〇年(我が明治三年)遂に普國に向つて開戦を宣告せり。

佛軍は先づ南「ドイツ」に侵入せしが、普軍の運動甚だ活潑にして、これを撃ち退け、却て佛國に攻め來りぬ。佛軍しばく、敗れ、「ナポレオン」も亦「セダン」城に圍えれ、同年九月、遂に力屈して普軍に降れり。

「パリ」はつぎて普軍の包圍を被ふりぬ。府民死を決して防戦するごご五ヶ月に及びしも、城中食盡き、一八七一年一月を以て降を乞へり。同年五月「フランクフルト」の和議成り、佛國は「アルサス」及び「ロルレーン」の二州を割讓し、三年間に五十億「フラン」の償金を拂ふべきごごを約

共和政とな
る
爾後の進歩

せり。
かくて「ナポレオン」は遂に帝位を廢せられ、佛國は再び共和政となりぬ。「ナポール」大統領となりて、國力の回復を務め、能く巨額の償金を期限内に辨済して、諸國を驚歎せしめたり。爾後、教育の進歩、軍備の擴張等殊に著しく、國運の隆昌なること前日に譲らざるに至れり。

東洋關係要事年表

- 一八五八^年……佛人「サイゴン」を占領す。
- 一八六〇……佛英の連合軍北京に侵入す。
- 一八六三……「ガンボヂア」佛國の保護國とある。
- 一八八三……安南佛國の保護國とある。
- 一八八四……佛國清國と交戦す。

一八九三……佛國「シャム」を迫りて「メコン」河東の地を略取す。

爾後佛國の南亞に於ける勢力益々盛なり。

第三章 「イタリー」の一統

イタリーの
國情
サルデニア
國の振起

一八一五年「ウィнна」の會議以來「イタリー」には、數多の小王國及び小侯國ありて、多くは「アストリア」の壓制を受けたり。されば従來兵を起して自由を回復せんことを圖れるものありしかど、直に奧國の軍隊に鎮壓せられき。この時に當り「サルデニア」にては、英明なる「ヴィクトル・エマニエール」王位に在り、近世有名の政治家「カブール」宰相となりて之を輔け、「イタリー」の諸國中に特出せりき。

一統事業の素地

一八五四年「クリミア」戦争の起るや「サルヂニア」も亦軍を出だし、英・佛と共に「ロシア」を討ち、又「パリ」の列國會議には「カブール」親ら之に臨み、以て「イタリア」一統事業の素地となせり。

諸小國の歸服 埃國との戦争

一八五九年に及び「サルヂニア」は、佛帝「ナポレオン三世」の援助を得て、遂に埃國と戦端を開き、大に埃軍を破れり。「ナポレオン」埃國と和するに及び、埃國は「ロンバルデー」の地を「サルヂニア」に譲り、又「タスカーニー」「モデナ」「バルマ」等の「イタリア」諸國は風を望みて「エマニエル」に屬しぬ。

イタリア王

「ネーポルス」及び「シリ」の王國は、なほ舊態を守りたりしが、「ジッポ」「ガリバルデー」の力によりて獨立し、つぎて「エマニエル」の王國に合併せり。「エマニエル」乃ち「イタリア」

「王」の位に即けり。實に一八五一年なり。

かくて「イタリア」國にて、一統の版圖外に在りしは、埃領「ヴェニス」及び法王領なりしが、一八六六年、普・埃戦争（後章を見よ）の後、「ヴェニス」を埃國より受け、一八七一年、普・佛戦争の後、又「ローマ」の法王領を收め、國都を「フロレンス」より、「ローマ」に遷せり。ここに於て「イタリア」一統の事業全く成り、以て今日に及べり。

一統事業の大成

第四章 普・埃戦争 普・佛戦争

「ドイツ」帝國の一統

三十年戦争以後、「ドイツ」は衰弊甚しく、「ナポレオン二世」

ドイツの國情

の時には、帝國の名さへも失ひき。「ウ・シ・ナ」の會議によりて、「ドイツ」の三十九邦は、「ドイツ」聯邦を形成し、各邦の事はその君主に放任し、「ドイツ」全體に渉るものは、聯邦會議にてこれを議定せりき。

普墺兩國の爭鬪

聯邦の内にて「プロシヤ」及び「ア・ス・ト・リ・ア」最も強盛あり。二國互に、「ドイツ」の覇權を争ひて、相反目せしかば、「ドイツ」國民は國家の統一を熱望せるも、その事久しく成らざりき。然るに、「プロシヤ」は一八二〇年の頃より聯邦諸國と關稅同盟を結び、次第に統一の素地をなせり。

これより先、「ナポレオン」一世全盛時代に、「プロシヤ」は上下一致して、屈辱の耻を雪がんとし、「ス・タ・イ・ン」及び「ハ・ル・デ・ン・ベ・ル・グ」相つぎて政局に當り、財政を整理し、國民皆兵主

普國の振興

義を施行し、又最も國民教育に力を盡くし、その成績漸く見るべきに至れり。一八六一年、「ウ・リ・ア・ム」一世王位に即き、「ビ・ス・マルク」を擧げて宰相となし、又大に兵制を改良し、



世一ムアリイウ

軍備を擴張して、益國力の増進を圖れり。普墺兩國間の感情愈惡し、遂に、兩國が連合して、「デ・ン・マ・ー・ク」より略取したる土地の處分

○普墺戰爭

に關して衝突を起し、兵を交ふるに至りぬ（一八六六年）。この時「イ・タ・リ」は普國を助け、墺國は遂に普軍に敵する

澳國敗れド
イツ聯邦外
に出づ

ここ能はずして、和を請ふ。ここに於て、**奥國**は「**ドイツ**」**聯**
邦より除かれ、「**メー**」**ン**「**河**」**以**北の諸國は普國を推して盟主



クルマスビ

となせり。「**プロシ**
ア」をして「**ドイツ**」の
第一位に登らしめ
しは、實にこの普**奥**
戦争に在りといふ
べし。

かくて、南部「**ドイ**

ツ。諸邦は、なほ分離獨立せしが、全國聯合の希望は、益、高ま
れり。既にして、一八七〇年佛國の「**ナポレオン**」三世が普
國に向つて戦を開くや、「**ドイツ**」の諸邦は、「**ナポレオン**」の野

○普佛戦争

心を察し、皆普國を援けぬ。獨國の總軍八十五萬人にし
て、諸般の準備能く整ひ、參謀長「**モルトケ**」最も軍略に長ぜ
り。獨軍は忽ち獨國內に侵入せる佛軍を驅逐し、「**ナポレ**
オン」を「**セダン**」城に圍みてこれを降し、進みて「**パリ**」を包

撃せり。



軍將ケトルモ

この際、「**ドイツ**」統
一の議漸く成熟し、
一八七一年一月十
九日普王「**ヴィリアム**」
一世は「**ヴェルサイユ**」
ある「**ルイ**」十四世の
大宮殿にて、「**ドイツ**」

普王獨帝と
なる

諸邦の君主より「ドイッ」帝の尊號を受けたり。而して同月廿八日に及び「パリ」城も亦降りぬ。普國が「アルサス」「ロルレイン」の二州を償金五十億「フラン」を佛國より収めたることは前に記せるが如し。こゝに於て三月廿一日普國の首府「ベルリン」に聯邦大會を開きて「ドイッ」憲法を制定し「ドイッ」の統一全く成れり。是より國運日に隆盛に赴き、學術・商工業は長足の進歩をなし、以て現今に至れり。

○ドイッ帝
國一統の大
成

爾後の隆盛

第五章 北米合衆國南北戦争
歐洲諸國かく多事なる間に、北米合衆國にても、亦有名

○南北戦争
獨立後の合
衆國—膨大
富榮

なる南○北○戦○争○は起りぬ。左にその始末を略述せん。北米合衆國は、獨立後益富榮を加へ、その版圖も漸く擴張し、「ルイシヤナ」を佛國より、「フロリダ」を「スペイン」より購入せし外、一八四五年以來「テキサス」「上」「カリフォルニア」「ニュー・メキシコ」を「メキシコ」國より收めぬ。一八五三年（我が嘉永六）に、合衆國の水師提督「ペルリ」が我が國に來り、後遂に互市條約を結びたることは、誰もよく知る所なり。

本邦關係要事年表 （第三篇第一二章末年表參看）

- 一八二四^年……英船薩摩に來る。翌年陸奥に來る。
- 一八三七……米艦薩摩に來り又浦賀に來り砲撃せらる。
- 一八四四……蘭人歐米の形勢を我が國に警告す。
- 一八四六……英艦南海に出沒す。

奴隸問題
戦争の起因

一八五三……米國の、ペルリ我が浦賀に來り、互市を求む。
 一八五四……正月、ペルリ再び來る。七月英船長崎に來り。
 十月露船下田に來り、共に通商を請ふ。
 一八五八……日本開國、米露英佛蘭の諸國に假條約を許す。
 かく合衆國の南部諸州増加するに伴ひて、奴隸問題に
 關して、南北の衝突を起すに至れり。南部諸州は農業に
 従事し、奴隸を使役すること夥しく、北部の諸州は製造・貿
 易を勉め、南部に於ける奴隸の使役を以て、天理・人道に悖
 るものなりとて、甚しくこれを攻撃せりき。

當時奴隸問題の論戰甚だ烈しかりしが、オハイオ州、レーン神學校教
 授、ストウ氏の夫人は、かねて奴隸使役を惡み、また文筆に長じたるを
 以て、アンクル・トムズ・ケビンと題せる小説を著はし、一八五一年六月
 より十月間、某新聞に連載して、奴隸使役の害惡を滿天下の仁人に訴

へぬ。この小説は、後直に書冊として出版せられ、米國及び歐洲に於
 ける發賣高は數百萬部に達し、その他二十箇國の語に譯せられ、到る
 處として讀者の同感を助かさざるはなかりき。實に熱誠のこもれ
 る一枝の筆が人情公義上に致せる効果は、グラント將軍の戰功にも
 勝れりといふべし。

かくて、南部の州民は不平を抱き、聯邦より分離せんこ
 を企てぬ。一八六〇年に「アブラハム・リンコン」選ば
 れて大統領となるや、その熱心なる奴隸廢止論者なりし
 を以て、南部十一州は遂に分立し、首府を「リッチモンド」に定
 め、セフルソン・ダヴス」を推して大統領となせり。

一八六一年（即ち普王「ウィリアム」一世即位の年）南北の戰
 端は開かれたり。これより數年間、戰爭絶えざりしが、一
 八六五年北部の將「グラント」を「リッチモンド」を陥れて、全くそ

南北交戦

南北分離

南部の敗北

の局を結び、奴隷廢止論は全勝を得たり。この戦亂のため、合衆國の困弊は實に非常なりしが、國

○合衆國の
現狀



民の勤勉によりて、産業盛んに起り、殷富世界に比なきに至りぬ。一八九二年には、コロンブズ米國發見四百年の軍將
グランド
記念大祭典を舉行し、翌年萬國博覽會を「シカゴ」に開けり。

第六章 露土戦争 三國同盟

トルコの紊
乱

「トルコ」は「ギリシア」の獨立後も、猶その弊政を改めずし

屬州の叛乱

て、國內の紊亂甚しかりき。一八七五年「ヘルゼゴヴィナ」及び「ボスニア」の二州叛旗を擧げ、その勢甚だ盛んなり。よりて、露國は獨逸の二國と共に「トルコ」に迫り、内政の改良を勸告せしむ。トルコは之を聽かざりき。

露軍のトル
コ侵入

露國は、かねて「トルコ」の侵略を企てたれば、遂に二州の叛民を助けて、一八七七年「トルコ」に向つて開戦せり。露軍は直に進みて「アドリアノール」を陥れて、將さに首府に迫らんごじ「トルコ」の形勢危急となりぬ。「トルコ」は遂に英國の仲裁を請ひしむ。露國は之を容れずして、急に「トルコ」に「サン・ステファノ」條約を結べり（一八七八年三月）。この條約は大に露國の強大を加ふべきものなりしかば、英國は反對を唱へ、これを列國會議に附せしめぬ。

サン・ステ
ファノの條
約

ヘルリン會議

列國會議(土英露佛奧獨以等諸國の大使列席す)は一八七八年六月より七月に亘り、ベルリンに於て開かれたり。英國は「ヂスレリー」を送り、魯國よりは「ゴルチャコフ」使節として出席せり。「ヂスレリー」は能く「ゴルチャコフ」を説服して「ロシア」の企圖を破り、「サンステファン」條約に訂正を加へたり。この條約によりて「セルヴィア」「ルーマニア」及び「モンテネグロ」は獨立國となり、南「ブルガリア」を東「ルーマリア」と稱して「トルコ」の直轄となし、露國は「コーカサス」山南に地を加へ、英國は「サイプラス」島を取り、奧國は「ヘルゼゴヴィナ」及び「ボスニア」を得たり。

露國當時の皇帝「アレキサンダー二世」は、一八八一年(明治十四年)國內の虚無黨に暗殺せられ、「アレキサンダー三世」

露國のシベリア鐵道起工

繼げり。帝は「シベリア」鐵道を起して、益力を東方に用ひたり。一八九四年帝歿し、「ニコラス二世」位に即く。一八九六年「モスカウ」に於て舉行せられたる魯帝の戴冠式には、我が日本も大使を遣はしてこれに參列せしめき。

露土戦争後、「トルコ」の國勢は日に衰弱し、紛亂絶えず、露國はこれに乗じて南下の志を逞しくせん。よりにて、獨國の「ビスマルク」は奧伊二國と結び、所謂三國同盟を作りてこれを防がんとし、露國は佛國と連合して對抗を計り。而して英國は暗に三國同盟を助くる意ありしが如し。然るに、獨國にては、皇帝「ヴィリアム二世」「フレデリック三世」相つぎて歿し、「ヴィリアム二世」即ち現帝位に上るに及び、「ビスマルク」は退職して、外交の政策に變更を生じぬ。

○獨塊伊三國同盟
三國同盟に對する露佛同盟



(帝現ツイド)世二ムアリイウ

清戦争の時に及びては、露・佛・獨の新三國同盟を見るに至れり。

加ふるに、埃・伊の二國は、その内治に困難を極め、外事に與るの違なきより、三國同盟は漸く弛解せり。ここに於いて、日

東洋關係要事年表

(第三篇第六章末年表參看)

一七九〇^年……露人樺太島の侵略を企つ。

- 一八〇七……露人我がエトロフ島に寇す。
- 一八五八……露清間に「アイグン」條約成る。
- 一八六〇……露國「ウスリ」江東の地を得。
- 一八六八……露國「ボハラ」國を保護國とす。これより中央「アジア」南侵の勢益盛んなり。
- 一八七一……露人「ウラジオストク」港を建つ。「イリー」占領。
- 一八七五……日本露國と樺太千島交換を行ふ。
- 一八七六……露國「コーカンド」國を滅す。
- 一八八一……露清間に「イリー」條約締結せらる。
- 一八九一……シベリア「鐵道」の起工。
- 一八九六……露國「旅順口」を清國より借領す。